
FOLKLORE
OF
STONEMASON
IN
KUNISAKI
PENINSULAR
Vol.2

国東半島の石工2

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 報告書第2集

国東半島の石工 II

大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査報告書 第2集

1984

序

このたび、昭和57年度から実施された、国庫補助事業、「国東半島石工民俗調査」が終了しましたので、その研究成果を資料館報告書第2集として、発行することにいたしました。

国東半島の石造品は、磨崖仏をはじめとして、国東塔、板碑、五輪塔、宝篋印塔、層塔など多岐に渡っていますが、その多くは、六郷満山文化と呼ばれた平安期から鎌倉初期のもの、さらに大友氏の豊後入国以来、半島の各地にその勢力を有した豪族たちの影響下に成立したものと思われまゝ。粗朴な中にも風格の高い、これらの石造品は、今なお、見る人の心をなごませています。

しかし、古代から中世にかけての各種石造品を造立した石工たちはもちろん、半島の信仰的基盤の上に、多くの石造文化を遺した近世の石工たちについても、今まで、その実態は、殆ど明らかにされていませんでした。

当館では、1年次に半島西部の、2年次に東部および南部の、石工たちの系譜や技術、生活習俗や信仰形態などを調査して、豊富な石造品との関連を明らかにしました。

前回では、豊後高田市田染の凝灰岩を素材とする石工を中心とし、今回は、日出町豊岡の、安山岩系の石工たちを対象として、その実態を調査し、在銘の石造品と結びつけて、その特色を知ること努めました。また、前回は、近世における石工の系譜と生活実態にウエイトが置かれていましたが、本年は、中世の石工たち、とくに国東塔をその作風別に考察して、時代的変遷を明らかにしたり、大野川流域の宝篋印塔との比較を通して、様式の違いや国東塔との関係を明らかにするなど、新しい分野の解明にも力を尽しました。

広く江湖の御叱正と御指導を賜われれば、幸いと思ひます。

終りに、この調査の指揮をされた主任調査員の染矢多喜男氏をはじめ、調査に従事された調査員の方々、ならびに地元教育委員会や関係者の御協力に対し、厚くお礼を申し上げます。

昭和59年2月

館長 藤原 正教

例 言

- 一、本書は昭和58年度国庫補助事業による「国東半島石工民俗調査」の報告書である。補助事業の実施にあたっては、文化庁の木下忠文化財主任調査官の指導を受けた。
- 一、調査ならびに本書の事業主体は、大分県教育委員会であり、調査実施ならびに本書の刊行は、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館である。
- 一、調査の実施期間は、昭和58年5月から予備調査に入り、同年7月と10月に合同調査を行ない、翌年2月まで補足調査を行なった。
- 一、本調査の調査団の構成は次のとおりである。

調査団長	藤原正教	県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館館長
事務局長	田中巳世毅	同上 総務課長
主任調査員	染矢多喜男	大分県文化財保護審議会委員
調査員	小泊立矢	県総務課県史調査員
	金田信子	国東町歴史民俗資料館学芸員
	甲斐忠彦	県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館調査課長
	真野和夫	同上 研究員
	渡辺文雄	同上 研究員
	山田拓伸	同上 研究員
	段上達雄	同上 研究員
	長谷雄智代	同上 研究調査員

- 一、本書の執筆分担は次のとおりである。

染矢多喜男	第3章、第6章(1)
小泊立矢	第2章第2節
金田信子	第2章第3節(1)~(2)
真野和夫	第2章第3節(3)
渡辺文雄	第1章、第2章第1節
山田拓伸	第5章
段上達雄	第4章、第6章(2)~(3)

- 一、本書の編集にあたって、染矢多喜男主任調査員の指導を受けた。
- 一、本書の編集は段上達雄が担当し、真野和夫、長谷雄智代、吉松祐子が協力した。
- 一、本調査にあたり、杵築市、日出町、国東町、国見町、武蔵町、安岐町、山香町の各教育委員会と日出町史編纂室に協力いただいた。
- 一、本調査に話者などとして、取材協力していただいた方の氏名は次のとおりである。

○話者

日出町豊岡	一宮秋太	明治36年1月15日生れ
〃	一宮 要	明治36年4月1日生れ
〃	吉野一夫	明治41年2月20日生れ
〃	城内貞彦	明治41年生れ
〃	藤田 肇	明治45年1月15日生れ
〃	佐野政喜	明治45年3月31日生れ

日出町豊岡 武野司平 昭和7年5月25日生れ
宇佐市山袋 松本 正
香々地町 板井政吉・ツヤ
○調査協力 日出町史編纂室長 佐藤暁
(敬称略)

目 次

第1章	中世における半島南部の石工	1
1.	西明寺三重塔と工巧上阿	1
2.	国東塔の展開と大工五郎太郎	2
3.	石工在銘宝篋印塔とその形式	5
第2章	近世以降における半島南部と東部の石工	10
第1節	半島南部の石工	10
1.	日出町の石工	11
2.	杵築市の石工	12
3.	山香町の石工	13
4.	その他の石工	14
第2節	半島東部の石工	19
1.	国見町の石工	19
2.	国東町北部の石工	28
第3節	半島東南部の石工	40
1.	国東町南部の石工	40
2.	武蔵町の石工	50
3.	安岐町の石工	56
第3章	日出・豊岡の石工	63
1.	日出・豊岡石工同業組合	63
2.	石工の系譜	65
3.	製品の種類と受注	72
第4章	豊岡の石切場と石工道具	76
1.	石山と石材	76
2.	技術と道具	77
第5章	半島の石切場と石材分析	90
1.	石切場と所在確認	90
2.	石材分析	94
第6章	石工関係資料拾遺	99
1.	宇佐山袋の石工	99
2.	石工板井家法橋補任状	102
3.	日出藩石工関係文書	103

第1章 中世における半島南部の石工

はじめに

杵築市および山香町・日出町からなる旧速見郡（別府市は除外）は、瀬戸内海に突出した国東半島の付根に位置し、歴史的には古代・中世以来さまざまな勢力が錯綜する舞台となった。したがって、この地域の石造文化については、他地域からの種々の影響が考えられる。とくに、人々の信仰への情熱が多く、石造品に結実し、最も充実した石造文化を形成した南北朝時代のこの地域は、大分県下におけるもう一つの主要な石造文化圏である県南大野川中流域と同じように凝灰岩を主体とした独自の石造美術の展開をみせている。

石造品の種類と数が加速度的に増加する近世中期以降は、この地域においてもいくつかの石工集団が成立し、大量の石造品の生産を行なっている。しかし、生産者である石工の名を刻んだ銘品となると、思いのほか少数に限られ、この地域の石工の生産活動の全貌を知るにはほど遠いのが実情である。石工在銘品を通して、この地域での石工集団の系譜を知り得るのは、やはり18世紀以降になってからで、豊岡と藤原の二大拠点を中心に、良質の安山岩を石材として生産を行なった、いわゆる日出石工は主要な集団であり、そのほか八坂・杵築・猪尾などを出身地とする杵築石工および良質とはいえないが、山香産の凝灰岩を石材として成立した山香の石工による活動もみられ、また国東半島全域を活躍舞台として、現在まで生産を続けている田染石工は、この地域でも目立った存在となっている。

中世とくに鎌倉から南北朝にかけての時代は、全国的にみても石造品に対する造型意欲の高まった時期である。それは、経塚造営と同じように、末法思想を基盤とした宗教感情の昂まりを、半永久的な素材である石に投影させた結果にほかならない。宝塔や五輪塔をはじめ宝篋印塔など大量の

石塔類が、未来永劫の記念碑として造立され、わが国史上まれにみる高質の石造文化を形成している。しかし、そのように質・量ともに恵まれた中世石造品の造立を、直接に手がけた石工自身のこととなると、ほとんど解明されていないのが実情である。また、石工の名をとどめた石造品がごく僅少にかざられるのも事実であって、石造品の様式変遷や石工の系譜を研究する者にとっては、いま一つ隔靴搔痒の感を否めない。

大分県下に数多く所在する中世石造品のうち、その製作者である石工の銘をもつものは意外に少なく、県下における主要石造文化圏を形成する県南の大野川中流域と県北の国東半島を中心に約30件ほどが知られるのみである。それを国東半島にかざれば、現在までのところ、13件ほどの石工在銘品が知られているにすぎない（前年度『国東半島の石工Ⅰ』を参照のこと）。そのうち半島南部（実際には山香町のみ）に所在するものは表1のごとくである。

1. 西明寺三重塔と工巧上阿

西明寺三重塔（写真1）は、基礎3段の上に、3段重ねの軸・笠を置く三重塔で、現在は相輪を欠くものの、凝灰岩製石塔独特の刀技の鋭く冴えわたった優品である。石材には、いわゆる田染石に近いやわらかい溶結凝灰岩を用い、緻密できめの細かい彫りをみせている。最上段の基礎は、側面を2区に分けて格狭間を刻み、その上辺には複弁の反花を刻み出す。初重の軸部には、浅く彫沈めた3重の矩形内に、さらに月輪を彫沈め、その中に陽刻した蓮華座上に金剛界四仏の種子を葉研彫にする。2重目、3重目は、同様の矩形内に各々蓮華座と月輪を陽刻する。

この西明寺三重塔の作者としてその名を刻む「工巧上阿」は、凝灰岩の性質を熟知したかなり高度の石造技術を身につけた石工とみられ、基

表1 石造品にみる半島南部の中世石工

造立年	名称	所在地	石工銘
貞和4 (1348)	西明寺三重塔	山香町内河野辻小野	工巧上阿
応安6 (1373)	三社八幡宝篋印塔	〃 西仲尾	石工大工賀安
永徳4 (1384)	塔ノ本国東塔	〃 貫井	大工五郎大郎
(年記なし)	下山宝篋印塔	〃 山浦下山	大工善徳□□



写真 1 山香町 西明寺三重塔



写真 3 豊後高田市 金高墓地国東塔



写真 2 同上三重塔格狭間



写真 4 同上国東塔格狭間

礎側面の、流暢な曲線を描いて膨らみをもたせた形のよい格狭間(写真2)や、しのぎの立った鋭い彫みせる複弁の反花、その強い厚手の軒口をもつ笠の表現などは、この石工の作風の特徴である。

西明寺塔の作風からみて、同じ石工上阿ないしその周辺の石工の手になるとと思われる作品に、永和元年(1375)銘をもつ金高墓地国東塔(豊後高田市平野大曲・写真3)がある。反花のみを残して相輪を欠失してはいるが、全体にバランスのとれた堂々とした名塔である。石材に同じ溶結凝灰岩を用いていることはもちろんだが、基礎を2区に分け、2重に彫沈めた矩形内に刻まれた格狭間

(写真4)の形や写実的で細かな蓮弁の表現、軒口厚く、その強い笠の特徴など西明寺塔との間に層塔と国東塔との違いをこえた表現上の類似性がみられる。貞和4年と永和元年の間の27年間の隔りからすると、あるいは石工上阿の作風を受継いだ次の世代の石工の手になると考えた方が妥当であろうか。

いずれにせよ、石工上阿の製作した西明寺三重塔は、山香町を中心としたこの地域にかなりの数の分布がみられる凝灰岩系石塔の上限であり、同塔を先鞭として、これ以後数多くの凝灰岩系石塔が造立されることとなる。いったい、南北朝時代前期、14世紀の前半という時期は、この地域にお



写真 5 日出町 願成就寺国東塔

ける石工の系譜に変化のあった時期と思われる、それまでの安山岩を素材とした石工にかわって、凝灰岩のやわらかい素材を生かした石造技術を身につけた石工が主流を占めるようになる。西明寺塔を造立した「工巧上阿」も、こうした新しい世代を担う石工たちの一人であったと考えられるのである。

2 国東塔の展開と大工五郎大郎

国東半島南部における国東塔の造立については、鎌倉時代最末期、14世紀に入ってから漸く在銘の遺品をみることができ、そのピークは14世紀の後半にあったと思われる。表2は、この地域に所在する国東塔のうち、在銘のものを造立年代順に列

挙したものである。

応長元年(1311)造立の願成就寺国東塔(写真5)は、国東半島全域の中でも、岩戸寺国東塔(弘安6年・1283)や伊美別宮社国東塔(正応3・1290)などとともに数少ない鎌倉期の在銘国東塔の一つである。基礎3段。最上段の4つの側面には各々3区の格狭間が刻まれる。請花のみの蓮華座は、蓮弁に縦の条線を刻む特徴的な形式を示す。首長の塔身や薄手の軒口が緩やかに上反りする笠などは、この時期の国東塔の特徴で古様である。

この願成就寺国東塔は、その塔身に「応長元年九/月八日大願主/僧栄賢敬立」の刻銘をもつ。この「大願主僧栄賢」については、元徳2年(1330)11月24日の日付のある『宇佐宮政所下知状』(大分県史料(2)、宇佐八幡宮文書の2・97頁)に「弥勒寺供僧栄賢申本物返地神領豊前国江嶋別符藤崎村古園島地参拾代事」とある僧栄賢と年代的にみても同一人物とみられ、国東塔の造立に宇佐宮弥勒寺の僧が関与している例として興味深い。

この願成就寺塔と同一系統の石工の手になるとみられるものに山香町大字小武にある中畑国東塔(写真6)がある。笠を失うなど破損著しい塔であるが、その勇壮豪快な造型は、願成就寺塔にひけをとらない名塔である。この塔の形式を願成就寺塔のそれと比較すると、全体のプロポーションはもちろんのこと、基礎側面に彫沈めた3区の格狭間の形から蓮華座請花の蓮弁に縦の条線を入れる手法、首の長い塔身、露盤・蓮座を含めた相輪の刻出など細部にいたるまで願成就寺塔と瓜二つであり、同一系統というよりむしろ同じ石工の手になるものと考えられる。願成就寺塔より一まわり大きいこと、より緻密な構造をもつ(願成就寺塔の蓮華座が請花のみであるのに対して、この塔は反花まで揃っており、より丁寧な造型といえ

表2 半島南部の中世在銘国東塔

造立年	名称	所在地	石材他
応長1 (1311)	願成就寺国東塔	日出町大字藤原字赤松	安山岩
正慶2 (1333)	長者墓地国東塔	山香町大字山浦字原	凝灰岩(正慶2年は追刻カ)
観応3 (1352)	泉福寺国東塔	“ “ 字長田	凝灰岩
応安5 (1372)	小谷観音堂国東塔	“ 大字内河野字小谷	“
“ 7 (1374)	金比羅社国東塔	“ 大字野原字西野原	“
永和1 (1375)	重永薬師堂国東塔	“ 大字日指字重永	“
“ 4 (1378)	下川久保地藏堂国東塔	日出町大字藤原字下川久保	“
永徳4 (1384)	塔/本国東塔	山香町大字野原字貫井	“ (大工五郎大郎)



写真 6 山香町 中畑国東塔

る) ことなど、この石工の最も充実した時期の造立といえるだろう。

ところで、鎌倉末期の造立である願成就寺国東塔や中畑国東塔が、岩戸寺国東塔を先駆とする初期国東塔の古様さを継承しているのに対して、観応3年(1352)の泉福寺国東塔以降の南北朝期の在銘塔は、明らかにそれらとは異なった様式を示している。石材は、安山岩から凝灰岩にかわり、塔の規模も小振りのものが多く、初期国東塔のもつ気宇の大きさは失なわれている。また、石塔各部分の形式上の特徴についても、さまざまな変化がみられ、

- ①宝珠に火焰をとまなわないもの
泉福寺国東塔・小谷観音堂国東塔・金比羅社国東塔
- ②笠に極型の造出しのあるもの
小谷観音堂国東塔・金比羅社国東塔・塔ノ本国東塔
- ③蓮弁を省略するもの
金比羅社国東塔
- ④基礎に格狭間を刻まないもの
泉福寺国東塔・小谷観音堂国東塔・金比羅社国東塔・重永薬師堂国東塔・塔ノ本国東塔(格狭間を画する矩形の



写真 7 山香町 塔ノ本国東塔

みを線彫りする) など総じて省略化の傾向にあるといえるだろう。これら一連の凝灰岩系国東塔がもつ諸特徴は、それらを造立した石工たちが、願成就寺塔をはじめとする鎌倉末期の国東塔を造立した石工たちとは、その系統を異にすることを示している。

永徳4年(1384)銘の塔ノ本国東塔(写真7)を造立した「大工 五郎太郎」は、その名から推測されるように、僧籍にはない俗人の石工であったと思われる。また、この五郎太郎は、応安8年(1375)に豊後高田市大字平野にある熊野墓地国東塔(写真8)を刻んだ「大工道心五郎太郎」と同一人物であるとみられ、応安8年から永徳4年まで少なくとも10年間の活躍期間が知られるのである。

両塔ともに破損が著しい(熊野墓地の方は先年の修理で旧規に復している)が、各部分に溶結凝灰岩のやわらかい材質を生かした優れた彫刻をみせている。とくに、蓮弁の迫真的ともいえる緻密な表現、厚手の軒口に極型の造出しのある笠の形など両塔の作風は酷似しており、同一石工の手になることは間違いない。ただ、熊野墓地塔が、その基礎に格狭間を陽刻するのに対して、塔ノ本塔は、浅い条線で区画を示すのみで格狭間を刻まな



写真 8 豊後高田市 熊野墓地国東塔

いのは相違している。両塔の9年間という年代差からすれば、石工五郎太郎の作風が省略化へ向った結果であるといえるのではあるまいか。

一連の凝灰岩系国東塔の中にあつて、より緻密で優れた作品を残した石工五郎太郎は、年代的には西明寺三重塔を刻んだ石工上阿の次の世代にあたり、両者の作風の近似からは、あるいは上阿の石彫技術を学んだ石工であるかもしれない。ちなみに、熊野墓地国東塔を造立した応安8年と大曲金高墓地国東塔の永和元年は同じ年にあたる。

前述したように、南北朝という時代は、この地域の石造美術の展開にとって、一つの転換期であったと考えられる。西明寺三重塔を造立した「工巧上阿」を先鞭として、凝灰岩系の石彫技術を身につけた石工たちが活躍した時期であった。国東塔にかぎらず、この時期の凝灰岩系の石塔数は、無銘のものまで含めると30数基にのぼり、かなりの大量生産が予想される。それらを造立した石工



写真 9 山香町 下山宝篋印塔

の多くは、塔ノ本国東塔を造立した「大工 五郎太郎」に代表されるように、おそらくは石塔造立を業とする俗人の石工、ないしそれに近い存在であったと考えられる。彼らの手になる石塔群は、初期国東塔におけるような、初発性としての雄大さ、気宇の大きさといったものは失なっただけでも、信仰の永遠の表徴としての石塔を身近なものとしたことは特記さるべきであろう。

(3) 石工在銘宝篋印塔とその形式

中世の国東半島では、石塔といえば国東塔が主流であったようで、宝篋印塔が造立されるようになるのは、在銘品から判断するにすぎず、1370年代以後のことである。大分県下における宝篋印塔については、残念ながら国東半島よりも県南、とくに大野川中流域を中心とした石造文化であったようで、造立年代の古さ・遺品の数・石彫技術など、あらゆる点で他地域を凌駕する。大野町大字土師

表 3 半島南部の中世在銘宝篋印塔

造立年	名称	所在地	石材他
応安6 (1373)	三社八幡宝篋印塔	山香町大字野原西仲尾	安山岩(石工大工賀安)
永徳3 (1383)	下仲尾地藏堂宝篋印塔	下仲尾	凝灰岩(大工善徳)
康応2 (1390)	下川久保地藏堂宝篋印塔	日出町大字藤原下川久保	凝灰岩



写真 10 下山宝篋印塔石工刻銘

字川面にある県下最古銘の貞和2年（1346）銘宝篋印塔を皮切りに、14世紀後半を中心に活躍した「石工玄正」系統の宝篋印塔を盛期として、多数の優れた名品が残されている。県南の宝篋印塔が、雄大かつ規模の大きなものが多く、細部のつくりにしても丁重で細密な表現をとるのに対して、国東半島のものは、小振りで簡素な造型のものが多い。

国東半島南部に所在する宝篋印塔のうち、造立年の明らかな作品は表3のとおりである。

これら3基の宝篋印塔は、いずれも造立年銘をもつこと、部分的な欠損はあるものの、基礎から相輪まで完備していることなどから、当地域の宝篋印塔の様式変遷を知る上での規準作となるものである。

従来無銘とされてきた山香町大字山浦の下山にある下山宝篋印塔（写真9）は、今回の調査で、基礎2面に上下2段10行ほどの結縁者銘（墨書）と2行にわたる石工銘（刻銘）があることがわかった。墨書銘の方は、磨滅によって「源四郎」ほか数人の人名しか判読できないが、刻銘の方は、かなり明確に「九月十一日／大工善徳□□」と判読される（写真10、造立の年号は当初からないようである）。石材は、西明寺三重塔などと同じ溶結



写真 11 山香町 下仲尾地藏堂宝篋印塔

凝灰岩である。相輪下部に小蓮華座をもうけているのは、後述の三社八幡宝篋印塔や下川久保宝篋印塔とは異なり、通常の宝篋印塔と同じであるが、国東半島所在の宝篋印塔に通有の形式である無地の塔身を笠および基礎の造出し部分にはめ込む形式とも異なり、2重に彫沈めた矩形内に月輪を陰刻した塔身を笠と基礎ではさむかたちをとるのは特徴的である。

この下山宝篋印塔とまったく同じ形式をもち、同じ石工の手になるとみられるものに、永徳3年（1383）の銘をもつ下仲尾地藏堂宝篋印塔（写真11）がある。下山塔と同じく溶結凝灰岩製であり、塔身に二重矩形と月輪を刻むなど、全体のプロポーションから細部の表現にいたるまで下山塔に酷似しており（下山塔が月輪内を無地とするのに対して、この方は大日・釈迦・薬師・観音の種子を陰刻する）、この塔もおそらく大工善徳の作とみて間違いはない。しかし、この善徳が創造した他に類例をみない優美な形式の宝篋印塔は、下山塔と下仲尾塔の2例を遺すのみで、これ以後の宝篋印塔の展開の中に継承されることはなかったようである。

応安6年（1373）、「石工大工賀安」は、現山



写真12 山香町 三社八幡宝篋印塔



写真13 日出町下川久保地藏堂宝篋印塔



写真14 大田村龍蓮寺宝篋印塔



写真15 杵築市本庄路傍宝篋印塔



写真16 杵築市杵築城公園宝篋印塔

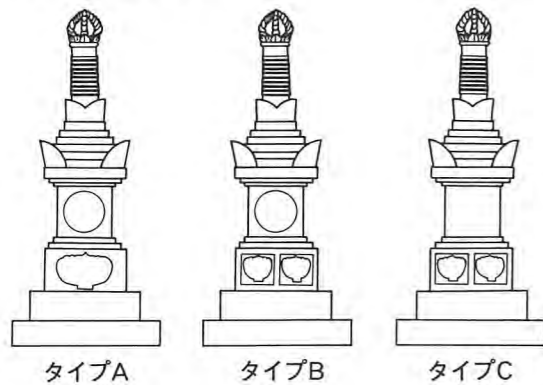


写真17 日出町 宝積寺宝篋印塔

表4 相輪下部に三角突起をもつ宝篋印塔の3つのタイプ

○タイプA (塔身に月輪を彫沈め、基礎に格狭間1区を彫る)	
①下川久保地藏堂宝篋印塔 (写真13)	日出町大字藤原字下川久保
②龍蓮寺宝篋印塔 (写真14)	大田村大字波方字赤水
③本庄路傍宝篋印塔 (写真15)	杵築市大字八坂字本庄
④杵築城公園宝篋印塔 (写真16)	杵築市大字杵築杵築城内 (旧阿弥陀寺)
⑤朝日寺宝篋印塔	杵築市大字南杵築字生地
(三角突起を含めて相輪を欠失するが、その様式から一連の特異形式の印塔と考えられる)	
⑥宝積寺宝篋印塔 (写真17)	日出町大字大神字軒ノ江
○タイプB (同じく塔身に月輪を彫るが、格狭間は2区とする)	
⑦迫地藏堂宝篋印塔	杵築市大字馬場尾字迫
⑧生桑薬師堂宝篋印塔	〃 大字八坂字生桑
⑨大儀寺宝篋印塔	〃 〃 字熊丸
○タイプC (塔身無地で、2区の格狭間をもつ)	
⑩密伝寺宝篋印塔	〃 大字熊野字年田
(現在この塔の相輪は、同所にある国東塔と入替っている)	
⑪宝福寺宝篋印塔	〃 大字溝井字溝井

図1 同上模式図



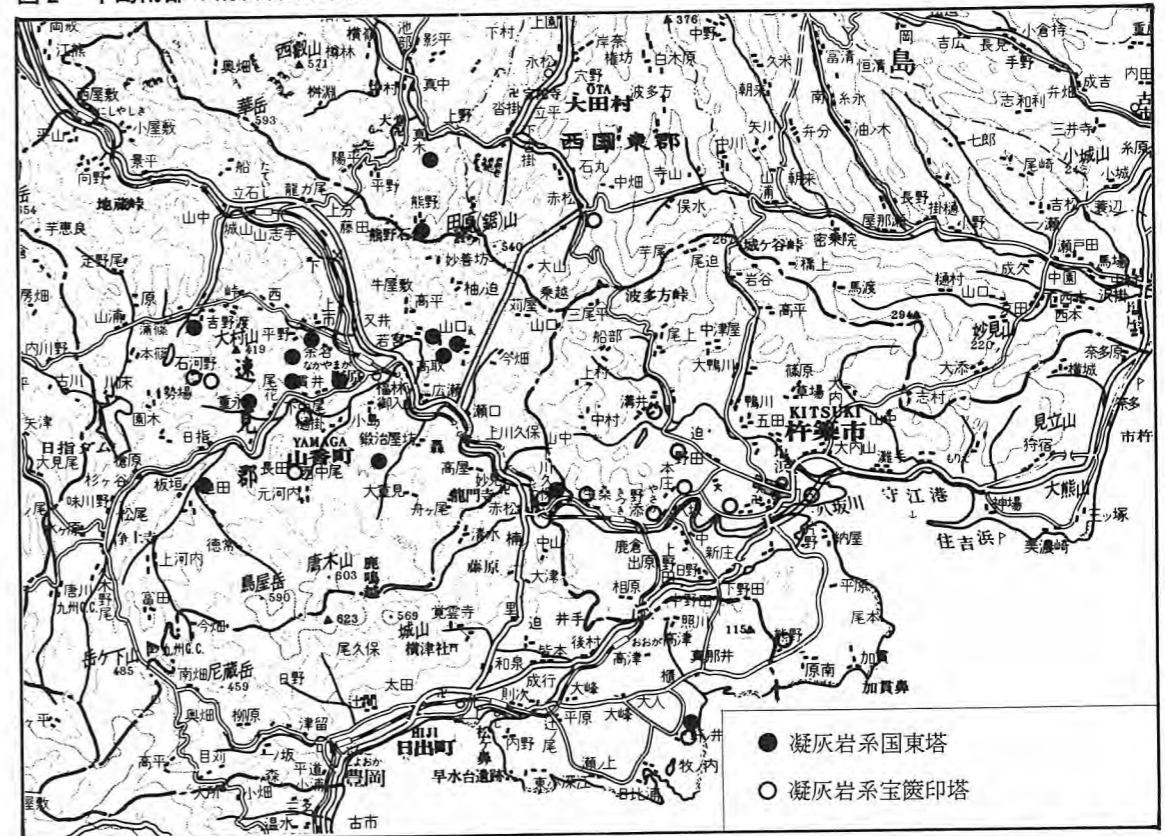
香町西仲尾の山中に、特異な形式の宝篋印塔を造立した。この三社八幡宝篋印塔 (写真12) は、この地域を含めた国東半島全域を通して、最古銘の宝篋印塔である。基礎2段の上に1段の造出しをもうけ、無地の塔身をのせるが、笠上の隅飾突起は小さく、相輪上部の請花を四角形にするなど、通常の宝篋印塔とは一風変わった形式を有している。さらに、この宝篋印塔の最も目立った特徴は、相輪下部に通常の蓮華座ではなく、三角形状の突起をつけることである。この形式の宝篋印塔は、これ以後日出町下川久保にある康応2年 (1390) 銘の下川久保地藏堂宝篋印塔 (写真13) を唯一の在銘塔として、半島南部に集中的に所在する。この

三社八幡宝篋印塔を初見とし、半島南部で流行した特異形式の宝篋印塔も、どうやらその源流は県南にあったようで、緒方町大字文化の犬塚にある文和2年 (1353) 銘の宝篋印塔は、同じように相輪下部に三角突起をもつもので、三社八幡塔に20年、下川久保塔には37年先立っての造立である。

今回の調査で見出した、国東半島南部に所在 (杵築市が大半である) し、相輪下部に三角突起をもつことを共通項とする宝篋印塔は、みな凝灰岩製であること、笠や基礎の幅が狭く、全体としてたて細のプロポーションをもつなど、多くの類似した要素をもっており、康応2年 (1390) の下川久保塔を規準として、その前後そう隔らない時期に造立されたと考えられる。しかし、計11基にのぼる一連の宝篋印塔も、その形式上の特徴から、大きくは3つのタイプ (表4・図1) に分類することができる。もちろん、この分類は各塔がもつ違った形式上の共通性を規準としたものであって、同じタイプの中でも細部の形式を異ならせる部分があることはいうまでもない。

これら宝篋印塔のうち、タイプAの①~④は、月輪内を無地にするもの (②・③・④) と金剛界四仏の種子を刻むもの (①)、笠上隅飾突起に月輪を刻むもの (①・③) と渦巻文を刻むもの (②・④) など、細部の形式的相違はあるものの、格狭

図2 半島南部の凝灰岩系国東塔・宝篋印塔の分布



間の形をはじめ塔全体のプロポーションまで、兄弟塔といえるほど類似しており、各々①の下川久保塔 (康応2年・1390) を規準に相前後する時期の、それも同一系統の石工たちの手になるものと思われる。中でもとくに、下川久保塔と龍蓮寺塔 (写真14) は、隅飾突起の文様が異なるほかは、格狭間の形はもちろんのこと、相輪の刻出や隅飾突起の反り具合など細部にいたるまで酷似しており、おそらく同一石工の作とみて間違いはない。

タイプAの⑤・⑥とタイプBの5基は、格狭間を1区にするか2区にするかの違いはあるが、月輪や格狭間の外郭を矩形に彫沈めるなど、上記①~④とは異なり、より丁重・緻密な形式がみられ (写真17参照)、やや遡る頃の造立とみられる。

タイプCは、塔身を無地とするなど、国東半島所在の宝篋印塔に通有の形式を混在させ、石工系統の違いを予想させるが、とくに⑩宝福寺の印塔は、細部の造型やプロポーションに時代の下降からくる鈍化がみられ、室町時代になってからの造立と思われる。

このように、三社八幡宝篋印塔に端を発して、次々と造立されたこの特異形式の宝篋印塔は、あ

たかも一連の凝灰岩系国東塔と相前後する時期、南北朝期後半の約20年間に集中しており、これら宝篋印塔も同じ凝灰岩製であることを考えれば、あるいは、国東塔から宝篋印塔への石塔形式の変化が、同じ凝灰岩系の石工系統のなかで行なわれたことを示しているのではあるまいか。いずれにせよ、国東塔と宝篋印塔の双方において、国東半島の他地域とは明確に区別される、凝灰岩を石材として独自の形式を生み出した石工集団がこの地域に存在したことは特筆すべきである。

第2章 近世以降の半島南部と東部の石工

第1節 半島南部の石工

はじめに

江戸時代も幕藩体制が確立する17世紀後半頃になると、石造品もその種類と生産量が急激に増加する。石造文化における中世と近世を区別する契機は、あるいは石造品の種類の変化に求められ、またあるときは生産量の増加に求められるであろうが、石造品の生産主体すなわち石工の側からみれば、それは石工の身分あるいは属性の変化に求めるべきであろう。

前述のように、在俗の石工については、すでに南北朝後半頃からすでにその発生の端緒はみられるのであるが、「大工」とか「大巧」・「工巧」といった呼称からも推察されるように、それは一般的技術者としての大工などとは明確に区別された存在ではなかったことを示している。石造品の生産を専業とする、いわば職人としての石工の発生は、やはり世情の安定と生産力の増強にともなう、技術者たちの分業が進む江戸時代まで待たなければならない。

国東半島南部には、昨年度調査を行なった田染の石工のように、大集団を形成するほど多人数を

擁した石工の集団は成立しなかったようである。しかし、大集団とまではいかなくとも、杵築市・日出町・山香町の各々に、小規模ではあるが石工たちの活動はあったようで、各所に散在する石造品にその名を残している。とくに、江戸時代末期以来近年にいたるまで、その系譜が続いている日出の石工集団は、この地域では最も多くの石工たちを擁したことが知られている。

図3は、この地域の石工在銘品にみられる近世および明治以降の石工の出身地と、石工在銘品の分布状況を示したものである。これによると、山香の立石・倉城・山浦の例を除いて、その他の石工の出身地のほとんどが国東半島の南岸沿に点在していることがわかる。これは、重い石材や製品を運搬する手段として良港に近いことが石工集団成立の重要な立地条件の一つであったことを示唆している。昨年度の田染石工のように、もちろん良質の石材の産地（石切場）を擁していることが最大の条件であることに間違いのないのであるが。

日出の石工の場合は、その条件の両方を兼ね備えた例といえる。覚雲寺・豊岡・堀・平道のいずれ

図3 半島南部の石工出身地と在銘品の分布

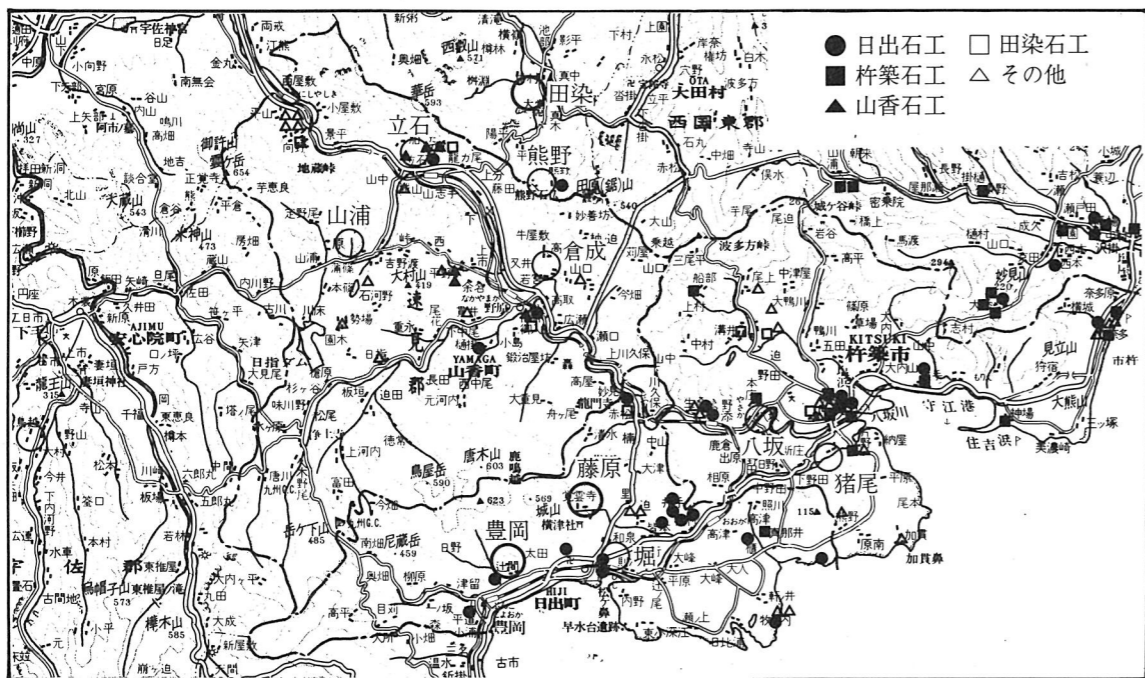


写真 18 山香町 樋掛御堂石段

の石工集団もその後背地に桃ノ木・一目城・中ダネといった良質の安山岩を産する石切場を持っていたと同時に、別府湾の中でも古くからの良港として栄えた日出港を真近に擁していたことが、販路の拡張を可能とし、半島南部では他に類例のない発展を遂げさせたのではあるまいか。日出石工の在銘品の分布状況を見ると、日出町を中心に杵築市・安岐町の海岸部一帯に広く分布している。遠くでは、国東町や宇佐市・豊後高田市・山香町などに点在する例もあるが、田染石工の製品が国東半島中央部からその周辺に分布するのに対して、その南側、半島南部の海岸寄りの地域を主な活動圏としたようである。

杵築の場合、藩自体の石造品需要の多くは、外部の石工（とくに花崗岩を石材とする大坂の石工）に頼ることが多かったふしがある。在地の石工については、漸く幕末あたりから八坂川右岸の河口近く、猪尾村（現杵築市大字猪尾）を中心に、八坂村・年田村などの石工の活動がみられる。石切場の所在を確認できない現在、即断はできないが、杵築藩時代から引続いて、外部から石材の供給を受けていたのではあるまいか。ちなみに、石工在銘品にみるかぎり、杵築の石工たちが用いた石材は、日出の石切場で産するものとよく似た、良質



写真 19 国東町 桜本宮仁王像（阿形）

の安山岩であり、また中には半島内では産しない花崗岩を用いた例（杵築市南台の稲荷社燈籠・明治44年、石工猪尾数太郎作）もある。杵築石工の在銘品は、日出町を除いた半島の南岸、杵築市と安岐町のみに限られ（日出町大神八幡社の大正10年銘鳥居の八坂村石工坂本多吉が1例あるのみ）、日出石工との競合も考えられ、あまり広汎には分布していない。

山香町には、今でも山浦の勢場や石河野に良質とはいえないが凝灰岩の石材を産する石切場があり、石工集団の存在も予想されるのであるが、現在までのところ山香の石工とわかる近世以降の在銘品は、立石と山浦の石工のものが各2件、倉成の石工のものが1件判明しているにすぎない。安心院や田染・日出など隣接地域の石工の在銘品が点在するところを見ると、あるいは山香の石工は、その銘を残すような製品をつくらなかったのかとも思われる。ちなみに、現在の山浦の石切場で産する石材（凝灰岩）の多くは、主に石垣積用の間知石に用いられているとのことである。

以上のように、近世以降における国東半島南部の石工集団のうち、日出の石工たちが他地域の石工に群を抜いて成長・拡大していったのは、良質の石材を豊富に産する石切場をもち、製品の運搬

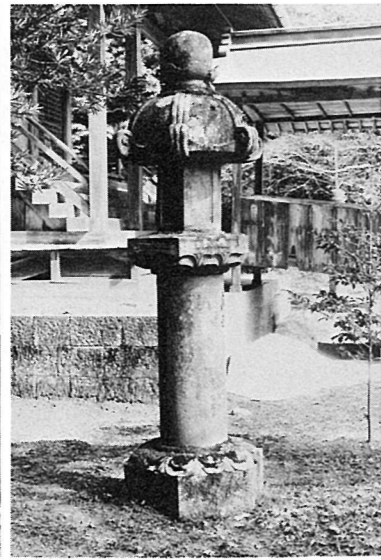


写真 20 山香町 延隆寺石塔 写真 21 杵築市 八坂阿蘇神社燈籠 写真 22 日出町 豊岡天満宮狛犬

手段としての港湾を身近に擁するという、立地条件に最も適った石工たちであったからにはかならない。

近世以後の国東半島南部(杵築市・山香町・日出町)において、石造品に石工銘を確認できるようになるのは、18世紀に入ってからで、享保10年(1725) 銘の山香町大字立石の長流寺にある地藏石塔「石工 源左衛門 林右衛門」が初見である。また、明らかに石工の出身地の知れるのは、同山香町大字野原字掛樋の御堂にある明和3年(1766) 銘石段の「覚雲寺邑 石屋五介」が初見である。これ以後多数の石工在銘品に恵まれるようになるが、それを造立年代順に示したものが表6である。以下在銘品の上からは、いささか散漫な感じをまねがれないが、これら石工たちの系譜およびその作品について石工の出身地別にとりあげてみることにする。なお、日出石工の詳細な系譜については、別項で論述されるので、それを参照していた

だきたい。

1. 日出町の石工

近世の日出石工については、大きくは津嶋村(現大字豊岡のうち)と覚雲寺村(現大字藤原のうち)を本拠地とする二つの系統があった。在銘品の上からは、後者の覚雲寺村系統の石工が先行しており、前出の山香町樋掛の御堂にある明和3年(1766) 銘の石段(写真18)に、「覚雲寺邑 石屋五介」とあるのが初見である。一方、津嶋村の石工については、文政8年(1825)、「津嶋曲木 元助」なる石工が、日出松屋寺に如来像を刻んでいるほか、天保13年(1842)には、同じく津嶋村の石工「伊八郎」が安岐町大添の妙見社に常夜燈を造立している。伊八郎については、辻間の建福寺にある師匠墓に「一宮伊八郎は曲木の辰右衛門の末男なり」とあることから石工一宮家の出自であることがわかる。

ついで、安政4年(1857)には、伊八郎の弟と

表5 近世日出石工の在銘品

造立年	種類	石工銘	所在地
明和3 (1766)	石段	覚雲寺 石屋五介	山香町大字野原樋掛のお堂
文政8 (1825)	如来坐像	石工津嶋曲木元助	日出町大字日出松屋寺
天保4 (1833)	観音立像	石工是永宇佐吉同所安吉	〃 大字鳴川宝泉庵
〃 13 (1842)	常夜燈	日出津嶋村伊八郎	安岐町大字大添妙見社
嘉永6 (1853)	石段	石工軒井村軍兵	日出町大字深江塩屋浜住吉神社
安政4 (1857)	燈籠	一宮覚之丞作之	〃 〃
万延1 (1860)	仁王像	日出一宮正行作	国東町大字川原桜本宮
文久3 (1863)	仁王像	日出一宮正行	豊後高田市大字平野胎蔵寺



写真 23 杵築市 下原天満宮臥牛像

いわれる「一宮覚之丞」すなわち一宮正行(吉野家に養子にいったという)が日出町塩屋浜の住吉神社に燈籠を造立している。一宮正行のいた幕末から明治初頭にかけては、津嶋石工の最も活躍した時期であったようで、とくに正行の活躍はめざましく、兄伊八郎との合作とされる宇佐市東光寺の五百羅漢をはじめ、万延元年(1860)には国東町の桜本宮に仁王像(写真19)を、文久3年(1863)には豊後高田市熊野の胎蔵寺に同じく仁王像を刻むなどかなりの力作を残している。彼の手になる仁王像は、国東半島の他のどの仁王像とも異なり、独自の写實的作風を完成している。顔から胸・四肢にいたる筋肉のモデリング、腰裳や天衣の薄肉彫の流れるような衣文表現など、かなり手慣れた彫技を示し、刻銘に「石工一宮正行」とせず「一宮正行作」とするあたり、自らの腕に対する自負心がうかがえよう。

明治以後の日出石工の活動については、先ず藤原村の石工藤井増太郎と同友次郎および長野竹五郎が、明治13年(1880)に山香町立石の延隆寺に、山香の石工と合作で法華経の供養塔(写真20)を建立している。それは、数メートルの高さに及ぶ堂々とした印塔形式の塔で蓮弁の彫出などに日出石工特有の粘りをみせている。このうち藤井友次郎は、明治30年(1897)に安岐町築瀬の路傍に石碑を建てている。また、この間これも藤原村の石工である安部太市が、明治27年(1894)日出大神の井手八幡社に鳥居を建造している。

豊岡の石工については、赤山安太郎なる石工が明治29年(1896)杵築神社に、翌30年には安岐町西本の剣大明神に各々石祠を建立している。さらに、大正3年(1914)には杵築市八坂の阿蘇神社に一宮助八と吉野栄の競作になる燈籠一対(写真

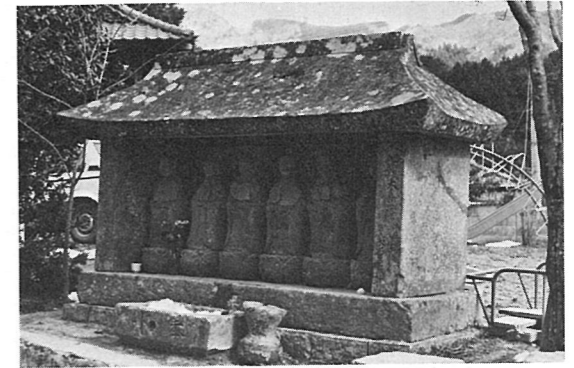


写真 24 山香町 五徳寺六地藏石祠

21) が造立され、昭和2年(1927)と同9年には、一宮順太が杵築の奈多宮と日出若宮八幡社に各々狛犬1対を造立している。

豊岡や藤原以外の日出石工では、明治19年(1886)、平道村の石工阿部莊五郎が、杵築市下原の天満宮に、杵築猪尾村の石工木元周作と鳥居を共同製作している。また、日出の堀を本拠とし、大正年間から昭和初期にかけて広範に活躍した石工に長野陽、同重道の兩名がいる。陽の方は、石像や燈籠・鳥居など変化に富んだ作域をみせるが、重道の方は、どういうわけか狛犬ばかりを造っており、在銘品だけでも8対にのぼる。長野重道の狛犬(写真22)は一宮順太のそれとは異った作風を示し、あまり優れた作域とはいえないが、一つの定型をつくり出している。

2. 杵築市の石工

近世の杵築には在地の石工がいなかったのではないかと、というのが従来の考え方であった。なるほど、杵築市にかぎらず、半島の東側の海岸部にある神社や仏閣には、当地方では産出しない花崗岩製の石造品が多く、安永2年(1773) 銘の杵築若宮八幡社の燈籠に「石工大坂住 和泉屋仁右衛門」とあるように、関西系の石工の製品が大量に入っている(国東町興導寺の天保7年・1836の仁王像には、「石工大坂和泉屋平右衛門」とある)ようである。

しかし、今回の悉皆調査の結果、小規模ではあるが確かに石工の存在がみとめられた。杵築市祇園の天満宮にある天保10年(1839) 銘の臥牛像(写真23)は、「頭領 猪尾啓三郎」・「年田村 廣蔵」両石工の作であり、後者は明らかに杵築を住地とする石工であり、前者もその名から現杵築市大字猪尾を住地とする石工(同じ天満社には、明治19年、猪尾村の石工木元周平作の鳥居がある)



写真25 山香町八旗八幡宮常夜燈 写真 26 日出町 牧峯神社石祠 写真27山香町小武寺仁王像(阿形)

である可能性が強い。この猪尾啓三郎は、また安岐町大字大添の妙見社にある嘉永2年(1849)銘の臥牛像にもその名がみえている。そのほか、安岐町大字中園の歳神社の常夜燈(弘化5年・1848)を造立した「石工 杵築 清水次□□・永岡孝之進 寿明」や日出町塩屋浜の住吉神社の石段(嘉永6年・1853)の「石工 八坂村 累蔵」の例もあり、近世の杵築石工の存在を立証するものである。とくに、天保10年の臥牛像の石工猪尾啓三郎は、明治22年(1889)の市宮八幡社鳥居(杵築市大字船部)を造立した「棟梁 猪尾逸八」の祖父、明治44年(1911)の稲荷社燈籠(杵築市南台)を製作した「石工猪尾数太郎」や大正10年(1921)、安岐町大字下原の天満社に石碑を刻んだ「石工キツキ 猪尾虎夫」の祖々父にあたると思われる。

明治以後の杵築石工については、上記猪尾姓の石工以外にも、八坂村の坂本多吉、杵築町の堀内儀市が大正年間に、同じく杵築町の河野武一、同義雄が昭和上半期に活躍している。

3. 山香町の石工

中世とくに南北朝を中心に、あれほど優れた石造文化の展開をみせた山香も、近世以後においては、あまり目立った石工の活動はみられなかったようである。しかし、山香町立石の五徳寺にある寛政6年(1794)銘の六地藏石祠(写真24)にみえる「石工 山口村清兵衛」や同八幡森の八旗八幡宮の天保2年(1831)常夜燈(写真25)を造立した「石工 倉成村伊平治」、明治13年(1880)日出藤原村の石工たちとともに、立石の延隆寺に法華経供養塔(写真20)を造立した「立石々工 糸長茂次兵衛」などは、明らかに山香を住地とする石工たちであり、その作品の優れた完成度からは、かなり本格的な石彫技術を身につけた石工で

あったと思われる。立石村が、寛文4年(1664)以来日出藩の分地領であったことを思えば、あるいは日出石工の石彫技術が流入しているのかもしれない。

このほかにも、同立石長流寺の享保10年(1725)銘の地藏石塔にみえる「石工 源右衛門・林右衛門」や内河野松嶋神社燈籠(安永2年・1773)の「石工 藤七」も、その石材に田染石とは明らかに異なる山香産の凝灰岩を用いていることから、山香在地の石工と考えられる。

明治以後の山香の石工在銘品については、僅か2件が判明したのみで、その低調ぶりがうかがえる。ちなみに、そのうちの天正5年(1916)同立石の長流寺の修業大師像を造立した「尊像彫刻人 山浦村那留 豊田六太郎」は、現在山香町で数少ない石工の一人、豊田章一郎氏の父親である。

山香町山浦地区の石河野や勢場には、数カ所の石切場があり、現在でも凝灰岩系の石材を切出している。しかし、これらの石材は、同じ凝灰岩でも田染石とは異なり、目の荒い磯泥じりのもので、主に石段や石垣積み用のいわゆる間知石としてもちいられていたようである。したがって、彫刻を必要とする石造品については、外部の石工に頼るところが多かったようで、山浦字楠原の永川神社の安政5年(1858)銘の鳥居にみえる「石工トリノエ・ノト安兵衛 萬右衛門」(トリノエは現安心院町大字鳥越、ノトは同大字西衾)をはじめ、明治以後は、鳥居や燈籠・狛犬など主だった石造品を日出や安心院、四日市など外部の石工が製作している。

4. その他の石工たち

日出の石工を除いて、あまり際立った集団のみられない国東半島南部には、したがって外部の石工による製品が多く入ってきている。

その主なものは、やはり国東半島全域にシェアをもち、半島随一の大集団を形成した田染石工の製品であり、近世末期から現代にいたるまで数多くの作品を遺している。日出町大字藤原の赤松地区にある牧峯神社の安政4年(1857)銘の石祠(写真26)は、渡辺初助以下6名の近世末期田染石工の合作になる作品である。田染石製の大型の石祠であり、その手法は、やわらかい凝灰岩の性質を十分に生かした田染石工特有の緻密さを示し、槿のつくり出しから破風の彫刻まで、木造の社殿そのままの構造をもっている。渡辺初助については、杵築市の八坂神社の天保2年(1831)銘の石祠(県指定)も彼の手になるもので、幕末の頃に成立したと思われる田染石工集団にあっては指導者的役割を担った石工である。牧峯神社の石祠に、彼と並んで名を連ねる5名の田染石工は、みな初助の弟子たちであって、そのうちとくに佐平とは、文政9年(1826)豊後高田市並石の梅遊寺の仁王像、安政4年(1857)同真中の金比羅社の鳥居に名をのこす金高佐平のことである。

山香町大字小武にある小武寺の仁王像(写真27)は、既に昨年の調査で、現豊後高田市熊野を本拠地とし、近世中期、享保年間から安永年間頃までを活躍期とする石工、松本一派の一人松本儀平次が、明和9年(1772)に造立したものであることがわかっている(台座に「□和□□壬□二月□日、石工□野村□□」の銘がある)。儀平次は、松本一派の中でも、最も多作を誇る石工で、小武寺仁王像以外の作品では、安岐町大儀寺仁王像(宝暦10年・1760)を皮切りに、豊後高田市築地の竜雲寺仁王像(明和5年・1768)、安岐町両子の両所神社仁王像(明和年間頃)、杵築市船部の光明寺仁王像(安永5年・1776)、豊後高田市陽平の猛嶋神社仁王像(安永年間頃)、大田村永松の田原若宮仁王像(安永6年・1777)などがある。

その他、近世の石工在銘品で目立ったところでは、杵築市妙経寺の天保2年(1831)銘の石祠に「田染石工 河野種造」の名がみえ、安岐町の石工同じく杵築市奈多宮の文政13年(1830)銘の鳥居に「石工 小原村下山 吉兵衛」の名がみえる。

表6 石工在銘石造品一覧(杵築市、日出町、山香町) (石材の項の凝・安・花は各々凝灰岩・安山岩・花崗岩を表わす)

造立年	種類	石工 銘	所在地	石材	備考
享保10(1725)	地藏石塔	石工・源左衛門 林右衛門	山香町大字立石 長流寺	凝	
延享1(1744)	石 段	石工・五助	杵築市大字八坂 生桑寺	安	
明和3(1766)	石 段	覚雲寺邑・石屋・五介	山香町大字野原樋掛御堂	〃	覚雲寺は、現日出町大字日出覚雲寺。
〃 9(1772)	仁王像	石工・熊野村(松本儀平次)	〃 大字小武 小武寺	〃	国東町興壽寺の天保7年(1836)仁王像に、石工大坂和泉屋平右衛門とある。
安永2(1773)	燈 籠	石工・大坂住・和泉屋仁右衛門	杵築市大字宮司 若宮八幡社	花	
〃	燈 籠	石工・藤七	山香町大字内河野 松嶋神社	凝	
〃 4(1775)	石 橋	築山師・淡州住・秦治郎兵衛兼利	杵築市大字南杵築 妙経寺	安	兼利は、大野郡三重町蓮城寺山王宮の三猿像と同一作者。 山口村は、現大字立石のうちである。寛文4年(1664)以後、日出藩分地立石額となる。基礎のみの残欠。
寛政6(1794)	六地藏石祠	石工・山口村・清兵衛	山香町大字立石 五徳寺	凝	
文化9(1812)	石 碑	石屋・良蔵	杵築市大字年田 山の神	安	
文政6(1823)	石 碑	石工・生常	〃 大字加貫 八坂神社	〃	
〃 8(1825)	如来坐像	石工・津島曲木・元助	日出町大字日出松屋寺	〃	像底に墨書。
〃 11(1828)	玉 垣	竹田津・石工・亦兵衛 為四郎	杵築市大字奈多奈多宮	凝	竹田津は、現国見町大字竹田津。
〃 13(1830)	鳥 居	石工・小原村下山・吉兵衛	〃 〃	安	小原村下山は、現安岐町大字小原村下山。種蔵の作品は、ほかに豊後高田市鼎の大蔵神社仁王像(嘉永3年)がある。倉成村は、現山香町大字倉成。
天保2(1831)	石 祠	石工・田染・種蔵	〃 大字南杵築 妙経寺	凝	
〃	常夜燈	石工・倉成村・伊平治	山香町大字八幡森 八旗八幡宮	〃	
〃 4(1833)	観音立像	石工・是永・宇佐吉 同所・安 吉	日出町大字鳴川 宝泉庵	安	
〃 10(1839)	臥牛像	頭 領・猪尾啓三郎 年田村・廣 蔵	杵築市大字南杵築 祇園 天満宮	安	年田村は、現杵築市大字熊野字年田。
〃 13(1842)	常夜燈	日出津島村・伊八郎	安岐町大字大添 妙見社	〃	津島村は、現日出町大字豊岡字辻間。
〃	石 祠	石工・田染・渡辺初助	杵築市 八坂神社	凝	県指定有形文化財
弘化5(1848)	常夜燈	石工・杵築・清水次□ □ 永岡孝之進 寿明	安岐町大字中園 歳神社	安	

造立年	種類	石工銘	所在地	石材	備考
嘉永2(1849)	臥牛像	石工・猪尾啓三郎	〃 大字大添 妙見社	〃	
〃 6(1853)	石段	石工・古市村・林蔵 野井村・軍兵 八坂村・累蔵	日出町大字深江塩屋浜 住吉神社	〃	古市村は、現武蔵町か別府市かはきめかねる。野井村は日出町、八坂村は杵築市のうち。
安政4(1857)	石祠	石工・田染・初助 佐平 順六 駒平 喜助 作助	〃 大字藤原赤松 牧峰神社	凝	各々、渡辺初助・金高佐平・渡辺順六・渡辺喜助のことである。
〃	燈籠	一宮覚之丞作之	〃 大字深江塩屋浜 住吉神社	安	一宮正行と同じ石工である。
〃 5(1858)	鳥居	発願主石工 トリノエ・安兵衛 ノト・万右衛門	山香町大字山浦楠原 永川神社	凝	トリノエは、現安心院町大字鳥越、ノトは、同大字西禰。
万延1(1860)	仁王像	日出・一宮正行作	国東町大字川原 桜本宮	安	
文久3(1863)	仁王像	日出・一宮正行 当村・後藤光久	豊後高田市大字平野 胎蔵寺	〃	当村とは、熊野村のこと。
明治13(1880)	石塔	日出石工・藤原住 棟梁・藤井増太郎 藤原直行 長野竹五郎源 正行 藤井友次郎 直光 立石石工・糸長茂次兵衛藤原兼忠	山香町大字立石 延隆寺	〃	日出の石工と立石の石工の合作になる宝篋印塔型の法華経供養塔である。
〃 19(1886)	鳥居	石工・速見郡平道村 阿部莊五郎 同郡猪尾村 木元 周平	杵築市大字南杵築字下原 天満宮	安	平道村は現日出町大字平道、猪尾村は杵築市大字猪尾
〃 22(1889)	鳥居	棟梁・猪尾 逸八 阿部藤七郎 本田代太郎	〃 大字船部 市宮八幡社	〃	
明治27(1894)	鳥居	藤原村・安部太市建設	日出町大字大神字井手 井手八幡社	安	
〃 29(1896)	石祠	豊岡石工・赤山安太郎	杵築市大字杵築 杵築神社	〃	
〃 30(1897)	石碑	速見郡日出町石工 藤井友二郎直光	安岐町大字築瀬 路傍	〃	
〃	石祠	速見郡豊岡村 石工・赤山安太郎	〃 大字西本 剣大明神社	〃	
〃	石碑	日出町石工・赤山安太郎	〃 大字馬場 秋葉社	〃	
〃 36(1903)	石碑	石工・木村友吉	日出町大字藤原字弥四郎 稲荷社	〃	
〃 39(1906)	石碑	石工・猪尾数太郎	杵築市大字片野宝財神社	〃	
〃 42(1909)	石碑	山浦村石工・原野今朝松	山香町大字内河野 松島神社	凝	
〃 44(1911)	燈籠	石工・猪尾数太郎	杵築市大字南杵築南台 稲荷社	花	
大正2(1913)	狛犬	日出町石工・長野	安岐町大字小俣日吉神社	安	
〃 3(1914)	燈籠	豊岡町石工・一宮助八 豊岡町石工・吉野 栄	〃 大字八坂阿蘇神社	〃	
〃 5(1916)	修業大師像	尊像彫刻人 山浦村ナル・豊田六太郎	山香町大字立石 長流寺	凝	
〃	石碑	仏体彫刻 石工・田シブ・渡辺寿作	〃 〃	〃	
〃 6(1917)	鳥居	石工・坂本多吉	杵築市大字本庄 貴船社	安	
〃 10(1921)	石碑	石工・キツキ・猪尾虎夫	安岐町大字下原 天満宮	〃	
〃	鳥居	石工・八坂村・坂本多吉	日出町大字大神 大神八幡社	〃	
〃 12(1923)	鳥居	石工・辰巳三五郎 同・佐藤 小八	〃 大字深江字塩屋浜 住吉神社	〃	
〃	石碑	石工・木村藤作	杵築市大字片野宝財神社	〃	
〃 14(1925)	燈籠	石工・堀内儀市	〃 大字南杵築下原 天満宮	〃	
〃	鳥居	石工・キツキ町・堀内儀市	安岐町大字山浦字馬渡 山神宮	〃	

造立年	種類	石工銘	所在地	石材	備考
〃 15(1926)	鳥居	キツキ・堀内儀市	安岐町大字大添 妙見社	〃	
〃	鳥居	八坂村・石工・坂本多吉	杵築市大字奈多 奈多宮	〃	
〃	石堀	石工・棟梁・山本久明	〃 大字灘手	〃	
昭和2(1927)	狛犬	石工・豊岡町・一宮順太	〃 大字奈多 奈多宮	〃	
〃	修業大師像	彫刻・長野 陽	日出町大字大神字中村	〃	
〃 3(1928)	石台	日出赤山・石工・岡田伊介	〃 大字日出 若宮八幡宮	〃	
〃	鳥居	石工・木村藤作	杵築市大字八坂字生桑 稲荷社	〃	
〃 4(1929)	狛犬	日出石工・長野重道	日出町大字日出 若宮八幡宮	〃	
〃 5(1930)	燈籠	石工・木村藤作	杵築市大字南杵築下原 妙徳寺	〃	
〃	修業大師像	石工・井上要作	〃 大字溝井字荒平 轟地藏	凝	
〃	鳥居	製作ナダテ・秦 東司	〃 大字神場住吉神社	〃	
〃 6(1931)	石橋	製作・秦 東司	〃 大字奈多 奈多宮	〃	
〃	狛犬	日出町石工・長野重道	日出町大字真那井 浮島神社	安	
〃 7(1932)	狛犬	日出町石工師・長野重道	〃 大字藤原字赤松 牧峰神社	〃	
〃	石祠	杵築町石工・河野武一	安岐町大字小俣日吉神社	〃	
〃 9(1934)	狛犬	石工・石丸研治	山香町大字立石字大月 天満宮	凝	
〃	狛犬	豊岡町・石工・一宮順太	日出町大字日出 若宮八幡宮	安	
〃	燈籠	高田町石工・高木轟	山香町大字向野向野神社	花	
〃	常夜燈	石工・友岡格次郎	〃 〃	砂	
〃	狛犬	四日市町・石工・橋本勇八	〃 〃	花	
〃	鳥居	石工・高田町・高木 轟	〃 〃	〃	
〃	石碑	キツキ町大工・猪尾虎夫	安岐町大字馬場 秋葉社	安	
〃 10(1935)	狛犬	日出町石工・長野重道	山香町八幡森八旗八幡宮	〃	
〃	石祠	田染村中村 石工・渡辺佐太武	杵築市大字溝井字乙王 天神社	凝	
〃	石碑	石工・帯刀伝平	〃 宗玄寺	安	
〃	狛犬	石工・四日市町・橋本勇八	山香町大字日指白鬘神社	花	
〃 11(1936)	燈籠	長野 陽 刻	日出町大字北大神 愛宕神社	安	
〃	鳥居	石工人・富田 勇	杵築市大字溝井字尾上山神社	凝	
〃	燈籠	石匠・田染村・河野忠一 河野徳夫	〃 字溝井山神社	〃	
〃 12(1937)	狛犬	日出町石工・長野重道	日出町大字平道 住吉明神社	安	
〃	狛犬	日出石工・長野重道	〃 大字北大神字井手 井手八幡社	〃	
〃 14(1939)	狛犬	石工・安心院町・田口	山香町大字内河野 松島神社	凝	
〃 15(1940)	鳥居	石材採取並彫刻 棟梁・長野 陽	日出町大字大神 大神八幡社	安	
〃	狛犬	石工・安心院町・田口	山香町大字野原字貫井 貫井八幡社	凝	
〃	狛犬	日出町・石工・長野重道	杵築市大字灘手住吉神社	安	
〃 19(1944)	石碑	石工・杵築・河野義雄	安岐町大字小野	〃	
〃	石碑	杵築・河野義雄	〃 大字大添 八幡宮	〃	
〃 21(1946)	石碑	石工・河野義雄	杵築市大字宮司 若宮八幡社	〃	
〃 25(1950)	人物像	石工・矢野関雄	〃 大字奈多 奈多宮	〃	
〃	石碑	石工・大塚才夫	日出町大字藤原字弥四郎 稲荷社	〃	
〃 38(1963)	鳥居	安心院町大字辻 石工・佐藤健太郎	山香町大字山浦字勢湯 善神王社	凝	
〃 46(1971)	石碑	石工・杵築・河野義雄	安岐町大字山浦字馬渡 山神宮	安	

第2節 半島東部の石工

第1節 半島東部の石工

今回は国東半島東部の神社・寺院を中心に各種石造品に残る石工名を拾い出し、それに関連した一部聞き取りという形で調査を実施した。その結果、石工集団あるいは石工の系譜がわずかではあるが把握することができた。

時代については、中世の石造品の中にも石工名が見られる作品が何例もあるが、今回は近世以降を中心とした。作品も多く、様式から系譜をたどれる例も多いからである。分担地域（東国東郡国見町・同国東町北部）での調査件数は表のとおりである。もちろん見落した作品も多いと思うが、大方の傾向はつかめたのではなかろうか。以下国見町と国東町北部とに分けて、概観及び代表的な石工について述べることにする。

1 国見町の石工

現在のところ町内で確認される石造品のうち、石工名の出でくる最初の作品は、正応3年(1290)の伊美別宮社国東塔で「大工僧浄慶」とある。し

表7 石工名のみえる石造品の数(国見町)

年代	種別	鳥居	燈籠	記念碑	石祠	石段	狗犬	棟札*	宝篋印塔	仁王	玉垣	石仏	牛像	その他	合計
~1700															
1701~1750															
1751~1800			3					1	1					2	7
1801~1850		5	8		4	1	1			2			1	3	25
1851~1900		11	5	4	3	2	1	1	3					4	37
1901~1950		2	1	11	3	2	3	3		1	1	1	1	2	31
不明						1								1	2
計		18	17	15	10	6	5	5	4	3	3	2	2	12	102

表8 石工名のみえる石造品数(国東町北部)

年代	種別	鳥居	燈籠	記念碑	仁王	石垣	石段	石祠	石仏	手洗石	狛犬	供養塔	玉垣	その他	合計
~1700			1												1
1701~1750		1	3									1			5
1751~1800		4	4		2	2	1		1		1	1		1	17
1801~1850		7	10	3	4	2	2	1	1	2	2	1		3	36
1851~1900		15	12	3	4	4	2	3		1			2	2	44
1901~1950		6	2	25	1	1	1	1	1				1	4	43
不明			1						1	1					3
計		33	33	31	7	7	6	5	4	4	3	3	3	10	149

*棟札：神社等の棟札に、石工として名の出ている数

かしその後は、石工名のある作品は途絶え、江戸時代中期になってようやく各種石造品に名が出てくるようになる。

まず宝暦4年(1754)の永明寺の棟札に「石屋 見目左平 香々地曾助」と出てくる(1)。肩書きで分かるように、左平は見目(現西国東郡香々地町)の石工で、明和年間(1764~71)には永明寺や岩倉社に燈籠や宝篋印塔(写真28)を残している。もちろん彼の作品は香々地町にも見られ(2)、広範囲で活躍した石工と思われる。

この左平をはじめとして、国見町に残る江戸時代中期以降の石造品のうち、古いものには他村の石工の名が多く見られる。例えば、文化4年(1807)の常光寺仁王には「石工 安田家太夫」の名が出てくる。彼は現国東町来浦長野の地で、江戸時代中期から後期にかけて活躍した安田姓石工の一人である。安田姓石工については、国東町の項でくわしく述べるので、そちらを参照してもらいたい。

文化13年(1816)銘の旧千燈寺参道の燈籠には「夷村石工 猪股勇助忠廣」とある。彼は夷(現



写真 28 櫛来宝篋印塔



写真 29 岐部燈籠



写真 30 文殊仙寺十一面観音

西国東郡香々地町)の石工で燈籠を得意とし、豊後高田市にも作品が残り、前述の左平同様広範囲に活躍していた石工である。天保5年(1834)銘の日吉神社燈籠は、現国東町浜崎出身の石工、佐藤茂助政近の作である。彼については、作品も多く残っているので国東町の項で詳述する。天保年間、向田の天満社には板井系石工(3)である板井利三郎・板井徳四郎が狛犬・隨身・臥牛像を残している。このほか、天明5年(1785)銘の旧常念寺跡の供養塔に「石工良助」と見えるが、彼も他村の石工と推定される。明和3年(1766)銘の堅来山神社の燈籠に「石工良助」、天明元年(1781)銘の堅来稲田姫神社の鳥居に「石工當邑良助」などとあるところからみて、現国東町堅来の地にいた石工であろう。

このような中で、はっきりと地元出身の石工として確認されるのは、現時点では岐部社裏の海岸にある文化9年(1812)銘の燈籠(写真29)に見える「石工 岐部安兵衛達徳」が最初である。この安兵衛を始めとする岐部姓石工は何氏が続いて活躍しているので、次に残された作品を中心に述べてみることにする。

岐部姓石工 現国見町大字岐部の岐部増喜氏の先祖に数氏続けて石工が出ている。これをまとめ

て岐部姓石工と呼ぶことにする。まず現時点で分かる系統図を記すと次のようになる。(安兵衛と安之丞は同一人物とも考えられるが、そのことについては後述)

安兵衛—安之丞 政義—茂平 治元 義(???) (明和4~嘉永6) (寛政12~慶応2)
—金平 元紀 —喜兵 紀元 信(文政12~明治38) (???)

安兵衛から順に見ていくこととするが、彼の作品は、現在のところ国見町から国東町にかけて次の8例が確認される。

- ①岐部社裏海岸常夜燈(国見町・文化9年)
石工岐部安兵衛達徳
- ②岐部社鳥居(国見町・文政2年)
石工岐部安兵衛
- ③文殊仙寺十一面観音(国東町・文政5年)
石工安田九助
岐部氏安兵衛
佐藤茂助(写真30)
- ④岐部社本殿基壇(国見町・文政7年)
石工岐部安兵衛
同苗茂平治
- ⑤大山神社手洗石(国東町大恩寺・文政10年)



写真 31 文殊仙寺宝篋印塔

石工岐部安兵衛

⑥大山神社前供養塔(国東町大恩寺・文政10年)

石工岐部安兵衛

⑦文殊仙寺十王堂石窟(国東町・文政13年)

石工岐部安兵衛

同猪俣守助

同苗武左衛門

⑧文殊仙寺燈籠(国東町・天保2年)

石工岐部安兵衛

以上の作例を見ると、国見町内のは岐部社を中心に、国東町内のは文殊仙寺を中心に残っている。そして③・⑦は共に地元石工との合作である。このように地元石工との交流があったということについては、文殊仙寺の大宝篋印塔(写真31)が大いに関係していると思われる。そこでそのことについて考えてみることにする。

宝篋印塔には次のような銘文がある。

従天保四辰年至丑三月吉日而成就

発願主先住

大阿闍梨法印観定順道

施主十方助力

上州群馬郡尻高村浄覚

すなわち、塔の造立は天保4年(1833、ただし天保4年であれば干支は癸巳で、辰年ではない)に



写真 32 市杵嶋神社燈籠

始まり丑三月吉日(天保12年・1841)に完成したということであろう。実に8年の年月を費やしているのである。県内で最大の大きさを誇るもので、多くの石工達が加担したといわれている。この塔造立のために、現国見町・国東町の主な石工達が文殊仙寺に集まったのであろう。岐部安兵衛が、来浦長野村(国東町)の石工安田九助および浜崎村(国東町)の石工佐藤茂助と交流できたのも、この宝篋印塔造立が契機であったと考えてさしつかえあるまい。

ところで多くの石工達が関与したであろうこの塔には、石工名は「岐口安之丞 同定三郎」の二名しか出ていない。岐口安之丞は、安兵衛の子、あるいは同一人物とも考えられる安之丞政義のことであろう。彼は嘉永6年(1853)に86才で没している。この宝篋印塔は74才の時の作となる。この安之丞であるが、長寿であるにもかかわらず、作品は天保11年(1840)銘の岐部社鳥居に「石匠岐部安之丞政義 男茂平次元義」と出てくるのが最初で、次がその翌年の文殊仙寺宝篋印塔である。わずか2点の確認されるにすぎない。そこで考えられるのが安兵衛と安之丞が同一人物ではないかということである。現在のところ資料不足のため確実なことはいえないが、次の点から推測し

てみよう。

その1 宝篋印塔の施主浄覚との関係

●十王堂石窟(文政13年・1830)

石工岐部安兵衛 行者相京庄右ヱ門

●十王堂前燈籠(天保2年・1831)

石工岐部安兵衛 上州群馬郡尻高村行者庄右衛門

●宝篋印塔(天保12年・1841)

石工岐口安之丞 施主上州群馬郡尻高村浄覚

安兵衛と共に名を刻んでいた上州の行者庄右衛門が、出家して浄覚を名のった時点で、安兵衛も安之丞に改名したのではないかということ。そのように考えれば安之丞名の作品が70才代になって、はじめて出現するというのも納得できよう。

その2 文殊仙寺十一面観音像の石工名
十王堂内に安置している文政5年(1822)銘の十一面観音像の石工名を見ると次のように刻されている。

石工安田九助

岐部氏安兵衛

佐藤茂助

安兵衛だけが岐部氏と記している。安田九助はこの時54才、安兵衛と安之丞が同一人物と考えた場合、この時は55才となる。安田九助と佐藤茂助は師弟関係にあるので、他村のしかも年長の石工ということで、「氏」を付したのではなかろうか。

その3 岐部茂平治との関係

●岐部社本殿基壇(文政7年・1824)

石工岐部安兵衛

同苗茂平治

表9 久保田鶴松作品一覧

造立年	件名	所在地	備考
明治19	石碑(神社由緒)	伊美別宮社	石工 久保田鶴松
27	陰陽石	"	
35	観音像	慈雲寺	
44	石碑(土地寄進)	浜中西宮社	石工 久保田鶴松
44	臥牛像	伊美友安天満社	工事者 久保田鶴松
大正5	仁王像	胎藏寺	石工 伊美村 久保田鶴松
	地藏像	中 山口家墓地	
	地藏像	"	
	観音像	"	
	恵比寿像	浜中	

(国見町教育委員会保管「久保田鶴松作品集」を中心に作成)

●岐部社鳥居(天保11年・1840)

石匠岐部安之丞政義

男 茂平次元義

前者は茂平治24才の時、後者は同じく40才、安之丞73才の時である。そして安之丞と茂平次が父子であることははっきりしている。そこでもし安兵衛が茂平治の祖父と考えたとしたらどうであろうか。文政7年時点で茂平治は24才であるから、安兵衛の年齢は若く見ても60代ということになる。彼の作品はこの時期に集中していることから考えると、制作年代としては少し年を取りすぎている。それでは安兵衛と安之丞が同一人物、すなわち茂平治の父親としたらどうであろうか。茂平治24才、安兵衛57才である。別に不自然さは感じさせない。以上のことから安兵衛と安之丞は同一人物と考えられるのである。安兵衛が安之丞と改名したのは60才代後半(文殊仙寺宝篋印塔の工事開始頃か)であろう。

次に茂平治元義であるが、前述のように安之丞の子である。天保6年(1835)銘の岐部社山神宮石祠をはじめ、国見町、国東町にかけて8点ほどの作品が確認される。内訳は鳥居3、燈籠2、その他3である。このうち国東町来浦の市杵嶋神社の文久2年(1862)銘の燈籠(写真32)には「石工岐部茂平治元義 先石工安田家太夫政覇」とある。先石工の意味であるが、柚のうち、山で木を材採する役目をサキヤマと呼ぶので、石材を切り出す石工という意味で先石工の文字を使ったのであろうか。あるいは、文殊仙寺安永3年(1774)銘の燈籠狛犬(4)に「石工長野村 安田政覇」とあるので、安田政覇が作成した燈籠が破損したので、



写真 33 伊美友安天満社臥牛像

岐部茂平治が文久2年に再建したということであろうか。すなわち、この燈籠の最初の作者という意味で「先石工」の文字を使用したのか。安永3年銘の作例から考えると、この意味に考えてよさそうである。しかし、現時点では詳細は不明である。慶応2年(1866)正月22日に66才で没している。

茂平治の子金平は、明治11年(1878)に香来橋の築造にたざさわっている。香来橋碑に「棟梁吉武作平 全岐部金平 全栗本和吉」とある。同橋は昭和13年(1938)に改築したが、その改築碑に「本橋ハ元車輪橋ニシテ行運甚タ不便ナリ(以下略)」とあり、石造アーチ橋であったことがわかる。明治38年(1905)12月6日没、76才。

次の喜兵は、明治39年(1906)銘の忠魂碑(岐部胎蔵寺)や明治45年(1912)銘の国東町来浦市杵嶋神社鳥居などを作っている。

なお明治時代を通じて、岐部為二郎という石工がいるが、彼は以上述べた岐部姓石工とは別の系統である。石碑などの造立のほか、干拓や溜め池の石工棟梁もしている。

久保田鶴松 これまで、国見町を代表する石工として取りあげられていた人物に久保田鶴松がいる。安政6年(1854)9月8日に伊美で生まれ、夷(香々地町)の石工、法橋板井春哉の弟子となっている。現在国見町内には表のように約10点の作品が残っている(無銘ではあるが彼の作と伝えられている例を含む)。年代のはっきりしている作品を見ると、伊美別宮社の明治19年(1886)銘の石碑をはじめとし、大正5年(1916)銘の胎蔵寺仁王までその活躍した期間は長い。作品の種類も、石碑・仁王像・観音菩薩や地藏菩薩などの石仏、恵比寿像・天満社の臥牛像(写真33)など多い。昭和3年(1928)2月27日、68才で死去。彼

の家系ではその後石工を継いだ者はいなかったという。ただし、伊美友安の天満社臥牛像に「工事者 久保田鶴松 北村九八 久保田熊九郎 北村慶治 秋田善五郎 森吉外太郎 野田泰安」とあるので、彼等のうち何名かは久保田鶴松の弟子として石工を続けたと思われる。

岩倉社の安政2年(1855)銘の玉垣に「石工伊美久保田周平」とあるが、久保田鶴松との関係は不明である。あるいは父子であろうか。

熊毛地区の石工達 旧熊毛村は、岐部村・小熊毛村・大熊毛村・向田村の4か村が合併して成立した村で、現在は国見町大字熊毛のうちである。この地区に江戸時代末から明治時代にかけて多くの石工達が活躍している。

現在のところ、この地区の石工として確認できる最初の例は、明和5年(1768)銘の大聖寺(国東町来浦)の石垣に見える「石工 小熊毛長治良」である。その後、岐部姓の石工などが出てくるが、彼等についてはすでに述べたのでここではその他の石工について、特にいくつかの作品を残している石工について簡単にふれることとする。

松本啓(桂)介 弘化4年(1847)銘の小熊毛日吉神社の石祠、慶応3年(1867)銘の島田歳神社の狛犬に名が見える。天保10年(1839)の常光寺仁王像には「石工 廣右門 全 啓祐」とあるが、時期から見てこの啓祐が、松本啓介である可能性も考えられるが、現在のところ不明である。

溝井喜八 弘化4年(1847)銘の小熊毛日吉神社の燈籠に「小熊毛石工 喜八」とある。また同年銘の同社石祠に前出の松本啓介と並んで「石工 溝井喜八」と出てくる。明治12年(1879)銘の小熊毛歳神社の石祠にも名が見えるので、幕末から明治初期にかけて、小熊毛の地を中心に活躍した石工ということができる。

森本郡平 文久元年(1861)銘の小熊毛日吉神社の堀石垣・拝殿前敷石、文久2年銘の同社鳥居、明治11年銘の同社燈籠などに名が見える。また嘉永5年(1852)銘の常光寺前の石碑に「大世話人 郡平」と出ているが、時期的に見て森本郡平のことと思われる。

吉本小兵衛 文久元年(1861)銘の小熊毛日吉神社の堀石垣及び文久2年の同社鳥居に、前出の森本郡平と並んで名が見える。文久3年の同社玉垣も彼の手になるものである。また明治7年(18

表10明治初年職人賃金一覧

		全 県 平 均
石	工	28銭5厘
大	工	25銭8厘
左	官	26銭1厘
瓦	家 根 葺	27銭0厘
茅	家 根 葺	26銭6厘
土	方 職	21銭1厘
杣	職	27銭4厘
農	作 雇 (男)	16銭4厘
〃	(女)	8 銭 0 厘

(明治14年大分県統計書より)

74)の同社燈籠には、「石工 吉本小平」とあるが、これは明治4年に一般庶民は「左衛門、右衛門、兵衛」を改名するよう達(5)が出ているので、小兵衛を小平と改めたものと考えられる。以上の松本啓介・溝井喜八・森本郡平・吉本小兵衛はほぼ同時期に小熊毛を中心に活躍した石工であることが分かる。この地区には彼等以外にも何名かの石工名が見られるので、江戸時代から明治時代にかけて石工の集団がいたことがはっきりする。

有永文書(国見町)の中に「石工出賦帳」というのがある。熊毛地区の波止修繕関係のもので、明治17、8年頃と思われる。この中に石工として「栄市、安五郎、吾郎吉、平吉、市助、列平」の6名が出ている。しかし彼等の名は石造品には見えないので、石積み専門の石工であろう。

明治になると向田の石工池本勘作が多くの作品を残している。明治5年(1872)銘の向田天満社鳥居をはじめとして、福厳寺の弘法大師像、国東町来浦八坂社鳥居、向田天満社白殿など多くの石造品に名が見える。特に鳥居に作例が多く、今回調査した彼の作品8列中5例が鳥居である。また彼は明治19年の選挙で向田村村会議員に選出されている(6)。当時村会議員に選出されるということは、人望のある実力者で、ある程度財産を有していたということが考えられる。参考までに当時の石工の1日の賃金を他の職人のそれと比較してみると表ようになる(7)。職人のうちで最高の賃金であったことからみても、石工の棟梁ともなれば相当の財力があつたのではなかろうか。

大正から昭和にかけて、同じ向田地区を中心に猪野松男の名が多く見られるようになる。現在のところ、大正3年(1914)銘の向田天満宮石碑を



写真 34 向田天満社狛犬

最初として、昭和15年(1940)銘の香々地町六所神社の狛犬まで国見町・国東年・香々地町と広い範囲で活躍している。非常に器用な石工だったといわれ、記念碑をはじめとして、石仏・仁王像・狛犬など各種の作品を残している。国東町岩戸寺山口には、同町内唯一の磨崖仏である聖観音像があるが、これも猪野松男作という。彼は記念碑などには「石工」の肩書を使用しているが、石仏や狛犬などは「彫刻師」と記している。

彼は同じ向田の石工、花岡今朝松の弟子であったが、花岡今朝松が夷(香々地町)の板井春哉のもとで修業した関係で、彼もまた春哉の弟子となっている(8)。そして春哉の死後向田に帰ってきたという。板井系石工の本拠である香々地町夷の六所神社に猪野松男の狛犬があるということも、彼が春哉の弟子で板井系石工の流れをくんでいた関係からであろう。昭和5年(1930)銘の国東町泉福寺子育観音に「彫刻師 猪野松男国勝」とあり、板井系石工に共通する「国」の字を使用していることなども、猪野松男と板井系石工との間に強いつながりがあつたことがはっきりする。なお板井系石工と向田の石工たちの交流は、向田天満社に、天保年間の板井利三郎・同徳四郎の作品が数点あることから、江戸時代末頃からあつたと考えてもよい。(写真34)

注(1)『国見町沿革史』清和照充 昭和43年

(2)例えば、宝暦14年銘の石祠(香々地町長小野日吉神社)に「石工 見目村佐平治」とあるが、佐平のことであろう。

(3)『国東半島の石工1』大分県立宇佐風土記の
丘歴史民俗資料館 報告書第1集 昭和58年
(4)前年度報告書(注3)では年代不詳としてい
たが、安永3年の銘が確認された。

(5)「臼杉藩御会所日記」臼杉市立図書館蔵
(6)「熊毛支所文書」(大分県立大分図書館蔵)
に次の史料がある。

御受書
當撰状
當村撰挙投票之多数ヲ以テ
村會議院ニ当撰相成候条此
段及通達候也
明治十九年 向田村役所
十二月十日
向田村
池本勘作殿

右奉謹承候也
明治廿年三月廿四日 右池本勘作
向田村役所御中

(7)東国東郡は他郡に比して職人の賃金は低い。
石工の場合は、国東町浜崎直日社の石垣に「明治
十三年 石工原村二十五銭 清国興吉 石工二十
五銭ヨコテ小松平吉」とあり全県平均以下である。
(8)大正7年建立の板井春哉像(香々地町夷)の
台座に、56名の門人名が刻されているが、その中
に花岡今朝松、猪野松男の名がある。

表11 石工在銘品一覧表(国見町)

造立年	件名	石工銘	所在地
宝暦4(1754)	棟札	石屋 見目 佐平 香々地 曾助	榑来 永明寺
明和元(1764)	燈籠	見目村 石工 佐平	榑来 永明寺
明和元(1764)	一字一石塔	造塔 甚四郎	榑来 永明寺
明和3(1766)	宝篋印塔	石工 佐平	榑来 路傍
明和5(1768)	燈籠	石師 見目村 佐平	榑来 岩倉社
天明5(1785)	石碑	石工 良助	岐部 旧常念寺跡
寛政10(1798)	燈籠	石工 茂右衛門	榑来 山神社
享和3(1803)	燈籠	石工 喜三平	伊美 田中社
文化4(1807)	仁王	石工 安田家大夫	小熊毛 常光寺
文化13(1816)	燈籠	夷村石工 猪股勇助忠廣	千灯 旧千燈寺
文政2(1819)	鳥居	石工 岐部安兵衛	岐部 岐部社
文政7(1824)	本殿基壇	石工 岐部安兵衛 同 苗茂平治	岐部 岐部社
文政7(1824)	石碑	石工 新助	向田 多賀社
文政8(1825)	鳥居	石工 当邨篤之助	向田 天満社
不明	石段	石工 岩戸寺郷司市助友重	千灯 千燈寺奥院
天保5(1834)	燈籠	石工 浜崎 佐藤茂助政近	大熊毛 日吉神社
天保6(1835)	石祠	世話人 石工 岐部茂平元義	岐部 岐部社
天保7(1836)	狛犬	彫工 夷邑 法橋板井利三郎国良	向田 天満社
天保7(1836)	石室	石工 当村 新助	向田 多賀社
天保9(1838)	隨身	彫工 夷村 板井利三郎	向田 天満社

造立年	件名	石工銘	所在地
天保10(1839)	仁王	石工 廣右エ門 啓 祐	小熊毛 常光寺
天保10(1839)	鳥居	石工 岐部茂平治	岐部 元宮
天保11(1840)	鳥居	石匠 岐部安之丞政義 男 茂平治元義	岐部 岐部社
天保14(1843)	燈籠	石工 芳助	小熊毛 常光寺
天保15(1844)	臥牛像	石工 法橋 板井利三良 同 徳四良	向田 天満社
弘化2(1845)	棟札	石匠 中岐部村 栗本金男	伊美 別宮社
弘化3(1846)	鳥居	石工 三恵野藤吉	竹田津 竹田津社
弘化3(1846)	石祠	石匠 紀 万作	榑海 普門寺
弘化3(1846)	燈籠	石工 岐部茂平治元義	伊美 田中社
弘化4(1847)	燈籠	小熊毛石工 喜八	小熊毛 日吉神社
弘化4(1847)	石祠	石工 松本啓介 全 溝井喜八	小熊毛 日吉神社
嘉永元(1848)	石段	石匠 山口壺十郎	野田 岡田社
嘉永2(1849)	鳥居	石工世話人 喜祐	向田 天満社
嘉永6(1853)	墓石	岐部安之丞政義86才	岐部 岐部家墓地
安政2(1855)	鳥居	石工 三恵野亀太郎	西方寺 許波多社
安政2(1855)	玉垣	石工 伊美 久保田周平	榑来 岩倉社
安政4(1857)	石祠	石工 嘉平	竹田津 清正公様
安政5(1858)	鳥居	石工 三恵野亀太郎 伊 平	西方寺 許波多社
安政7(1860)	鳥居	石工 岐部茂平治元義	岐部 岐部社
万延元(1860)	燈籠	石工 清末惣九郎	竹田津 竹田津社
万延2(1861)	燈籠	⑩ 岐部安之丞紀政義	岐部 胎蔵寺
文久元(1861)	堀石垣	石工 森本 郡平 願主 吉本小兵衛	小熊毛 日吉神社
文久2(1862)	鳥居	石匠 郡 平 小兵衛	小熊毛 日吉神社
文久3(1863)	玉垣	石工 吉本小兵衛	小熊毛 日吉神社
元治元(1864)	小熊毛新開	吉本小兵衛	小熊毛
元治2(1865)	鳥居	石工 花岡晋松	向田 多賀社
不明	道標	岐部茂平治立之	岐部 岐部増喜氏宅前
慶応元(1865)	宝篋印塔	石工 □□竹松	千灯 千燈寺
慶応2(1866)	宝篋印塔	石工 □□竹松	千灯 千燈寺裏墓地
慶応2(1866)	鳥居	願主 石工 吉木喜右エ門	小熊毛 日吉神社
慶応2(1866)	墓石	岐部茂平治元義66才	岐部 岐部家墓地

造立年	件名	石工銘	所在地
慶応3(1867)	狛犬	石工 松本桂介	島田 歳神社
明治5(1872)	鳥居	石工 花岡新吉 池本寛作	向田 天満社
明治6(1873)	石祠	石匠 綾部孫平	岐部 岐部社
明治6(1873)	玉垣	石工 綾部孫平 碓井両平	岐部 岐部社
明治7(1874)	燈籠	石工 吉本小平	小熊毛 日吉神社
明治7(1874)	明治甲戌 新田	石工 棟梁 岐部為治郎 吉江 市郎 音二郎	榑来
明治11(1878)	石橋碑	棟梁 吉武作平 岐部金平 栗本和吉	岐部 香来橋
明治11(1878)	燈籠	石工 森本郡平 溝井喜八	小熊毛 日吉神社
明治11(1878)	鳥居	石工 藤畑 作松 古本吾右エ門	小熊毛 日吉神社
明治11(1878)	弘法大師像	石工 池本勤作	向田 福厳寺
明治12(1879)	石碑	石工 岐部為治	榑来 岩倉社
明治12(1879)	石祠	石工 溝井喜八	小熊毛 歳神宮
明治14(1881)	鳥居	石工 池本 勤作 花岡嘉三郎	向田 天満社
明治14(1881)	石門	石工 花岡 晋吉 池本 勤作 花岡嘉三郎	向田 福厳寺
明治18(1885)	石橋碑	石工 吉武作平	榑来 沙川橋
明治19(1886)	石碑	石工 久保田鶴松	伊美 別宮社
明治19(1886)	溜池	石工棟梁 古江 安価 市郎 榑来 岐部為治郎	古江
明治20(1887)	棟札	石工 吉武作平	上岐部 山神社
明治20(1887)	石段	石工 池本勤作	向田 金毘羅遥拜所
明治21(1888)	石段	石工 吉武午太良	小熊毛 日吉神社
明治25(1892)	生目八幡宮碑	石工 池本勤作	向田 多賀社
明治26(1893)	石祠	石工 芹川喜市	千灯 龍神社
明治28(1895)	燈籠	石工 柿元文治	小熊毛 歳神宮
明治31(1898)	鳥居	石工 安部平八	伊美 別宮社
明治31(1898)	本社白殿	石工 池本勤作	向田 天満社
明治31(1898)	鳥居	石工 池本勤作	向田 多賀社
明治35(1902)	手洗石	石工 小野庄三郎 北崎清九郎	西方寺 許波多社
明治35(1902)	観音像	石工 久保田鶴松	伊美 慈雲寺

造立年	件名	石工銘	所在地
明治35(1902)	石碑	石工 岐部為二郎	榑来 永明寺
明治36(1903)	石段	棟梁 国広国造 安部三郎	伊美 妙吉寺
明治36(1903)	改築札	石工 小深田辰次	野田 岡田社
明治37(1904)	石碑	石工棟梁 上園古米吉 同 藤畑作太郎	小熊毛 日吉神社
明治37(1904)	溜池	石工棟梁 岐部為治郎	須川
明治38(1905)	墓石	岐部金平元紀76才	岐部 岐部家墓地
明治39(1906)	忠魂碑	石工棟梁 岐部喜兵紀元信	岐部 胎蔵寺
明治40(1907)	石段	石工 白井本五郎	伊美 妙吉寺
明治41(1908)	石碑	石工 芹川勝治	千灯 龍神社
明治43(1910)	棟札	石工 内尾清二郎	上岐部 山神社
明治44(1911)	石碑	石工 久保田鶴松	伊美浜 西宮社
明治44(1911)	臥牛像	石工 久保田鶴松	伊美 天満社
明治	石碑	石工 吉武仙太郎 岩並 由平 次郎丸徳平	大熊毛 日吉神社
大正3(1914)	石塀	石工頭 花岡今朝松 石工 朝山 羊 池田喜九郎 猪野 松男	白田 天満社
大正4(1915)	改築札	石工 小深田辰次 松成 完六	野田 岡田社
大正5(1916)	仁王	石工 久保田鶴松	岐部 胎蔵寺
大正5(1916)	石祠	仏師 法橋板井春哉作	小高島 蚕景社
大正6(1917)	燈籠	石工 内尾清二郎	上岐部 山神社
大正11(1922)	本堂改築	石工 内尾清二郎	上岐部 松林寺
大正12(1923)	敷石	石工 野田角治郎	榑来 岩倉社
大正13(1924)	石碑	石工 朝山 羊	大熊毛 日吉神社
大正14(1925)	石碑	石工棟梁 桜井礼作	小熊毛 常光寺
大正14(1925)	石祠	石工 永松喜一	千灯 蚕景社
大正15(1926)	狛犬	自刻 田辺忠二郎	榑海 山神社
大正15(1926)	石碑	石工 安部仁六	伊美 田中社
昭和3(1928)	鳥居	石匠 国重茂市	岐部 岐部社
昭和11(1936)	鳥居	石工 竹田津 津崎勾二	榑来 岩倉社
昭和13(1938)	石碑	石工 猪野松男	榑来 香来橋
昭和15(1940)	狛犬	彫刻師 渡辺高士 渡辺菊雄	伊美 別宮社
昭和31(1956)	棟札	石工 安田半歳 上金 智	榑来 地藏堂

注) 岐部安之丞政義は嘉永6年に没している。

2 国東町北部の石工

国東町北部の石造品のうち、石工名が見える最初の作品は現在のところ元享元年（1321）銘の長木家墓地国東塔で、「大工僧良戒」とある。以後中世を通じて二、三点見られるが、文明10年（1478）銘の岩戸寺仁王像に「作者清晋」とあるのを最後に近世初期まで、作品の上から石工名を確認することはできない。近世に入ると、元禄6年（1693）銘の王子神社の燈籠（写真35）に「大工中山仁助尉」と出てくるのが最初である。大工の肩書からみて、石工の棟梁であったと推測できる。同社の元禄15年（1702）銘の燈籠には「大工仲山仁口」とあるが、中山仁助と同一人物であろう。

前項の国見町の場合に比べて、国東町の場合は石工名を刻する江戸時代の作品は多く、その名前からみて早くから地元の石工が活躍していることが分かる。そのような中で、延享年間から宝暦年間にかけて田染（現豊後高田市）の石工豊田源左衛門の名が目につく。

- ① 供養塔（堅来安養寺・延享3年）
石工国崎郡田染豊田源左衛門
〃 松木甚之丞（写真36）
- ② 燈籠（浜崎貴船社・延享3年）
石工田染住豊田源左衛門
堅来村勝田儀介
- ③ 鳥居（富来浦熊野権現社・延享4年）
田染石工豊田源左衛門
堅来石工勝田儀介
- ④ 鳥居（行入山神宮・宝暦4年）
石工豊田源左衛門

前年度調査報告書『国東半島の石工1』では、宝暦10年（1760）の大儀寺仁王像に「田染石工 松本儀平次 同姓伊曾七」とあるのが田染石工の文字初見としている。しかしこの豊田源左衛門が、はっきりと「石工 田染住」あるいは「田染石工」と刻しているのが、田染石工の文字初見の作品としては14年ほどさかのぼることになる。ただしこの豊田源左衛門の名は、現在のところ国東町内のみで確認されており、田染では彼の作品は確認されていない。このことから、田染を中心として活躍するいわゆる田染石工の系譜と、豊田源左衛門は全く別の系統ということにもなる。前出の報告書によると、田染石工の中で豊田姓の石工が出てくるのは明治時代になってからである。

この豊田源左衛門が、その後どうなったのか、

また国東町だけに作品が残る田染地区に無いのはなぜか、田染石工の系譜の中での位置付けなど今後の課題の一つである。

作品に残る石工名から見ると、江戸時代の国東町北部では、安田姓石工・清国姓石工と佐藤茂助政近が代表的な石工といえることができる。安田・清国両石工とも何代か続いているが、佐藤茂助は彼一代で終わっているようである。ただし弟子は何名か確認され、後世まで作品が残っている。以下各石工についての系譜・作品等について述べていくこととする。

安田姓石工 現国東町来浦長野に、江戸時代後期を中心として活躍した石工で安田姓を名のる集団がある。これを総称して安田姓石工と呼ぶことにする。現在確認される最初の作品は、宝暦13年（1763）銘の三十仏石段で、「石工 安田傳右エ門」の文字が見える。傳右衛門はその他に、寛政3年（1791）銘の大聖寺仁王像、同年銘の明徳寺仁王像、寛政5年（1793）銘の金剛寺地藏像を残している。それでは、石段を積んでいた彼が仁王像などの制作にたずさわったようになったのは、いかにすれば石像彫刻の技法を習得したのは、いつ誰からかということになる。このことは大聖寺仁王像咩形（写真37）にある次の刻銘から推測することができる。

庄屋
猪俣栄右衛門
大願主
安田良助
石工板井対馬守
安田傳右衛門
夫力 村中

すなわち、この仁王像を作ったのは、板井対馬守と安田傳右衛門の2人ということである。一般に石工名を併記する場合、最初に記した方が師匠あるいは兄弟子ということになるので、板井対馬守が傳右衛門の師匠と考えられる。この板井対馬守は、昨年度調査した西国東郡香々地町夷の板井系石工の一人で、板井国広のことである(1)。結局傳右衛門は、佛師・石工であった板井国広から石像彫刻の技法を習得したといえるのである。

板井対馬守と安田傳右衛門の結びつきについては、文殊仙寺の存在が考えられる。当時文殊信仰の盛んであった同寺には、各方面から多くの信者達が参拝している。国見町の石工の項でも述べた



写真 35 王子社燈籠



写真 36 安養寺供養塔



写真 37 大聖寺仁王

ように、文殊仙寺参詣ということを通じて石工達の交流もあったのであろう。同寺の安永3年（1774）銘の燈籠狛犬には「石工 長野村安田政鶴 夷邑板井国広」とあるが、この安田政鶴と安田傳右衛門の関係は詳らかでない(2)。

次に安田姓で名の出てくる石工は、安田傳助である。現在のところ作品は明和7年（1770）銘の文殊仙寺の燈籠一点だけである。この燈籠については、文殊仙寺蔵の「明和八歳公用覚帳」の中に次のように出ている。

一、成佛村桜木新右衛門石燈籠老本明和七年庚寅六月ニ當山鉄輪之壇ニ被建宣候、石工ハ永野村安田傳次銀百廿目ニ而致請細工夫力手傳者當寺其外成仏寺ヲ被限加勢候、意趣ハ別名文ニ仰有、右之燈籠常夜料現米六石此利意宛之以利米寺ヲ永氏夜灯可照節ニ相極宜申候、元六石之證文請取宣右之米ハ手永迄号借ニとりて大庄屋本江預置之證文茂別紙有之候、以上

この史料によって、燈籠は安田傳次が銀120目で請け細工をしたことが分かる。ただし燈籠の銘文には

法印敬順 石工安田傳助
常夜燈
明和七庚寅六月吉辰

施主成佛村桜木新右衛門
とあり、石工は傳次ではなく傳助であることがはっきりする。

彼は文政4年（1821）10月22日に没しているが、文殊仙寺の燈籠から約50年間、ほとんど作品が見当らず詳細が不明な人物である。ただし彼が家太夫政鶴を名のった可能性もあるので、次の家太夫の項で述べてみたい。

次に名が出てくるのは安田家太夫である。文化4年（1807）銘の、常光寺（国見町小熊毛）仁王像に「石工 安田家太夫」とある。この家太夫という名は、代々安田家で継がれた名で墓石などからみて次の4名が確認される。

- ・安田家太夫（安田家墓地・安永3年5月8日没）
- ・安田家太夫（常光寺仁王・文化4年）
- ・安田家太夫政勝（安田家墓地・嘉永元年没）
- ・安田家太夫政鶴（市杵嶋神社燈籠・文久3年）

以上のほか、来浦平原に安田家太夫とのみ刻した薬師如来像・聖観音像があるが、4人の家太夫のうちどの人物に相当するかは不明である。

ところでこの4名のうち、文久3年（1863）銘の市杵嶋神社の燈籠にある家太夫政鶴は、国見町の石工の項で述べたように、安永3年（1774）8月

日銘の文殊仙寺燈籠狛犬に見える安田政鶴と同一人物と思われる。そこでこの政鶴であるが、安永3年没の家太夫の次に家太夫を名乗った人物ということになろう。先代家太夫が没した安永3年5月から、次の家太夫の名が見える文化4年の常光寺仁王像(写真38)造立までの期間、安田姓で作品を残しているのはこの安田政鶴と、前述の安田傳右衛門の2人である。しかし傳右衛門は、寛政3年(1793)銘の金剛寺地藏像に「石工 當村安田傳右衛門」とあるように、家太夫あるいは政鶴は名乗っていないようである。

となれば、明和7年銘の文殊仙寺燈籠に出てくる安田傳助が家を継ぎ、家太夫政鶴を名のったのではなかろうか。傳助は文政4年(1821)10月22日に没しているので、常光寺仁王像の作者家太夫もこの傳助のことと推測できる。

傳右衛門のところでも簡単にふれたが、石工名を並記した場合最初の石工が師匠であるとすると、

- ・安永3年銘文殊仙寺燈籠狛犬
- 安田政鶴
- 板井国廣 (= 対馬守)
- ・寛政3年銘大聖寺仁王像
- 板井対馬守 (= 国廣)
- 安田傳右衛門

となり、安田政鶴…板井国廣 (= 対馬守) —安田傳右衛門の系譜ができる。ただし、板井対馬守は注(1)でふれたように、木彫仏師としては相当の技量を持って活躍していた人物であるので、必ずしも政鶴と師弟関係にあるとはいききれない。ともあれ、安田傳助が家を継ぎ、家太夫政鶴を名のったということがいえるのではなかろうか。

次に安田姓石工で出てくる石工に、安田九助がいる。彼の墓石には「安田九助正次」「文政12丑2月12日 行年61」とあるので明和6年(1769)生れということになる。作品としては次の三例が確認されている。

- ・文政2年銘文殊仙寺燈籠(写真39)
- 世話人 安田九助
- 佐藤茂助
- 石工 金剛寺紋蔵
- ・文政5年銘三十仏仁王像
- 石工 安田九助
- 佐藤茂助
- ・文政5年銘文殊仙寺十王堂内十一面観音
- 石工 安田九助

岐部氏安兵衛 佐藤茂助

これまで何度かふれたように、名前の彫り方から見ると、安田九助—佐藤茂助という師弟関係が考えられる。十一面観音像に見える岐部安兵衛については、国見町の石工の項を参照してもらいたい。ここでこれまで出てきた石工達の系譜をまとめてみると次のようになる。(点線部は不明)

安田家太夫政鶴(傳助カ) ——— 安田九助正次
 ↓
 板井対馬守国廣 ——— 安田傳右衛門
 ↓
 安田九助正次 ——— 佐藤茂助政近 ———

岐部安兵衛 ——— 岐部茂平治 ———

すなわち18世紀後半から19世紀にかけて、板井系石工と安田姓石工、安田姓石工と岐部姓石工との間に何らかの交流があったことが分かる。そして、名前を並記する作品の多くが文殊仙寺あるいはその周辺に残っているということは、当時の文殊信仰あるいは文殊仙寺の大宝篋印塔の造立が大きく関連していると考えられる。今回は時間の関係上割合したが、今後同寺に保管されている江戸時代後半から幕末期にかけての記録・日記類の調査を実施することによって、より詳細な事項が掌握できるのではないかとと思われる。

佐藤茂助政近とその弟子達 佐藤茂助は現国東町浜崎の人。文政年間頃から天保年間までに活躍した人物で、石工以外に大工・鍛冶屋も行っていたといい、彼の名人芸に関する逸話もいくつか残っている(3)。石造品で現在残っている作品は次のとおりである。

- ①文殊仙寺燈籠(文政2年)
- ②三十仏仁王像(文政5年)
- ③文殊仙寺十一面観音像(文政5年)
- ④三十仏燈籠(文政5年)(写真40)
- ⑤初八坂社仁王像(文政7年)
- ⑥来浦八坂社狛犬(文政7年)
- ⑦浜崎 燈籠(文政11年)(写真41)
- ⑧浜崎貴船社鳥居(文政12年)
- ⑨富来浦権現社(文政13年)
- ⑩大熊毛日吉神社燈籠(天保5年)
- ⑪禅林寺仁王像(天保6年)
- ⑫岩戸寺石殿(天保9年)
- ⑬東堅来秋葉社仁王像(天保12年)



写真 38 常光寺仁王



写真 39 文殊山寺燈籠



写真 40 三十仏燈籠

⑭小松神社手洗石(天保13年)

①~③は安田九助と並んで名を刻しているが、④は茂助1人の名である。この頃から独立して制作にたずさわり始めたと思われる。そして⑤の仁王像には「佐藤茂助政近」とあり、安田九助正次の正(政)の字を使って政近を名のっている。

彼の作品は、大きく堂々とし手の込んだものが多い。例えば⑤の仁王像は、国東半島内で最大のものであるし、⑫の石殿は柱二本を欠失するが、堂々たる構えのものである。⑩の燈籠は、竿部に獅子2匹を彫り、中台には請花を彫った精巧なものである。⑭の手洗石も獅子や龍の彫刻をほどこしている。また⑦の燈籠(1対)の火袋の窓には仁王像(阿形・吽形)、狛犬を彫るなど他の燈籠には見られない凝った意匠が見られる。

なお⑧の鳥居には「石工 佐藤茂左衛門政近」とあるが、茂助のことであろう。茂左衛門と刻した例はこれ以外にはない。ところでこの鳥居は、現在は破損しており左右の柱のみが残っている。銘文によると安政3年(1856)に富来邑の石工、有松萬造(後述)によって修復されている。文政12年(1829)の建立からわずか27年で修復したということは、天災により修復を要したのでなければ、佐藤茂助にとっては失敗作であったといえそ

うである。

彼の生年、没年は現在のところは不明である。次に、作品に残る石工名を中心に、佐藤茂助の弟子と考えられる石工達について簡単にふれてみる。

まずあげられる石工として、岩戸寺の郷司市助友重がいる。ただし彼の場合は佐藤茂助との関係がうかがえるのは文政7年(1824)銘の来浦八坂社の狛犬(写真42)に

石工
 浜崎佐藤茂助政近
 岩戸寺郷司市助友重

とあるだけで、はたして師弟関係にあったのかどうかは不明である。郷司市助はほかに文殊仙寺の燈籠(文政7年)や、千燈寺奥院六所権現石段(年不詳)などを作っている。地藏峠(国見町と真玉町三畑の間の峠)には、文政年間に郷司某が遭難者を弔うため石の地藏像を安置した(4)というが、年代からみて郷司某はこの郷司市助友重のことであろうか。

次にはっきり弟子と分かる人物として井上幸左衛門政成と清国茂左衛門政森をあげることができる。清国茂左衛門については後述するので、ここでは井上幸左衛門について述べる。

井上幸左衛門が、佐藤茂助と並んで名を刻した最初の作品は、文政13年(1830)銘の富来浦熊野権現社の鳥居で

佐藤茂助政近

石工 井上幸左衛門政成

清国茂左衛門政森

とある。すでに佐藤茂助政近の「政」の字を使用して政成と名のっているところからみると、彼が佐藤茂助の弟子になったのは、佐藤茂助が政近を名のる文政7年前後と推定されよう。

天保2年(1831)銘の稲田姫神社の鳥居に「石工富来村井上幸左衛門政成」と刻しているのが、現国東町富来出身の石工であることが分かる。現在のところ、以上の作品以外には天保12年(1841)銘の堅来秋葉社仁王像、天保14年銘の富来八坂社鳥居、弘化2年(1845)銘の富来八坂社狛犬(写真43)などがある。秋葉社の仁王像は佐藤茂助との合作であり、富来八坂社狛犬には「獅子彫當邑吉田蘆仙 石工 井上幸左衛門」とあるので、狛犬の基礎を築いたのであろう。狛犬を彫った吉田蘆仙は富来村庄屋吉田源五右衛門のことである。寛政9年(1797)に生まれた源五右衛門は、生来芸術的天分に恵まれ、蘆仙と号し彫刻のみならず絵画にも傑作を残している。この狛犬も他の神社の例に比して、精巧な彫りで動きも見られる優品である。また同社神殿の彫刻も彼の作といわれ、その手法は素人の域を脱したすばらしいものである。慶応3年(1867)70才で没している。

以上のほか、井上幸右衛門の名は、富来八坂社神殿の棟札に天保14年の年号で「石工棟梁井上幸左衛門」と出ている(5)。この時期には石工棟梁として活躍していたことが分かるが、その後井上姓の石工は見当らず彼一代で終わったようである。

井上幸左衛門以外に、佐藤茂助と作品に名を並記する石工が何名かいる。例えば安松直蔵、秦竹市、上峯弥助 上峯喜助などであるが、作品も少なく詳細は不明である。

次に井上幸左衛門、清国茂左衛門が、佐藤茂助政近の「政」の字をとり、それぞれ政成、政森と名のっていることから「政」の字のつく石工を拾い出してみると次のようになる。ただし明治時代以降の作品のみに出てくる石工については省略した。

・有松萬造政信(安政3年・富来八坂社燈籠ほか)

・上峯桂三郎政定(安政3年・小松神社燈籠)
・長木利左衛門正吉(安政4年・稲田姫神社鳥居)

・亀石長九郎政量(元治2年・王子神社燈籠)
有松萬造は井上幸左衛門同様富来の石工で、安政3年(1856)銘の富来八坂社の燈籠には、佐藤茂助の弟子である清国茂左衛門と並んで名前が出ている。また浜崎貴船社の佐藤茂左衛門政近作の鳥居を修復したのが彼であることなどから考えると、この有松萬造も佐藤茂助の弟子あるいはその流れを汲むものと考えられるのである。燈籠・鳥居を主に手がけ、富来八坂社の明治5年(1873)銘の農耕絵馬には世話人として名前が出ている。

上峯桂三郎政定は、安政3年銘の小松神社燈籠に前記の有松萬造と並んで名が見える。同社の天保13年銘の手洗石には、佐藤茂助と共に「見地邑上峯弥助 全邑 上峯喜助」とあるので、彼も佐藤茂助関係の石工と考えてもよからう。

長木利左衛門正吉は、安政4年銘の稲田姫神社の鳥居に、清国茂左衛門正森と並んで名が見える。肩書に「當村」とあることから現国東町東堅来の石工であったことが分かる。富来八坂社の安政3年銘燈籠には、清国茂左衛門や有松萬造と並んで長木孫市の名が見える。長木孫市の名は慶応元年(1865)銘の深江牛頭社鳥居にも「石工 堅来長木孫市政吉」と出ている。この孫市政吉と利左衛門正吉がどういう関係にあるのか、あるいは同一人物であるのか、今回の調査では確認できなかった。また国東町岩屋地区で、明治時代から大正、昭和にかけて活躍した石工に長木栄作、恒男の父子がいるが、堅来の石工長木氏との関係は不詳である。

亀石長九郎政量は、今調査で確認した作品が元治2年(1865)銘の大恩寺王子社の燈籠1件のみであるので詳細は不明である。ただし明治20年(1887)銘の稲田姫神社の礎に「大恩寺村 石工 亀石惣八正久」とあるので、亀石長九郎も大恩寺出身の石工であることが推測できる。

清国姓石工 現国東町富来で、江戸時代から明治時代を通じて活躍した石工の中に清国姓を名のる集団がある。安田姓石工同様これを総称して清国姓石工と呼ぶことにする。現在作品の上から判明している清国姓石工をあげると次のとおりである。

・清国元助(安永5年・浜崎直日神社鳥居ほか)



写真 41 浜崎仁王(火袋)



写真 42 来浦八坂社狛犬



写真 43 富来八坂社狛犬

・清国茂左衛門政森(文政13年・富来浦熊野権現社鳥居ほか)(写真44)

・清国嘉四郎藤原宗政(明治2年・富来八坂社鳥居ほか)

・清国伊勢松森光(明治31年・堅来山神宮鳥居ほか)

・清国宗利(明治45年・富来八坂社石碑ほか)

清国元助は、直日神社鳥居以外に、安永9年(1780)銘の現武蔵町吉弘の天神社神殿、寛政4年(1792)銘の富来八坂社狛犬(写真45)にそれぞれ「富来石工 清国元助」(阿形)石工 當村元助(咩形)石工 清国元助」とある。相当広い地域で活躍していたことが分かる。次に出てくる茂左衛門政森であるが、彼は前述のように佐藤茂助の弟子である。元助の寛政4年銘の狛犬から茂左衛門の文政13年(1830)銘の鳥居まで約40年間、清国姓石工の作品が見当たらないが、今後の調査で出てくる可能性はある。例えば石工であったかどうか不明であるが、文政年間の燈籠に「清国元之照」という名が見える例もある。

茂左衛門の作品も、約30年間にわずかに3点を確認するにすぎないが、彼が募作であったのか、あるいは作品に名を刻すことが少なかったのか、詳細な調査が必要である。

明治以降になると、喜四郎・伊勢松・宗利らが作品を残しているが、くわしくは今後の調査を待つことにする。

以上富来の清国姓石工について簡単にふれたが、彼等の作品をみると、14点中鳥居が7、石碑4、

狛犬1、燈籠1、神殿1と鳥居が圧倒的に多い。鳥居はどちらかというと、石仏など他の石造品に比べて作品の上に際立った特徴を出しにくい。そのため様式から清国姓石工の作品を追求することは困難である。清国姓石工の系譜を確実にものにしていくためには、各作品の精査が必要であるが、今回は調査期日の関係から次の機会にゆずることとした。

備前石工 今回の調査の中で、他国の石工名が何名か出てきた。中でも備前石工の名が三例ほど確認されたのでこれについて簡単にふれておく。

近世の瀬戸内海沿岸地域は多くの石工達が出たところという。石材の産地であったということがその大きな要因であろうが、干拓事業あるいは段々畑の石垣などに石工の技術が必要であったことも十分に考えられることである。これまで述べてきた国見・国東の石工が、細工を主とする石工であるのに対して、これら瀬戸内沿岸の石工達は石垣師とも呼ばれ、石垣を積む石工がほとんどであった。特に備前の石工は、備前積みといって野面石一点張りの石積み技法を得意としていた。今回確認された3例とも石垣であるところから、江戸時代に備前の石垣師が出稼ぎとして諸国に出かけていたことが分かる。

①国東町富来浦久保屋敷跡石垣(写真46)

石垣にはめ込んだ石に下記の銘文がある。

是此石垣幾星霜破壊
已不少依而再營之耶
太祖之基業者也



写真 44 富来八坂社狛犬

橋本七郎右衛門実久
石工備前国
小嶋郡宮浦

皆寛政五 井上八重吉
癸丑之孟夏 同 品造

②『河野家年代記』（豊後高田市田浜河野正二氏蔵）(6)

天保八年

十月中東之屋敷石垣出来川縁通り門際迄押廻し備前石工松五郎弥市庄蔵頭ニ而積 練堀出来都而自普譜

③安岐町明治日吉社石垣

天保十一歳 名主財前春助
奉寄進門石垣為村中安全也
子初春 石工備前弥吉
熊太郎
新海秀三郎
柏原芳之助

①の久保屋は、江戸時代初期から続いた豪商で、この石垣に名の見える橋本七郎右衛門実久は8代目にあたるという。

以上の備前石工以外に、同じ瀬戸内沿岸の石工



写真 45 富来浦熊野権現社鳥居



写真 46 富久浦久保屋敷跡石垣

の名も何名か見える。慶応2年（1866）銘の文殊仙寺手洗石の「尾道石工 市村屋栄助」などである。また前回の調査地である豊後高田市市福の慶応4年銘の鳥居には「防州庄波石工弥左衛門元只」とある。同じ防州の石工は、日田市伏木峠の石畳道にも関与し、嘉永4年（1851）銘の石段修治碑に「石組 防州 吉兵衛 永次郎」とある。このような江戸時代後末期における他国、特に瀬戸内沿岸の石工達の活動状況についての調査は、今後の一つの課題といえよう。

注(1)天明3年（1783）銘木造観音菩薩像（香々地町道園観音堂）に佛師板井対馬守の墨書、天明4年銘の手洗石（香々地町横岳観音堂）に石工板井国広の陰刻がある。

(2)活動時期がほぼ同時なので兄弟とも考えられる。

(3)『国東町史』 国東町史刊行会 昭和48年

(4)『伊美町略誌』 伊美町文化協会 昭和26年

(5)(3)に同じ

(6)大分大学豊田寛三助教授の御教示による。

表12 石工在銘品一覧表(国東町北部)

造立年	件名	石工銘	所在地
元禄6 (1693)	燈籠	大工 中山仁助尉	大恩寺 王子神社
元禄15(1702)	燈籠	大工 仲山仁□	大恩寺 王子神社
延享3 (1746)	供養塔	石工 国東郡田浜 豊田源左衛門 " 松本 甚之丞	堅来 安養寺
延享3 (1746)	燈籠	石工 田染住 豊田源左衛門 堅来村 勝田 儀介	浜崎 貴船社
延享4 (1747)	鳥居	田染石工 豊田源左衛門 堅来 勝田 儀介	富来浦 熊野権現社
寛延3 (1750)	燈籠	石工 勝田儀助	堅来 安養寺
宝暦3 (1753)	鳥居	石工 勝田儀助	堅来 山神社
宝暦9 (1759)	燈籠	石工 岩屋村 吉武宗□	浜崎 貴船社
宝暦13(1763)	石段	石工 安田伝右エ門	岩戸寺 三十仏
明和3 (1766)	燈籠	石工 良助	堅来 山神社
明和5 (1768)	石垣	石工 当村 丸尾伝藏 小熊毛 長治良 来浦村 徳右衛門 来浦村 長 松	来浦 大聖寺
明和6 (1769)	燈籠	石工 源六	堅来 明德寺
明和7 (1770)	燈籠	石工 安田伝助	大恩寺 文殊仙寺
安永3 (1774)	墓石	安田家太夫	来浦 安田家墓地
安永3 (1774)	燈籠狛犬	石工 安田 政鶴 板井 国廣	大恩寺 文殊仙寺
安永5 (1776)	鳥居	石工 清国元助	浜崎 直日社
安永5 (1776)	供養塔	石工 喜兵	大恩寺 藁蓑地藏堂
天明元(1781)	鳥居	石工 当邑 良助	堅来 稲田姫神社
寛政3 (1791)	鳥居	石工 良介	堅来 秋葉社
寛政3 (1791)	仁王	石工 板井 対馬守 安田伝右衛門	来浦 大聖寺
寛政3 (1791)	仁王	石工 安田伝右衛門	堅来 明德寺
寛政4 (1792)	狛犬	石工 清国元助	富来 八坂社
寛政5 (1793)	地藏像	石工 当村 安田伝右衛開	来浦 金剛寺
寛政5 (1793)	石垣	石工 備前国小島郡 宮浦 井上八重吉 同品造	富来浦
文政2 (1819)	燈籠	石工 安田九助 佐藤茂助	大恩寺 文殊仙寺
文政4 (1821)	墓石	安田伝助	来浦 安田家墓地
文政5 (1822)	仁王	石工 安田九助 佐藤茂助	岩戸寺 三十仏
文政5 (1822)	十一面観音像	石工 安田 九助 岐部氏安兵衛 佐藤 茂助	大恩寺 文殊仙寺
文政5 (1822)	燈籠	石工 佐藤茂助	岩戸寺 三十仏
文政7 (1824)	仁王	石工 浜崎 佐藤茂助政近	原 初八坂社
文政7 (1824)	狛犬	石工 浜崎 佐藤茂助政近 岩戸寺 郷司市助友重	来浦 八坂社

造立年	件名	石工銘	所在地
文政7(1824)	鳥居	石工 向田邑 徳之助 当邑 虎松	堅来 稲田姫神社
文政7(1824)	燈籠	石工 郷司市助	大恩寺 文殊仙寺
文政7(1824)	石段	石工 郷司仲右衛門	大恩寺 文殊仙寺
文政8(1825)	燈籠	石工 虎松	堅来 秋葉社
文政10(1827)	手洗石	石工 岐部安兵衛	大恩寺 大山神社
文政10(1827)	供養塔	石工 岐部安兵衛	大恩寺 大山神社前
文政10(1827)	燈籠	石工 富来村 鹿蔵	堅来 秋葉社
文政10(1827)	燈籠	石工 当村 安松直蔵 富来村 鹿蔵	浜崎 貴船神社
文政11(1828)	燈籠	石工 佐藤茂助政近 秦 竹市 幸助 安松直蔵	浜崎 路傍
文政12(1829)	墓石	安田九助正次61才	来浦 安田家墓地
文政12(1829)	鳥居	石工 佐藤茂左衛門政近	浜崎 貴船社
文政13(1830)	石碑	石工 岐部 安兵衛 猪俣 宇助 同 武左衛門	大恩寺 文殊仙寺
文政13(1830)	鳥居	石工 佐藤 茂助政近 井上幸左衛門政成 清国茂左衛門政森	富来浦 熊野権現社
天保2(1831)	燈籠	石工 岐部安兵衛	大恩寺 文殊仙寺
天保2(1831)	鳥居	石工 当村 今邑源右衛門則次 富来村 井上幸左衛門政成	堅来 稲田姫神社
天保4(1833)	燈籠	石工 吉武京介	岩戸寺 六柱神社
天保4(1833)	石碑	石工 樫坂峰蔵 深水顯助 岩木逸蔵	来浦 八坂社
天保6(1835)	仁王	石工 佐藤茂助政近	成仏 禪林寺
天保9(1838)	石殿	石工 浜崎 佐藤茂助 全 六右エ門 全 久左エ門 全 林 助 全 久兵エ 全 佐 吉 全 嘉 平	岩戸寺 岩戸寺
天保10(1839)	鳥居	石工 吉武良右衛門宗近	堅来 金比羅宮
天保11(1840)	石段	石工 朝比六右エ門	岩戸寺 三十仏
天保12(1841)	仁王	石工 佐藤茂助政近 井上幸左衛門政成	堅来 秋葉社
天保12(1841)	宝篋印塔	石工 岐口安之国 同 定三郎	大恩寺 文殊仙寺
天保13(1842)	手洗石	石工 浜崎 佐藤茂助 見地邑 上峰弥助 全邑 上峰喜助	中田 小松神社
天保14(1843)	鳥居	石工 深江村 猪俣林助則光	富来浦 熊野権現社

造立年	件名	石工銘	所在地
天保14(1843)	鳥居	石工 当村 井上幸左衛門	富来 八坂社
天保15(1844)	石碑(石垣)	石工 猪俣林助	堅来 安養寺
弘化2(1845)	燈籠	石工 深江 猪俣林助	大恩寺 大山神社
弘化2(1845)	狛犬	獅子彫 当邑 吉田蘆仙 石工 井上幸左エ門	富来 八坂社
嘉永元(1848)	墓石	安田家太夫政勝	来浦 安田家墓地
安政3(1856)	燈籠	石工 有松 万造 清国茂左エ門 長木 孫市 同 文吉 溝部 九平 坂口長九郎	富来 八坂社
安政3(1856)	鳥居	石工 岩戸寺 桜木与助 当村 石浦助市	堅来 山神宮
安政3(1856)	燈籠	石工 富来村 有松万造政信 当村 上峰桂三郎政定 同 喜助則定	中田 小松神社
安政3(1856)	玉垣	石工 岩戸寺村 惣助 当村 治助	堅来 稲田姫神社
安政3(1856)	鳥居	石工 富来邑 有松万造	浜崎 貴船社
安政4(1857)	石垣	石工 村 次 助 仁四良	堅来 稲田姫神社
安政4(1857)	鳥居	石工 富来村 清国茂左衛門正森 当村 長木利左衛門正吉 同 文吉	堅来 稲田姫神社
安政4(1857)	燈籠	石工 竹田津 津崎増右エ門	浜崎 貴船社
安政4(1857)	玉垣	石工 長木利左エ門	堅来 稲田姫神社
安政5(1858)	鳥居	竹田津石工 三番野兼吉直正	岩戸寺 六柱神社
万延2(1861)	石祠	石工 有松万蔵	浜崎 直日社
文久2(1862)	燈籠	石工 岐部茂平治元義 先石工 安田家太夫政靄	来浦 市杵島神社
文久2(1862)	燈籠	石工 有松万造	富来浦 熊野権現社
文久3(1863)	燈籠	石工 有松万蔵	浜崎 直日社
文久4(1864)	燈籠	石工 上岐部 綾部孫平	来浦 八坂社
元治2(1865)	燈籠	石工 岩戸寺 桜井口助	来浦 市杵島神社
元治2(1865)	燈籠	石工 亀石長九郎政量	大恩寺 王子社
慶応元(1865)	鳥居	石工 堅来 長木孫市政吉 猪俣 茂市	深江 牛頭社
慶応2(1866)	鳥居	石工 池田音松	富来 八坂社
慶応2(1866)	手洗石	尾道石工 市村屋栄助作	大恩寺 文殊仙寺
年不明(江戸時代)	手洗石	石工 長木文吉	堅来 稲田姫神社
年不明(江戸時代)	薬師如来	安田家太夫	来浦 平原
年不明(江戸時代)	聖観音	安田家太夫	来浦 平原
明治2(1869)	鳥居	石工 有松万造	富来 素戔鳴神社

造立年	件名	石工銘	所在地
明治3(1870)	鳥居	願主 清国嘉四郎 溝部 長吉	富来 八坂社
明治9(1876)	石祠	石工 池田喜八郎	富来 八坂社
明治11(1878)	石段	石工 見地村 松本吟之助政光 後見 松本敬三郎政直	浜崎 直日社
明治11(1878)	鳥居	石工 小宮七五郎正則	浜崎 直日社
明治13(1880)	石垣	石工 原村 清田与吉 ヨコテ 小松平吉	浜崎 直日社
明治16(1883)	鳥居	石工 富来村 清国嘉四郎	浜崎 山神社
明治16(1883)	石垣	石工 石丸勝五郎	浜崎 直日社
明治17(1884)	鳥居	石工 浜邨 榎坂吉藏 向田邨 池本寛作	来浦 八坂社
明治20(1887)	礎	大恩寺村石工 亀石惣八正久	堅来 稲田姫神社
明治20(1887)	石垣	石工 綾部孫平	来浦 市杵島神社
明治20(1887)	鳥居	石工 清国嘉四郎 藤原宗政	富来 八坂社
明治22(1889)	石碑	石工 榎坂吉造	来浦 恵比須社
明治24(1891)	鳥居	石工 宮崎喜三郎	来浦 市杵島神社
明治29(1896)	燈籠	石工 佐戸竹六	大恩寺 路傍
明治29(1896)	鳥居	石工 当村 花木末吉義督	堅来 稲田姫神社
明治29(1896)	燈籠	石工 中田 清原正策・政次 柳 安田格市・政浪	堅来 稲田姫神社
明治30(1897)	石段	石工 当村 宮永曜太郎	堅来 稲田姫神社
明治30(1897)	石碑	石工 花木末吉義督	堅来 稲田姫神社
明治30(1897)	石祠	石工 佐戸竹六	大恩寺 王子社
明治31(1898)	石門	石工 花木末吉義督	堅来 安養寺
明治31(1898)	鳥居	富来邑石工 清国伊勢松森光	堅来 山神宮
明治33(1900)	石碑	石工 吉武平八重度	堅来 安養寺
明治35(1902)	石碑	石工 富来 清国森光	深江 牛頭社
明治35(1902)	石碑	石工 猪俣善平清道	堅来 路傍
明治37(1904)	石垣	石工 山本弥九郎	来浦 八坂社
明治39(1906)	石碑	石工 速見郡日出町 大塚安太郎	来浦 八坂社
明治41(1908)	石碑	石工 豊崎村岩屋 吉武常右エ門宗次	堅来 稲田姫神社
明治42(1909)	石碑	石工 花木末吉義督	堅来
明治43(1910)	石碑	石工 富来町 真城与兵宗保 宮永紋太郎繁正	堅来 稲田姫神社
明治44(1911)	石碑	石工 栗本国助	来浦 市杵島神社
明治45(1912)	鳥居	石工 佐藤竹六 佐藤正男	大恩寺 大山神社
明治45(1912)	鳥居	石工 岐部嘉兵	来浦 市杵島神社
明治45(1912)	石碑	石工 清国宗利	富来 八坂社
大正2(1913)	石柱	石工 佐戸竹六	大恩寺 路傍

造立年	件名	石工銘	所在地
大正2(1913)	石碑	石工 猪原和一	大恩寺 文殊仙寺
大正4(1915)	石碑	石工 園田牛男	深江 牛頭社
大正4(1915)	石碑	石工 清国宗利	寺山 吉祥寺
大正5(1916)	鳥居	石工 佐藤竹六	大恩寺 王子神社
大正5(1916)	石碑	石工 富重小六	富来 八坂社
大正6(1917)	石碑	石工 佐戸正男	大恩寺 夫婦石
大正7(1918)	石碑	石工 花木伊勢三 清国伊世松	深江 牛頭社
大正7(1918)	墓石	世話人兼石工 山下竹治郎	寺山 吉祥寺 賢融大和尚塔
大正7(1918)	石碑	石工棟梁 真城与兵宗保 石工 山下竹治郎公重	浜崎 貴船社
大正8(1919)	鳥居	石工 佐戸竹六	大恩寺 王子神社
大正9(1920)	石堀	石工 矢野 君太 朝位寅二良 吉武 繁 園田 丑夫	岩戸寺 六柱神社
大正10(1921)	燈籠	石工 吉武 繁	来浦 八坂社
大正11(1922)	石碑	石工 石丸勝五郎 真城 □司	深江 路傍
大正11(1922)	石碑	石工 ワラミノ 佐戸正男	富来 八坂社
大正11(1922)	石碑	石工 佐戸竹六	大恩寺 山神社
大正13(1924)	井戸枠	石工 真城 清	深江 牛頭社
大正13(1924)	玉垣	石工 佐戸竹六	大恩寺 王子社
大正14(1925)	石碑	石工 岩屋 長木恒男	深江 牛頭社
大正15(1926)	鳥居	石工棟梁 ワラミノ 佐戸竹六	堅来 稲田姫神社
昭和3(1928)	燈籠	石工 花木末吉義督	堅来 安養寺
昭和3(1928)	石段	石工 寺山 真城 清	堅来 稲田姫神社
昭和4(1929)	石碑	石工 向田 猪野松男	深江 牛頭社
昭和6(1931)	鳥居	周防徳山石工 国重茂市	堅来 稲田姫神社
昭和7(1932)	地藏像	石工 吉武荒治 吉武安之	岩戸寺 岩戸寺
昭和8(1933)	石碑	地形石工 佐戸竹六 石工 清水福松	大恩寺 大山神社
昭和8(1933)	石碑	石工 豊崎村 岩本正則	富来 路傍
昭和9(1934)	石碑	石工 イワヤ 長木恒男	深江 公民館前
昭和9(1934)	石祠	石工 真城智司	大恩寺 王子社
昭和10(1935)	石碑	石工棟梁 岩本正則	富来 八坂社
昭和13(1938)	仁王	松男 作 石工 佐戸正男	堅来 安養寺

第3節 半島東南部の石工

1 国東町南部の石工

国東町のほぼ中央を流れる田深川上流の豊崎地区岩屋に十数代続いた石工吉武家があるというので、この地域を中心に石造品の石工在銘調査を行った。吉武家の石工在銘造品は、岩屋を中心とした田深川流域の豊崎地区に多くみられ、北は富来地区の浜崎貴船社、南は武蔵町麻田産霊社など広範囲に分布している。(図4)

国東町で最古の石工在銘造品のひとつに、元禄6年(1693)に大工中山仁助が造立した大恩寺地区の王子神社燈籠がある。次に正徳三年(1713)石工宇佐・吉用兵左衛門・同姓半七の銘が刻まれた泉福寺参道石段をあげることができる。この他に、吉用兵左衛門と半七が作った石造品が3基ある。これらは国東町内の石工在銘造品の嚆矢である。宇佐出身の石工が、国東町の石工に指導的影響を与えたのではないかと推測できる。

18世紀中頃から19世紀中頃まで、1人の石工が何種類もの石造品を1人で手がけているのが目立つ。19世紀中葉を過ぎると、複数の石工達によって造立されることが多くなり、石工が増えたのではないと思われる。

宇佐石工吉用氏 吉用兵左衛門と半七の最初の作品は泉福寺(曹洞宗九州総本山)の石段である。これは横手村の利行久兵衛喜捨口の発願によって作られ、幅約6.3m・高さ約6mで24段の大きな



写真 49 岩屋熊野社鳥居

石段(写真47)である。この他に共同製作の作品として、興導寺地区の桜八幡社(旧県社)の寛延元年(1748)銘の鳥居がある。これは八幡鳥居に属する鳥居で、円柱形の柱の根元には根巻石を配し、柱上部に台輪をつけ、反りの強い笠木と鳥木を載せている。桜八幡と彫られた額束が掛けられ、貫の鼻は笠木や鳥木と同様に斜めに切り落とされている。これと同じ形式の鳥居(写真49)が岩屋熊野社にあり、柱に万葉仮名で和歌が陰刻されており、寛延二年(1749)宇佐石工吉用氏と刻まれている。安国寺大神宮の棟札(1746)に、吉用兵左衛門と半七が石工として従事したことが記されている。兵左衛門は銘文の配列から、半七の師匠、あるいは年長者であろう。泉福寺石段より27年後



写真 47 泉福寺参道石段



写真 48 桜八幡社鳥居



写真 50 泉福寺経王千部供養塔

に作られた同寺境内の供養塔などから、2人は恐らく親子ではなかったかと推測できる。

兵左衛門と半七の共同製作の期間は、銘文からみて正徳3年(1713)から寛延元年(1748)である。兵左衛門が桜八幡宮の鳥居を作ったのは、泉福寺石段より35年後である。当時かなりの高齢に達していたかと思われる。以後、兵左衛門の作品は見つからないのでこの頃を境として石工の職を退いたと考えられる。

元文5年(1740)の泉福寺経王千部供養塔(写真50)に半七と刻まれている。総高約3.2m、基礎は方形の三重台座、八弁の反り花を配し、塔身4面に次の銘文が刻まれている。

国泰安民 経王千部供養塔 存亡利益
受持読誦解説書写 上奉三宝中報四回心

下及六道皆同供養

更銘日 上來功勳廻施衆生 誓存七者所願均成
千時元女五歳次庚申夏安居日

真読連衆四十三人 化縁檀信徒若干人

當山現住達去叟敬 石工吉用半七

笠は照屋根で、その上に二重の露盤をおき、宝珠は四方から火焰に囲まれ、全体的に重量感と安定感にあふれた力作である。

この他、年号は刻まれていないが、岩屋熊野社参道の石段は半七の作品である。寛延2年の鳥居や石段などから、石段上の両側に建っている寛延3年(1750)銘の燈籠も、吉用半七が刻んだものと推定できる。

宇佐の石工吉用氏は、国東の石工達、とりわけ

吉武一門に大きな影響を与えたようである。この件については、吉武吉左衛門のところで触れる。

吉武吉左衛門 国東町大字岩屋に、江戸中期から明治末期まで石工として活躍した吉武家が現存している。吉武家の石工達は、系図や古文書や過去帳等が残っていないので、詳しくはわからない。残されている約30基の有銘石造品からみて、4人の石工が確認されている。(表13)

吉武一門の中で最初に登場するのは、宝暦5年(1755)から安永元年(1773)にかけて活躍する吉武吉左衛門宗近(表13)である。吉武家墓地の天明4年(1784)の供養塔の台座には、吉武家初代から7代までの俗名と戒名が刻まれている(表14)。6代目を除き、全員が吉左衛門を襲名している。初代から4代までの吉左衛門と6代目実右衛門の作品は見あたらず、5代目吉左衛門宗近の作品を4基確認できた。燈籠2基と手水鉢1基と鳥居1基で、18年の間に製作されている。一作目は宝暦5年の横手神社燈籠(写真51)で、「豊後国東郡岩屋邑吉武吉左衛門宗近」とあり、施主とおぼしき「豊前国宇佐郡高家邑中島新兵衛忠真」なる人物の名も刻まれている。宝暦9年(1759)に吉武佛造と共同製作している泉福寺裏山の秋葉社燈籠(写真52)の施主も「豊前宇佐郡尾永井本田新蔵政胸」である。宇佐の吉用兵左衛門と半七は、吉左衛門宗近の出現する数年前から国東町周辺で活躍していること。吉左衛門宗近の作った石造品の施主が宇佐の出身であること、石造品の形態が類似していること等から、吉左衛門の師匠は



写真 51 横手神社燈籠



写真 52 泉福寺秋葉社燈籠



写真 53 岩屋熊野社燈籠

吉用半七と考えて差し支えないと思う。

吉用石工の技術が良く伝えられている石造品は、横手神社と岩屋熊野神社の燈籠（写真53）である。肉の薄い火袋の側面に梅鉢と葵を意匠化した透し彫りを施し、中央のくびれた細長い竿、猫足系の台座と一重の基台を持つ。横手神社燈籠の宝珠の反り花や台座の蓮弁の技法は、半七の泉福寺経王千部供養塔と近似している。

横手神社境内には無銘の燈籠が10基ある。いずれも火袋の透し彫りや竿に特色がみられる。なかでも安永5年（1776）の燈籠の透し彫り（柏紋か？）と吉武家位牌の紋様とが酷似していることや造立年代等から、10基の燈籠のうち7基は吉用石工の技法を受け継いだ吉武石工の作品と推測される。

吉武金左衛門宗近 金左衛門は天明4年（1784）から文化8年（1811）まで活躍した石工で、8基の石工有銘石造品を残して、文政9年（1826）に没した（表14）。なかでも彼が作った天明4年の吉武墓地供養塔（写真54）は、吉武家一統の最高傑作ともいえるものである。この塔には七代施主吉武金左衛門尉宗近と刻まれている。積善光・自光とあるのは、それぞれ文政9年（1826）に没し

た金左衛門と文政12年（1829）に没した妻のさよの戒名であり、供養塔は金左衛門の作品と言わざるを得ない。推測の域を出ないが、吉左衛門宗近が没したのは天明9年（1789）であるので、彼の指導を受けたことは充分考えられる。金左衛門が初めて自分の名を誇しげに刻んだであろう供養塔は、吉武家墓地の木陰の下に静かにたたずんでいる。総高約4m、最上部には宝篋印塔型の宝珠・相輪・笠を載せ、四角の上部塔身は厨子風に削りぬき、如意輪観音を安置している。下層の笠は方形で、その下の六地藏を配した塔身は六角柱状で、四隅に角柱を立てて笠を支えている。露盤と台座には反り花と請け花を配している。三段の台座に載っている。最下層は扉付きの石室になっており、一石一字経が納められている。最上部の台座には初代から7代までの吉武家当主の俗名と戒名が彫られている。初代から6代までは鋭い葉研彫りで刻まれているのに対して、7代目金左衛門の戒名は浅い密柑彫りで、あきらかに異なっている。金左衛門の没後に両右衛門か、あるいは弟子が刻んだものであろう。塔全体は精緻な細工が施されているにもかかわらず、バランス良く作られており、技術的にもすぐれている。

この他にも、金左衛門は同墓地に墓碑と供養塔を兼ねた三基の墓を建てている。いずれも阿弥陀如来立像を御宮殿形の石殿の中に納め、光背部分を後壁にして、内側に戒名を刻み、外側に没年月日と共に「奉納四国西国秩父坂東供養吉武金左衛門」等と彫られている。これらの細工には、天明4年の供養塔の技法が十分に活用されている。石仏の面相や衣文の彫技は木彫仏を思わせるほどである。同墓地には、金作衛門の作品と思われる寛政元年（1789）銘の燈籠や手水鉢、棺置き台等がある。なかでも、請け花と反り花との間に南瓜形の敷茄子を配した棺置き台（写真55）が目を引く。他の古墓にある棺置き台（受皿）は自然石が多い。さすが石工の墓地だけあって、受皿も凝っている。この様式は、後述する原の受け取り地蔵の台座と類似している。

天明四年の供養塔には次のような伝承がある一昔々、富来に住む豪商が、この塔の優美な姿に魅せられて、財力にものをいわせて自分の屋敷にすえたそう。しかし、それ以来主人は半病人のようになるし、不運が続くので、見てもらったところ「塔の祟り」だということであった。驚いた豪商はすぐさま返しにきたそう。しかし、信心深い石屋さんは塔がなくなったのを嘆き悲しみ、塔の跡に既に身代り地蔵を彫って安置していたそう。それで身代り地蔵は、受け取り地蔵になって原村に行ったとき—

この身代り地蔵（写真56）は、岩屋から2km下流の原村にある。筆者がこの伝説を聞いたのは10



写真 59 初八坂社 車橋

年ほど前であるが、当時はなぜ岩屋村から原村へ移ったのかわからなかった。今回の調査で、供養塔の台座に「一代吉武吉左衛門宗近一子原村□□□□」とあることが判明し、吉武家が原村となんらかの関係があることがわかった。身代わり地蔵の台座は吉武墓地の棺置き台に似ている。台座の上の六角幢に六地藏が刻まれ、その上に蓮華座が載り、身代り地蔵が立っている。地蔵像の面幅は広く、眉は鼻筋から眉尻を下げながら、こめかみに流れ、やや吊り下がった半眼である、口元は奥歯を強く噛みしめ、上下の唇を強く結ぶ。口元と下顎を見ていると、毘形仁王像の面相を髣髴させる。そのせいか、国東の上野に点在する慈悲深い童顔の地蔵尊と比べれば、異相とさえいえる。

天明4年から文化8年（1811）までの27年間に、供養塔1基、燈籠1基、鳥居8基、手水舎1基、車橋1基と合計12基の有銘石造品を残している。石工有銘石造品のうち、燈籠は寛政3年（1791）



写真 54 吉武墓地供養塔



写真 55 吉武墓地棺置き台



写真56 原共同墓地身代り地蔵



写真 57 泉福寺大燈籠



写真 58 麻田産靈社鳥居

の泉福寺山門前の大燈籠（写真57）だけである。これは単純だが、力強い造形を示している。

金左衛門の最初の石工在銘鳥居として、天明6年（1786）の武蔵町麻田の産霊社鳥居（写真58）がある。麻田は山越えすれば岩屋に近いので、国東町の海岸部よりも、吉武石工の作品が残されている。最後の作品は文化8年（1811）の原の初八坂社の鳥居である。「原 山吹庄屋 森茂助恒家」の発願で、巨大で荘重な作品である。同社の文化4年（1807）の車橋（写真59）は小規模ながら、こじんまりとしたアーチ形をしており、堅牢な構造をもつ。これは、岩屋・下中田・原山吹・赤松・川原の各庄屋と弁指以下氏子総出の夫力で造立されている。金左衛門が得意としたのは、建築的な手腕を要求される巨大で構造的な作品であったといえる。

また、彼は信仰心が厚かったとみえ、吉武家の仏壇に寛政6年（1794）銘の如来座像（総高13cm）と歴代の位牌を作って祀っている。とにかく、彼は有銘無銘の石造品を多数残し、石工として吉武家の基盤を整えて、次代の両右衛門にバトンタッチしていった。

吉武両右衛門 天保10年（1839）から明治29年（1896）まで活躍していた石工で、8基の石工在銘石造品を残している（表15）。吉左衛門や金左衛門が燈籠や鳥居を主に造立したのに対して、両右衛門は狛犬・地藏・石殿等の新しい分野を手がけている。先代達と同様、彼も前半は鳥居や燈籠を作っている。後半、特に安政4年（1857）横手

神社の狛犬を造立してから、地藏や石殿等の彫刻的な作品を作るようになった。石工在銘石造品の一作目である堅来金比羅宮鳥居には、吉武良右衛門宗近と記されているが、横手神社狛犬から、両右衛門宗家と名乗っている。従来、吉武家当主は代々宗近を襲名している。両右衛門と次代の常右衛門はそれぞれ宗家と宗次を名乗っている。推測の域を出ないが、建築構造的な知識を主とした先代達と違って、狛犬や石殿等の彫刻的な小作品を主に作った彼等は、あえて宗近を襲名しなかったのではないだろうか。

両右衛門は横手神社と岩屋熊野神社と泉福寺に狛犬を造立している。横手神社狛犬（写真60）の頭部は熊野神社のそれより幅広く、両頬に垂れた左右の耳が、面の最太幅となっている。面相は生き生きとし、首筋に垂れるたてがみも丁寧に彫っている。熊野神社狛犬（写真61）の顔面は突き出ており、鼻と口が異常に大きいため顔全体にバランスが崩れている。三番目の狛犬は、安政5年（1858）の泉福寺大雄殿前の狛犬（写真62）である。前述の2体の狛犬と比べて、全体の均勢もとれ、たてがみや両足の造作に細かい神経がゆきとどいている。力強い造形のこの狛犬こそ、両右衛門の代表作といえる。

吉武一門の中で、石工在銘地藏像を製作したのは両右衛門ただ1人である。彼は安政5年（1858）横手の永照寺に等身大の地藏像を造立している。住職の発願で、世話人17名、夫力檀家総出で作られた。偏祖右肩の衣文に製作の苦勞がしのばれる

が、仏像の生命ともいえる面相部に難点がある。偏平な願面に低い鼻筋、少し開いた口元と突き出た下唇。全体的には均勢のとれた立体感あふれた造型力と示すが、仏像の顔面を彫るのは苦手であったようだ。

岩屋村の隣の中田に、当時の地藏建立に関する文書が残されているので紹介する。

奉願上覚 中田村
 中山下之池土手ニ建立 石仏一
 一地藏尊 老鉢
 丈何尺何寸
 貳尺五寸願立
 当中山下之池ニ而
 右者当村兼助と申者石仏老鉢
 一建立仕度段願出申候尤是迄毎々
 溺死者数人
 池入之者出来仕候ニ附而者
 恐入村方ニ而茂
 上ニ茂不少御厄奉掛所之者共も
 然ル処
 大ニ迷惑仕候依之地蔵尊土手端ニ
 建立仕候得者後々者必溺死之者も
 相除り候趣承及候由何卒諸万人之
 助々之
 為筋も羅成候儀是非共兼助候
 文政四己年十一月 今宮村
 北理口貳丁目
 御役人中
 この文書に出てくる地藏像（写真63）は、岩屋

から1.5km程上流にある下之池に現存する。「施主 中田村村長中野和平忠孝 文政四 己」と台座に刻まれている。石工名はないが、距離の近さから、吉武石工の手になる地藏像である可能性は高い。

両右衛門は原天満社内石殿を明治2年（1869）に作ったのを最後に、明治13年に没している。石工としては3代目だが、吉武家当主としては15代目である。吉武墓地には、両右衛門の師匠墓がある。栗林甚助、萱島治、門、亀山寿吉、長田熊三、栗林仁十、岡喜良、安田一十、亀山伊三良、川田豊松、西田久和一、末松東三良、西田桂太郎の12名の弟子の名が刻まれている。今回の調査の結果、この弟子のうちで石工在銘石造品を残しているのは亀山伊三良だけであることがわかった。彼は常右衛門と共に、明治2年に原天満宮石殿を作ったのが初見である。以後、明治22年に小原の加藤金平等と共に桜八幡社鳥居を建立している。

吉武常右衛門 明治29年から昭和初期に活躍した石工である。鳥居2基、手水鉢1基、井戸1基、玉垣1基、燈籠2基、臥牛像1基、記念碑3基、狛犬1対と計12件の石工在銘石造品（表15）を残している。初見は明治29年の川原の桜元宮鳥居で、吉武常吉と刻んでいる。2年後の吉木八坂神社大鳥居（写真64）には吉武常右衛門と記しているので、その間に改名したと思われる。この鳥居は吉武石工一門の遺風を示す堂々たるものである。この後、明治38年に原の初八坂社に征露記念に龍をあしらった手水鉢（写真65）を作っている。天保13年に浜崎の佐藤茂助・見地の上峯弥助・上峯喜

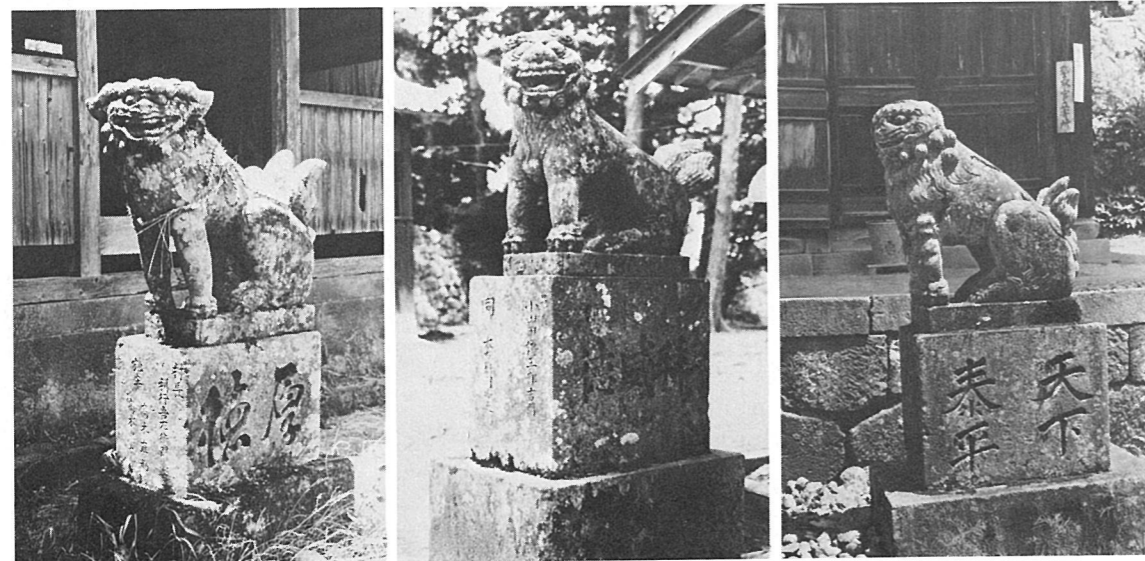
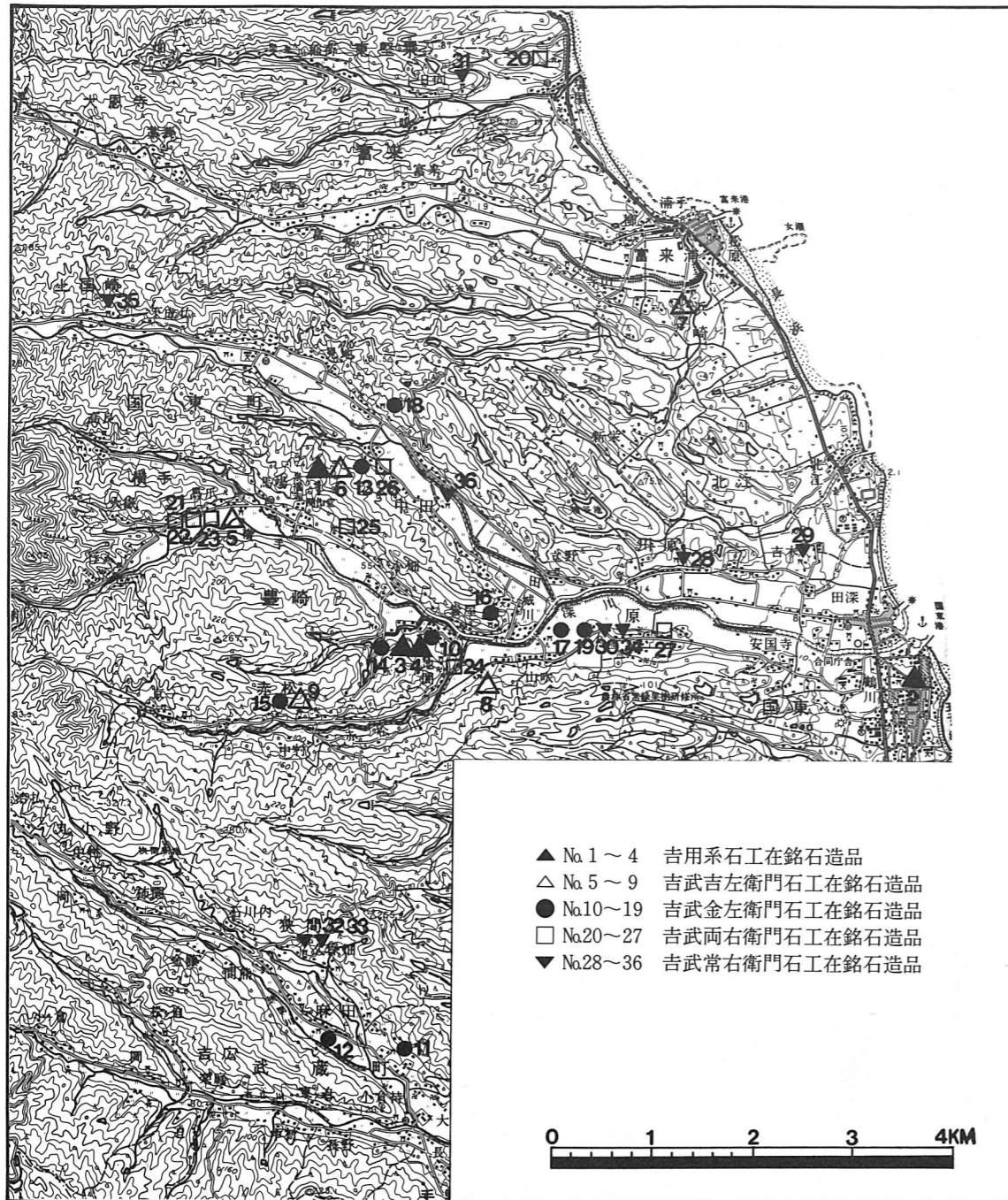


写真 60 横手神社狛犬 写真 61 岩屋熊野社狛犬 写真 62 泉福寺狛犬



写真 63 中田下之池地藏 写真 64 吉木八坂神社大鳥居 写真 65 初八坂社手水鉢

図4 吉用・吉武系石工在銘石造品の分布



助の3名が奉造した見地の小松神社手水鉢に非常に似ている。小松神社の手洗鉢の方が細工が凝っており、台座に龍と狛犬を配しており、手洗部分は従来通りの方形の石を削り抜いて水を溜めている。これに対して、初八坂社手水鉢は一石を削り抜き、水溜めの上に龍と宝雲を力強く彫り込んでいる。これと同形の手水鉢が、桜八幡社にあるが、残念ながら年号や石工銘は刻まれていない。

手水鉢のイメージを一新する斬進な造形は、石工に高い技量を要求するのである。この他にも、明41年に加藤金平が同形の手水鉢を原の天満社に造立している。

常右衛門宗次は昭和33年9月に物故し、吉武石工の系譜は絶えてしまった。

近世末から、石工の数は増加したと見え、石工在銘調査によって、かなりの石工を把握すること

表13 吉用・吉武系石工在銘品一覧

造立年	西歴	件名	所在地	石工銘	No.
正徳3	1713	泉福寺参道	横手 泉福寺	石工 吉用兵左衛門・同半七	1
元文5	1740	経王千部供養塔	" "	石工 吉用半七	2
寛延2	1749	熊野社参道	岩屋 熊野社	石工 吉用氏	3
"	"	" 鳥居	" "	" "	4
宝暦5	1755	燈籠	国東町横手 横手神社	岩屋村 吉武吉左衛門	5
" 9	1759	"	" 泉福寺	石工岩屋 吉武吉左衛門	6
"	"	"	国東町浜崎 貴船社	石工岩屋村 吉武宗口	7
明和9	1772	手水鉢	国東町赤松 厳島社	岩屋村 吉武吉左衛門	8
安永元	1773	鳥居	" 大神社	石工 吉武吉左衛門宗近	9
天明4	1784	供養塔	国東町横手 墓地	石工 吉武	10
" 6	1786	鳥居	武蔵町麻田 産霊社	石工 吉武金左衛門	11
文化8	1811	"	" 歳神社	石工 吉武金左衛門宗近	12
寛政3	1791	燈籠	国東町横手 泉福寺	石工 吉武金左衛門	13
" 8	1796	手水鉢	国東町岩屋 熊野社	施主 金左衛門宗近	14
" 12	1800	鳥居	国東町赤松 大神社	石工 岩屋 吉武金左衛門	15
"	"	"	国東町川原 稻荷社	石工 吉武氏	16
文化4	1807	車橋	国東町原 初八坂社	石工 吉武金左衛門	17
" 8	1811	鳥居	国東町見地 小松神社	石工 吉武金左衛門	18
"	"	"	国東町原 初八坂社	石工 岩屋村 吉武金左衛門宗近	19
天保10	1839	"	国東町堅来 金比羅宮	石工 吉武良右衛門宗近	20
嘉永5	1852	"	国東町横手 横手神社	石工 岩屋 吉武両右衛門	21
" 6	1853	手水鉢	" "	石工 吉武氏	22
安政4	1857	狛犬	" "	石工 岩屋村 吉武両右衛門	23
"	"	"	国東町岩屋 熊野社	石工 吉武両右衛門宗近	24
" 5	1858	地藏像	国東町横手 永照寺	石工 岩屋村 吉武両右衛門	25
"	"	狛犬	" 泉福寺	石工 岩屋村 吉武両右衛門	26
明治2	1869	石段	国東町原 天満宮	石工 岩屋村 吉武両右衛門宗国	27
" 29	1896	鳥居	国東町川原 桜元宮社	石工 吉武常吉	28
" 31	1898	"	国東町吉木 八坂社	石工 イワヤ 吉武常右衛門	29
" 38	1905	手水鉢	国東町原 初八坂社	石工 吉武常右衛門宗次	30
" 41	1908	記念碑	国東町堅来 稲田姫神社	石工 豊崎村岩屋 吉武常右衛門宗次	31
" 43	1910	"	武蔵町狭間 山神社	石工 豊崎村岩屋 吉武常右衛門宗次	32
" 44	1911	井戸	" "	石工岩屋 吉武常右衛門宗次	33
大正10	1921	記念碑	国東町原 初八坂社	石工 吉武常右衛門宗次	34
昭和3	1928	玉垣	国東町下成仏 天満社	石工 吉武常右衛門	35
" 5	1930	牛	国東町中田 歳神社	石工 吉武常右衛門宗次	36

ができた。それまでは、1コの石造品にたいいてい1人の石工の名が刻まれるだけであったのが、多数の石工の名が記されるようになる。慶応2年(1866)の上小原天満社の台座に、嘉助・和市・金平・嘉八・安松・嘉太郎・菊平の7人の石工の名が刻まれている。これを初めとして、下成仏天

満社参道石段にも、6人の石工名が見られる。
長木恒男 吉武一門と同郷の岩屋の人。大正元年から昭和13年までに、記念碑・燈籠・鳥居・臥牛像等六基の石工在銘石造物を残した。吉武常右衛門と共に上治郎丸山神社燈籠・狛犬と中田歳神社臥牛の3件を作っている。清原楽男と共に作っ

表14 吉武家墓碑並戒名

没年	西歴	戒名	墓碑	遺品による石工の系譜	
宝永7	1710	釈道流信士 七月二十九日	3代夫婦	初代 吉武吉左衛門宗近	
正徳2	1712	釈妙智信尼 二月廿六日			
享保5	1720	釈了玄信士 二月廿一日			
" 18	1733	釈妙泉信尼 二月十四日	5代夫婦		
"	"	釈春花斎女 二月			
元文元	1736	妙誓童子 十二月 釈妙由信尼 七月廿七日	6代		
寛保3	1743	林清林童子 九月			
宝延元	1748	—	7代夫婦		
宝暦8	1758	釈恵照信尼 十月十四日			
安永8	1779	釈恵仲童子 四月廿六日	7代夫婦		
" 10 天明元 寛永15 天明6	1781 1786	釈実宗国道信士 正月十六日			
天明9	1789	釈宗親入道六位 俗名 吉武吉左衛門尉宗近 金左衛門父	7代夫婦		2代 吉武金左衛門宗近
寛政8	1796	釈自芳信居□□位 二月			
文化8	1811	釈宗□信士 三月廿一日	7代夫婦		
" 12	1815	釈妙玖信尼 十月十三日			
" 14	1817	反自□妙緑信女霊位 六月十日	7代夫婦		
文政5	1822	釈自恵童尼 十二月二日			
" 9	1826	釈善光入道位 六月二日	7代夫婦		
" 12	1829	釈自光信尼 十一月廿日			
天保5	1834	白反玄明智戒比丘尼位 四月	7代夫婦		
安政2	1855	早世心円童女位 七月十八日 治助娘			
" 3	1856	的元□苗童女 十一月九日	7代夫婦		
慶応4	1868	的松山貞寿大姉位 九月廿九日 良右衛門妻			
明治13	1880	的元善山常光居士位 五月三日 吉武両右衛門事	7代夫婦	3代 吉武両右衛門宗近 (宗家)	
" 27	1894	的元廣岳恵居士●位 五月			
" 29	1896	早世治心童女幽位 一月廿四日 吉武乙右エ門娘	7代夫婦		
大正14	1925	不断常光信女 十一月十九日			
昭和7	1918	孤月正光信女	9代夫婦		
" 32	1957	常照院吉峰良武居士 吉武常右エ門			

た岩屋熊野神社鳥居（写真66）は、彼の代表作で、均整がとれているので好評を博している。泉福寺裏山の百観音のうち、33体を作っている（写真67）先祖に石塔作りを専門にした長木栄作がいる。彼の石工在銘石造品は、明治22年の鶴川地主神社石殿が唯一のものである。国見町の「有永家文書」の中に、恒男が大正6年に製作した石燈籠の図（図5）がある。この図の燈籠が、どこのものかは判明していない。

この他、豊崎地区の石工として、明治2年から33年に活躍した亀山伊三郎を初めとして、8人を数えることができる。その活動を表15にまとめてみた。

加藤金平 小原の地で、明治期に活躍した石工。初見は原の初八坂社石殿である。石殿2基、鳥居3基、車橋1基、石段1基、手水鉢1基を残している。この時期に石工在銘石造品を8基作り、しかも巨大な鳥居を3基製作しているため、優れた技量の持主であったと思われる。彼の作品の共同製作者は表15のように、それぞれ違っており、石工同志の協業態勢があったことを窺わせる。

森寅次郎 原の石工で、明治中頃に活躍し、3基の石工在銘石造品を残す。初見は明治31年の原天満社臥牛像である。これは全体的にこじんまりとまとまっており、中井茂平政和と共同製作である。その他、同天満社の鳥居を加藤金平達4人と共同製作している。

豊田源在衛門 豊後高田市田染の出身で、国東町の石工在銘石造品の早期に出現する石工。宝暦

4年（1754）の行入山神社鳥居、明治6年（1769）の成仏山神社燈籠を残している。

清国元助 富来出身で、石殿を得意とした石工。特に、興導寺地主神社石殿（写真68）は堅牢さの中に繊細な技法が各所に見られる。石殿中央の透し彫り部分には、タッコロバチ（竹皮笠）を被り、

図5 長木恒男燈籠図（県立大分図書館蔵）

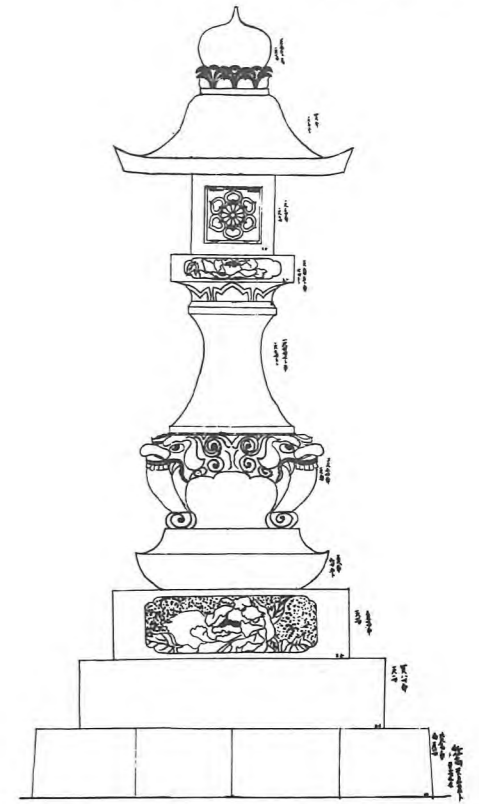


写真 66 岩屋熊野社鳥居



写真 67 子育て観音



写真 68 興導寺地主神社石殿

鍬を持つ腰の曲った農夫の姿が生々と刻まれ、この地の風俗を表現した貴重な資料となっている。武茂町吉弘天神社石殿も、こまやかな細工の施された作品である。

札木八百蔵 19世紀中頃に、小原で活躍した石工。弘化3年(1846)に田深天満社鳥居を香々地の石工藤原与平と共に造立し、安政3年(1856)に武蔵町糸原天満宮鳥居を建てている。

溝部仁右衛門 19世紀中頃に小原で活躍した石工。天保14年(1843)に桜八幡社常夜燈を小原村吉岡兵衛と共作している。これは興導寺・今在家・川原・上小原・小原・安国寺の6ヶ村長以下、施主・32名と6ヶ村氏子総出の夫力により造立されている。慶応2年(1866)の上小原天満社仁王(写真69)の台座に、下治郎丸の7人の石工達をおさえて、石工として筆頭に刻まれている。苗子は刻まれていないが、「小原村 仁右衛門」とあるので、彼の作品であることに間違いない。

2 武蔵町の石工

武蔵町における石工在銘石造品は、見落したのもあると思うが、40数点確認している。この中でも、まとまった数の作品を残しているのは、明治中頃から大正末頃まで活躍した杵築市の猪尾数太郎(表16参照)である。



写真 69 上小原天満社仁王

当町における石工在銘石造品の初見は、安永2年(1773)の吉弘八幡社鳥居(森永口助)である。続いて1年後に諸富喜兵衛が、丸小野歳神社鳥居を作っている。いずれも1作ずつで、出身地は不明である。

次に1780年から1810年頃まで、国東町の清国元助や吉武金左衛門が、吉弘天神社や麻田産霊社に石殿が鳥居を残している。

武蔵町出身石工の初見は、文化5年(1808)の手野歳神社鳥居を作った同地の為助である。この他、吉弘の善太郎が文化9年(1812)に吉弘神社鳥居を製作している。19世紀初頭から、宇佐郡や日出・杵築の石工達が活躍し始める。

表15 石工在銘石造品(国東町南部)

造立年	西歴	件名	所在地	石工銘
正徳3	1713	泉福寺参道	横手 泉福寺	宇佐石工 吉用兵左衛門 同 半七
元文5	1740	経王千部供養塔	横手 泉福寺	石工 吉用半七
寛延元	1748	鳥居	興導寺 桜八幡社	宇佐石工 吉用兵左衛門 同 半七
" 2	1749	熊野社参道・鳥居	岩屋 熊野社	宇佐石工 吉用氏
宝暦4	1754	鳥居	行入 山神社	石工 豊田源左衛門
" 5	1755	燈籠	横手 横手神社	岩屋村 吉武吉左衛門
" 8	1758	鳥居	行入 神宮寺	石工 長六
" 9	1759	燈籠	横手 泉福寺	石工 岩屋 吉武吉左衛門
明和2	1765	鳥居	赤松 巖島社	石工 諸富嘉兵衛
" 6	1769	燈籠	成仏 山神社	石工 豊田氏
" 9	1772	手水鉢	赤松 巖島社	岩屋村 吉武吉左衛門
"	"	石段	赤松 利生寺	石工 諸田
安永元	1773	鳥居	赤松 大神社	石工 吉武吉左衛門宗近
天明3	1783	鳥居	赤松 山神社	石工 岡右衛門
" 4	1784	供養塔	横手 墓地	石工 吉武金左衛門
寛政3	1791	燈籠	横手 泉福寺	石工 吉武金左衛門
" 6	1794	石段	興導寺 地主社	石工 清国元助
" 8	1796	手水鉢	岩屋 熊野社	施主 金左衛門宗近
" 12	1800	鳥居	赤松 大神社	石工 岩屋 吉武金左衛門
"	"	鳥居	川原 稻荷社	石工 吉武氏
文化4	1807	車橋	原 初八坂社	石工 吉武金左衛門
" 8	1811	鳥居	見地 小松神社	石工 吉武金左衛門
"	"	鳥居	原 初八坂社	石工 岩屋村 吉武金左衛門宗近
" 10	1813	鳥居	綱井 天神社	石工 内田村 田辺宅蔵
"	"	鳥居	上治郎丸 山神社	石工 平助
"	"	石殿	上治郎丸 山神社	石工 平助
文政7	1824	仁王	原 初八坂社	石工 浜崎 佐藤茂助
" 9	1826	狛犬	赤松 巖島社	石工 安田甚九郎
" 11	1828	鳥居	興導寺 桜八幡社	石工 平山吉兵衛
天保6	1835	仁王	下成仏 禅林寺	石工 佐藤茂助政道
" 10	1839	鳥居	吉木 八坂社	石工 岩戸寺 猪俣重五郎門定
" 11	1840	石殿	見地 禅林寺	石工 安助
" 13	1842	手水鉢	見地 小松神社	石工 浜崎 佐藤茂助 見地村 上峰弥助 上峰喜助
"	"	車橋	綱井 天神社	石工 岩戸寺村 吉武林助 櫻木口助
" 14	1843	燈籠	興導寺 桜八幡社	石工 上小原村 溝部仁右衛門 小原村 吉岡兵衛
弘化2	1845	燈籠	興導寺 桜八幡社	日出石工 一宮伊八
" 3	1846	鳥居	田染 天満社	石工 香々地 藤原与平 小原 札木八百蔵
嘉永5	1852	鳥居	横手 横手神社	石工 岩屋 吉武両右衛門
" 6	1853	手水鉢	横手 横手神社	石工 吉武氏

造立年	西歴	件名	所在地	石工銘
安政3	1856	燈籠	見地 小松神社	石工 当村 上峰桂三郎政定 同 喜助則定 下成仏 寅丸京平 同 国義
" 4	1857	狛犬	横手 横手神社	石工 岩戸寺 吉武両右衛門
" "	"	狛犬	岩屋 熊野社	石工 吉武両右衛門宗家
" "	"	鳥居	里津 御霊社	石工 財前覚左衛門
" 5	1858	燈籠	横手 永照寺	石工 岡 吉四良
" "	"	地蔵尊	横手 永照寺	石工 岩屋村 吉武両右衛門
" "	"	狛犬	横手 泉福寺	石工 岩屋村 吉武両右衛門宗家
" "	"	鳥居	川原 桜元宮社	石工 久野久延
万延元	1860	狛犬	川原 桜元宮社	石工 逸作
" "	"	仁王	川原 桜元宮社	日出 一宮正行 作
文久2	1862	鳥居	小原 八坂社	石工 覚平・関造
慶応元	1865	石殿	吉木 八坂社	石工 富来村 有松万造
" 2	1866	仁王	上小原 天満社	石工 仁右工門 同 治郎丸 嘉助・和市 金平・寿八 安松・嘉太郎 菊平
" 3	1867	手水鉢	中田 東光寺	石工 猪上愛之介 清原浅之介
明治2	1869	石殿	原 天満宮	石工 岩屋村 吉武両右工門宗家 同 赤松村 龜山伊三郎
" "	"	石殿	川原 桜元宮社	石工 中田村 椿上藤三良 清原朝之助
" 6	1873	手水鉢	見地 小松神社	石工 松本□三郎 銀三郎
" 7	1874	石段	興導寺 興導寺	石工 上小原 溝部□十 小原 吉岡周一
" 8	1875	石殿	下成仏 天満社	石工 中田村 猪上東三郎 見地村 松元啓三郎 中田村 清原浅之助 見地村 松元吟之助 同 秦 晋太郎 中田村 猪上嘉三郎
明治8	1875	石殿	原 初八坂社	石工 加藤金平
" 12	1879	燈籠	赤松 山神社	石工 石井定太郎・後藤笠郎 久松庄平・平尾松作
" 13	1880	寄附碑	綱井 八坂社	石工 塚本岩太良
" "	"	寄附碑	下成仏 天満社	石工 見地 松本太郎正光
" 16	1883	石殿	下成仏 天満社	石工 小原村 加藤金平政作 棟梁 原村 森 寅市 □□村 尾西幾治
" 17	1884	鳥居	見地 小松神社	石工 中田村 国原豊作
" 21	1888	牛	田染 天満社	速見郡日出町 石工 藤井増太郎 林 金吾 藤井友寿郎
" "	"	燈籠	綱井 森観音堂	石工 神鳥岩太郎
" 22	1889	鳥居	興導寺 桜八幡社	石工 小原村 加藤金平政直 赤松村 龜山伊三郎 中田村 石丸印作
" 24	1891	記念碑	成仏	石工 村岡平太郎

造立年	西歴	件名	所在地	石工銘
明治24	1891	石殿	興導寺 地主社	石工 長木栄作
" 25	1892	鳥居	行入 大山祇神社	石工 廣石豊太郎・佐藤龜太郎
" 29	1896	鳥居	川原 桜元宮社	石工 吉武常吉
" 30	1897	寄附碑	原 初八坂社	石工 横手 □□□□ 廣石代吉 高木利八
" "	"	石段	下成仏 天満社	石工 岡部泰作
" 31	1898	牛	原 天満社	石工 森寅太郎 富来 中井茂平政和
" "	"	鳥居	吉木 八坂社	石工 イワヤ 吉武常右衛門
" 32	1899	記念碑	上治郎丸 山神社	石工 清原徳十
" 33	1900	鳥居	成仏 天満社	石工 棟梁 小原村 尾西幾治 脇棟梁 加藤金平
" 35	1902	鳥居	原 初八坂社	赤松 龜山伊三郎 横手 永松豊吉 両子 丸尾芳作
" "	"	鳥居	原 天満社	石工 棟梁 国東町大字小原 加藤金平 全 速見郡上村 熊本源一 全 当字 森寅太郎 清国与吉・宮川源二郎 森雄太郎・見初嘉治郎
" 36	1903	燈籠	原 天満社 御旅所	石工 森 寅太郎
" 38	1905	鳥居	赤松 巖島社	石工 久埜沼直行
" "	"	手水鉢	原 初八坂社	石工 吉武常右工門宗次
" "	"	記念碑	小原 八坂社	石工 久松庄造
" "	"	車橋・石段	成仏 天満社	石工 棟梁 村 有松惣七 全 小原 加藤金平 全 村 交今朝五郎 全 久保彦市
" 39	1906	石殿	興導寺 地主社	石工 神田伝五郎 加藤金平 寺川友吉 久松庄造
" "	"	記念碑	成仏	石工 当地 野花喜一忠道
" 41	1908	手水鉢	原 天満社	石工 国東町大字小原 加藤金平
" 44	1911	井戸	原 初八坂社	石工 岩屋 吉武常右工門宗次
大正元	1912	寄附碑	中田 歳神社	石工 清国楽四
" "	"	車橋・石段	成仏 山神社	石工 一岡倉市
" "	"	記念碑	綱井天神社	石工 イワヤ 長木恒男 ツナイ 仲村喜太郎
" "	"	鳥居	成仏 山神社	石工 下成仏 久保彦市
" 3	1914	記念碑	見地 小松神社	石工 重光文蔵・重光久作 石材商 金丸一二三
" 4	1915	燈籠	安国寺 大神社	石工 富来町大字大恩寺 富重小六
" 8	1919	記念碑	上治郎丸 山神社	石工 豊崎村 大塚安太郎
" 9	1920	鳥居	比江 宮地嶽社	石工 真城興兵
" 10	1921	寄附碑	原 初八坂社	石工 大塚安太郎・吉武常右工門 岡部為吉・長田寿八 小笠原力太郎・金丸弥之郎
" 12	1923	鳥居	岩屋 熊野社	石工 棟梁 長木恒男弘吉 同 清原榮男

造立年	西歴	件名	所在地	石工銘
大正12	1923	鳥居	行入 大山祇神社	石工 棟梁 大塚安太郎 平野為吉
" 14	1925	燈籠	成仏 山神社	石工 棟梁 下成仏 寅丸京平 石工 同 同 国義
" 15	1926	寄附碑	見地 小松神社	石工 棟梁 清原樂男 寅丸京平・松元力松 重吉休作・花田信由
昭和2	1927	鳥居	今在家 地代主社	鶴川石工 山野祐雄
" 3	1928	玉垣	下成仏 天満社	石工 吉武常右工門
" "	"	燈籠	上治郎丸 山神社	石工 長木恒男弘吉 同 吉武常右工門宗次
" "	"	狛犬	上治郎丸 山神社	石工 長木恒男弘吉 同 吉武常右工門宗次
" 5	1930	子育観音	横手 泉福寺	彫刻師 猪野松男国勝
" "	"	石段	川原 桜元宮社	石工 国東町 金丸弥五郎 郷司秀信
" "	"	牛	中田 歳神社	石工 岩屋 吉武常右工門宗次 長木恒男弘吉
" "	"	燈籠	今在家 地代主社	石工 行入 一丸直人 岩本多九
" 6	1931	子安大師	成仏 成仏寺	石工 棟梁 吉武 繁
" 7	1932	記念碑	小原 八坂社	石工 萩平啓治
" "	"	燈籠	見地 小松神社	石匠 金丸一二三 川田義光 弟子 金丸直人 小松 実
" "	"	牛	原 天満社	石刻師 金丸一二三
" 9	1934	記念碑	成仏 路傍	石工 段題政雄
" 10	1935	狛犬	安国寺 大神社	国東町石工 金丸弥五郎
" 11	1936	鳥居	安国寺 大神社	豊崎村稲川 石工 市丸 勝
" 13	1938	記念碑	中田 路傍	石工 長木恒男弘吉
" "	"	鳥居	中田 歳神社	石工 三浦義男
" 14	1939	狛犬	成仏 山神社	石工 下成仏 久保彦市政直
" 16	1941	記念碑	小原 八坂社	石工 一丸直人
" 20	1945	記念碑	下成仏 天満社	石工 棟梁 寅丸京平 寅丸国義
" 22	1947	寄附碑	見地 小松神社	石工 棟梁 板井京平 寅丸国義・一岡倉市
" 29	1954	寄附碑	成仏 山神社	石工 一岡倉市 寅丸国義
" 54	1979	記念碑	田深 天満社	伊勢川教一
不詳		百観音	横手 泉福寺	岩屋石工 長木恒男弘吉 日出町石工 長野重道 豊崎村岩屋 松木君江
不詳		鳥居	川原 桜元宮社	石工 竹田津浦手 竹松其之吉

表16 石工在銘石造品(武蔵町)

造立年	西歴	件名	所在地	石工銘
安永2	1773	鳥居	吉弘 八幡社	森永巳助
明和11	1774	燈籠	三井寺 椿八幡社	石工 磨減
安永3	1774	鳥居	丸小野 歳神社	石工 諸富嘉兵衛
" "	"	石段	麻田 産霊社	石工 種□
" 9	1780	石殿	吉弘 天神社	石工 富来 清国元助
天明6	1786	鳥居	麻田 産霊社	石工 吉武金左衛門
寛政元	1789	石段	吉弘 天神社	石工 田辺徳右衛門
" "	"	手水鉢	池ノ内 蓮華寺	石工 伊右工門
" 7	1794	鳥居	吉弘 天神社	石工 崎金平
" "	"	鳥居	狭間 山神社	石工 金□工門
" "	"	鳥居	吉弘 山神社	石工 崎金助・林助
文化5	1808	鳥居	手野 八坂社	石工 当村 為助
" 8	1811	鳥居	麻田 歳神社	石工 岩屋 吉武金左衛門宗近
" 9	1812	鳥居	吉弘 吉弘神社	石工 当所 善太郎
文政元	1818	記念碑	糸原天満社	石工 宇佐郡西川村 小野万吉
" 10	1827	石殿	古市 住吉神社	石工 日出藩□邑 安兵
天保10	1839	鳥居	三井寺 椿八幡社	岸□平助・源助
安政3	1856	鳥居	糸原天満社	石工 小原村 札木八百蔵
文久3	1863	鳥居	丸小野 歳神社	石工 溝部仁右工門・寺川寿助
明治13	1880	石段	狭間 山神社	石工 岩屋村 栗林寿八
" 29	1896	記念碑	池ノ内 路傍	石工 猪尾□太郎
" 31	1898	井戸	三井寺 椿八幡社	石工 花木弥次郎
" 36	1903	寄附碑	成吉 山神社	石工係 厚田壯吉・川島兵太郎 厚田権九郎・厚田半吉
" 39	1906	鳥居	古市 住吉社	石工 西安岐 松原栗太・河野金太
" 40	1907	寄附碑	池ノ内 蓮華寺	石工 ツナイ 仲村喜太郎
" 42	1909	記念碑	手野 八坂社	石工一切 古城文吉
" 43	1910	記念碑	狭間 山神社	石工 室崎村 岩屋 吉武常右工門宗次
大正4	1915	記念碑	三井寺 椿八幡社	石工 杵築市 猪尾数太郎
" 5	1916	記念碑	糸原 天満社	石工 大阪 横山音吉
" 6	1917	石殿	成吉 山神社	石工 杵築市 猪尾数太郎
" "	"	鳥居	糸原 天満社	石工 杵築 猪尾数太郎
" 7	1918	寄附碑	糸原毘沙門堂	石工 堀内義市
" 12	1923	記念碑	狭間 山神社	石工 長田寿八・小笠原力松・川田只夫
" 13	1924	石塔	麻田 報恩寺	仏師 □□□□
昭和3	1928	寄附碑	古市 歳神社	石工 土家千代吉
" 10	1935	記念碑	成吉 山神社	石工 土家千代吉
" 13	1938	記念碑	三井寺 椿八幡社	石工 矢野重樹
" "	"	記念碑	手野 八坂社	石工 矢野重樹
" 19	1944	記念碑	吉弘 吉弘神社	石工 佐藤作夫・金田庄平
不詳		牛	糸原 天満社	石工 ツル川 藤井清光
" "		寄附碑	糸原 天満社	石工 キツキ町 猪尾数太郎
" "		牛	古市 住吉社	石工 ツル川 藤井清光
" "		燈籠	麻田 産霊社	石工 キツキ 猪尾数太郎

3 安岐町の石工

安岐町内の在銘石工の調査は、58年10月～12月の間に行なった。域内の神社55ヵ所、17寺を踏査した。合計142ヵ所に及ぶ調査の結果、石工銘を有する石造品157点が確認された。(表18参照) その種類別内訳は表17のとおりである。数量的には、鳥居や石燈籠といった、神社景観の中で重要な位置を占めるものに在銘品が多いことは当然であろうが、これとは別に、記念碑あるいは顕彰碑などの石碑に、石工名が刻される場合が多いことが注意される。石碑の大部分は明治以後の造立になるものであるが、実在銘石造品全体の38%を占めている。さらにそれが朝来谷と両子谷に異常に集中していることも地域の特質として興味あることである。

つぎに、石工在銘品によって判明する石工の居住地と製品の所在地との関係を見ると近世(明治11年頃までを含む)においては、国東の岩屋村、小原村の石工の活躍が目立つ。もちろん、石工在銘品が18世紀中頃以後に圧倒的に多くなるという事実からすれば、石造品の場合作品に作者銘を刻する行為自体、このころから流行したという見方が出来ようが、国東系石工の作品にとくに多いことは、外部からの注文作ということと、何よりも彼らの技術に対して、自他ともに認める高い評価があったこととを窺わせるに十分である。例えば、神社にある各種石造品のうち、その象徴とも言うべき存在である鳥居についてみよう。安岐町内に製作年次のわかる鳥居が59基ほど存在する。そのうち、最も古いものが寛永4年(1627)銘富清の太神宮の鳥居で、以下寛保2年(1742)に造られた西本の剣大明神の鳥居に至る8基には作者銘がない。また、明治11年以前に関して言えば、合計36基のうち石工在銘のものが17基ある。そしてその内訳は、国東系石工によるものが9基、宇佐の石工が2基、残り6基が在地石工の製品である。この傾向は、石燈籠(常夜燈を含む)の場合もっと顕著で、享保8年(1723)から嘉永6年(1853)に至る間の在銘品7例は、吉松草場の山神社の2例(享保8年・寛政9年銘)を除きすべて国東系石工や杵築あるいは日出津嶋の石工による作品である。とりわけ、幕末の小原村下山吉兵衛の鳥居製作における活躍はとくに目ざましい。

明治11年以前では、安岐内部においても後に安岐町を構成する26ヵ村のうち、17ヵ村の名が石工

図6 安岐町石工関係地名



名とともに知られる(第20表)。これは、全村落の65%に相当する。このうち石工の居住地と製品の所在地が一致するものはわずかに5例にすぎない。このことは、石造品全体に占める在銘品の頻度からみて、次のことを推測させよう。つまり、大まかには各村々に大なり小なり石工が存在し、居住地の仕事には基本的に作者銘を刻まなかったのではないかとということである。

それが、明治になるとまったく状況は一転して在地石工の在銘作品が多くなり、合計11例のうち外部の石工は3例に激減し、しかもその3例も幕末にあれほどの活躍をみせた岩屋や小原の石工ではなく、国東の堅来や赤松それに武蔵の丸小野の石工の製品に替わる。

このように、明治以後では在地石工による作品の割合が増してくるが、とくに富清村の溝部玉吉や明治村の上坂寿市などは指導的役割を果たしたとみられる人物である。ともに糸永村八坂社の明治2年(1869)銘石燈籠を富清村宮川今平ら5人で共同製作した時の一員で、溝部玉吉が昭和9年(1934)まで、上坂寿市が大正3年(1914)までの在銘品を残している。

表17 種類別石工在銘品の数

種類	時代					合計
	江戸	明治	大正	昭和		
石 段	11	0	3	1	15	
石 垣	1	0	3	0	4	
鳥 居	14	14	3	1	32	
仁 王	2	0	1	0	3	
石 燈 籠	7	11	1	0	19	
手 洗 鉢	3	2	1	0	6	
狛 犬	1	1	1	0	3	
石 祠	2	5	0	1	8	
地 蔵 像	1	0	0	0	1	
遍 路 像	0	0	0	1	1	
牛 像	1	0	0	0	1	
石 橋	0	0	1	1	2	
石 門	0	1	0	0	1	
石 碑	0	11	21	27	60	
その他(含不明)	1	0	0	0	1	
合 計	45	45	35	32	157	

表18 石工在銘石造品(安岐町)

造立年	種類	所在地	石工名その他
享保8(1723)	石 燈 籠	吉松 草馬 山神社	石大工 安(因)衛門尉
享保16(1731)	石 段	明治 小俣 日吉神社	石工 当村 藤七・左助・仁右門
享保	石 段	掛樋 小野 観音堂	石工 久末村 善六
(年不明)	石 段	朝来 護聖寺	石工 諸田 太久 久末 善六
元文	石 段	明治 山王権現社	石工 仁右門
延享2(1745)	板 碑	山浦 小瀬原	石屋 中之村 仁右衛門
延享4(1747)	鳥 居	馬場 八幡社	宇佐石工 吉用兵左衛門 同 半七
宝暦3(1753)	手 洗 鉢	馬場 熊野大権現	石工 同村 □□
宝暦8(1758)	鳥 居	山口 樋村 山之神貴布禰	石工 宇佐 吉用半七 同 大七
宝暦10(1760)	仁 王	馬場 大儀寺	田染石工 松本儀平次 同 伊曾七
宝暦10(1760)	鳥 居	糸永 小久保 八坂社	石屋 来崎郡岩屋村 吉武吉左衛門宗近
明和9(1772)	石 燈 籠	吉松 草場 山神社	石工 吉武実右衛門 同 金作
安永2(1773)	石 段	吉松 一ノ瀬 今宮社	石工 吉武

造立年	種類	所在地	石工名その他
安永3(1774)	石段	西本 大将軍神社	吉松村 □衛門 手野村 五助
天明2(1782)	鳥居	塩屋 熊野大権現	石工 小原村 勝平
天明7(1787)	鳥居	油留木 山神宮	石工 吉松村 久右衛門 大添村 忠平
寛政9(1797)	石燈籠	吉松 草場 山神社	石工 崎 金平
寛政4(1792)	石段	山浦 橋上 山神社	石工 阿部和□
寛政10(1798)	石祠	西本 木野 大明神	石工 花木善太郎
寛政11(1799)	石段	下山口 靈光院	石工 善太郎
文化11(1814)	鳥居	馬場 秋葉宮	吉松村 久右エ門
文化14(1817)	石段	油留木 泉正寺	石工 久右エ門
文政7(1824)	鳥居	吉松 草場 山神社	石工 小原村 札木八百蔵石平
文政10(1827)	石段	下山口 妙見宮	内田邑 卓蔵
天保2(1831)	地藏	馬場 浄国寺	石工 小原邑 下山吉兵エ
天保4(1833)	石燈籠	中園 歳之神	石工 小原村 札木八百蔵石平
天保6(1835)	鳥居	掛樋 関権現	小原邑石工 下山吉兵衛
天保6(1835)	(竿部)	朝来 護聖寺	石工 諸田 万行政右エ門 熊右エ門
天保6(1835)	鳥居	西本 剣大明神	小原村 下山吉兵衛
天保12(1841)	鳥居	山浦 小瀬原 貴船宮・八幡宮	石工 小原村 下山吉兵衛 当村 手嶋重助
天保12(1841)	石段	下山口 妙見宮	中園邑 治郎 大添邑 □作
天保13(1842)	常夜燈	下山口 妙見宮	日出津嶋村 伊八
天保15(1844)	石垣	油留木 大山祇神社	石工 瀬戸田村 房吉・大蔵・佐一
天保15(1844)	鳥居	吉松 山神宮	石工 小原 吉兵衛
弘化5(1848)	常夜燈	中園 歳之神	石工 杵築 清水□□ 永岡幸之進寿明
嘉永2(1849)	牛像	下山口 八坂社	猪尾啓二郎
嘉永3(1850)	手洗鉢	両子 両子寺	石工 岩屋村 吉武両右エ門
嘉永6(1853)	常夜燈	吉松 山神社	石工 小原村 吉兵衛
嘉永7(1854)	仁王	油留木 泉正寺	石工 小城村 松原万平 富来村 鋤先万造
嘉永7(1854)	鳥居	油留木 天満宮	石工 富来村 鋤先万造政信
安政2(1855)	手洗鉢	吉松 山神宮	石工 中村 斗市
安政2(1855)	鳥居	矢川 山神宮	石工 小原村 下山吉兵衛
文久2(1862)	石祠	西本 剣大明神	石工 山口村 国太郎
元治元(1864)	鳥居	山口 天満宮	石工 木田国太郎
慶応2(1866)	狛犬	両子 両子寺	石工 岩屋村 吉武両右エ門
明治2(1869)	石燈籠	糸永 八坂社	石工 富清村 宮川今平 溝部竹次郎 明治村 上坂寿市 糸永村 古庄卯平 富清村 溝部玉吉

造立年	種類	所在地	石工名その他
明治5(1872)	常夜燈	吉松 山神宮	石工 清原万平
明治5(1872)	手洗鉢	西本 大将軍神社	下山口村 生地佐七
(年不明)	鳥居(残欠)	山口 樋村 山之神貴布禰	木田国太郎
明治6(1873)	石橋石樋寄付碑	掛樋 小野	石工 当村 矢野多一
明治6(1873)	常夜燈	両子 中分 歳大明神	石工 河野茂蔵・萱島宇八 再建(大正14) 石工頭領 小俣区 秋本武吉 石工 糸永区 藤原俊吾 両子区 田辺甚左エ門
明治10(1877)	鳥居	下山口 八坂社	山口村 木田国太郎 下山口村 生地佐七
明治11(1878)	鳥居	下原 五十鈴社	石工 下山口村 生地佐七
明治11(1878)	常夜燈	糸永 小久保 八坂社	石工 山口村 木田国太郎・福太郎
明治12(1879)	永代橋記念碑	両子 弘	石工 安田久七・秋吉長二郎 来 憲吉・柳 八代吉 猪尾武市・来 林三郎
明治13(1880)	石燈籠	両子 両子寺	石工 堅来村 長木利平正吉
明治13(1880)	鳥居	西本 大将軍神社(八幡社)	石工 山口村 木田福大
明治13(1880)	資本碑	馬場 浄国寺	石工 小野茂七
明治14(1881)	常夜燈	吉松 一ノ瀬 今宮社	石工 山口村 木田福太郎 当村 渡辺慶太
明治16(1883)	石燈籠	両子 両子寺	石工 赤松村 亀山伊三郎・後藤竹次郎
明治16(1883)	鳥居	吉松 一ノ瀬 今宮社	石工 高橋栗太
明治17(1884)	石祠	両子 走水観音	石工 東国東郡□□村 吉田□□ 速見郡八坂村 田所寿八
明治19(1886)	水利旌功碑	富清	石工 富清村 宮川今平 大恩寺村 堀 庄造
明治19(1886)	石祠	両子 走水観音	石工 富清村 宮川今平
明治22(1889)	鳥居	吉松 草場 山神社	石工 川野徳正・川野治平 川野休平・河野留太 藤原与作・川野金太 阿部今朝太・白石大吉
(年不明)	手洗鉢	吉松 草場 山神社	石工 川野休平
明治23(1890)	石祠	吉松 一ノ瀬 今宮社	石工 セトダ 清原亀次 上小ハラ 堀 庄造
明治24(1891)	石門	両子 山内	石工 丸小野村 幸松兵造
明治24(1891)	鳥居	山浦 橋上 山神社	石工 旧山口村 秋吉庄太郎 佐藤健三郎
明治25(1892)	鳥居	朝来 八坂神社	石工 岩屋村 栗林仲太郎宗近 赤松村 亀山伊三郎 小原村 萱嶋関造
明治25(1892)	鳥居	山浦 小瀬原 山神社	石工 富清村 溝部玉吉 明治村 上坂寿市 富清村 溝部亀吉・清原建次 宮川長平・宮川伝吉
明治26(1893)	碑	朝来 大蔵神社	石工 山辺伊作・田辺房吉
明治26(1893)	鳥居	朝来 多賀神社・山神宮	石工 上坂寿市源重明

造立年	種類	所在地	石工名その他
明治28(1895)	竿立て	富清 元宮	石工 寄付 舛永佐一
明治28(1895)	石燈籠	両子 両子寺	石工 本村 柳 八代吉
明治30(1897)	道路改築碑	山浦 築瀬	速見郡日出町石工 藤井友二郎直光
明治30(1897)	征清凱旋碑	馬場 秋葉宮	日出町石工 赤山安太郎
明治30(1897)	石祠	西本 剣大明神	速見郡豊岡村石工 赤山□郎
明治32(1899)	碑	富清 八坂社	(寄付名簿中) 溝部玉吉・洲上寿平
明治32(1899)	常夜燈	富清 八坂社	石工 赤松兵造
明治33(1900)	鳥居	吉松 貴船神社	石工 河野武吉
明治33(1900)	水利紀功碑	吉松 一ノ瀬 今宮社	石工 清原亀次
明治35(1902)	「天堅石」碑	朝来 大歳神社	石工 小又 上坂寿市 小又 平野孫市 富清 和田重太郎
明治36(1903)	鳥居	瀬戸田 三柱神社	石工 川野金太
明治卯	鳥居	両子 両子寺	石工 岩屋村 栗林仲太郎宗近 黒津 財前覚左衛門
明治36(1903)	石燈籠	瀬戸田 三柱神社	石工 溝部金吉・井上源治 高橋善吉
明治40(1907)	「百堅石」碑	山浦 小瀬原 貴船宮・八幡宮	石工 大字瀬戸田 清原亀次
明治41(1908)	石燈籠	掛樋 関権現社	石工 溝部玉吉
明治42(1909)	鳥居	吉松 一ノ瀬 今宮社	石工 小野浅治 (みかげ)
明治44(1911)	石祠	塩屋 天神宮	石工 田染村 渡辺八郎
大正2(1913)	狛犬	明治 小俣 日吉神社	日出町石工 長野
大正3(1914)	神社改修碑	糸永 八坂社	石工 南安岐村 河野喜八 朝来村 洲上祝夫 南安岐村 永松長吉 西安岐村 矢野完七 西武蔵村 藤原俊吾・安部末吉 溝部玉吉・九尾鳳作 和田重太郎・洲上兼松 南安岐村 吉田虎市・秋吉庄太郎 児玉金二郎・浅井利作 井戸豊太郎・佐藤方太郎 西安岐村 山田荒吉・徳丸格太郎 宮崎増太郎 朝田村 河野嘉作・三浦団平 河野代作
大正3(1914)	開道記念碑	朝来 久末	石碑鑄工 豊崎村 吉武常右エ門 酒井武吉・長田寿八 長木恒夫 小笠原力太郎 上国東村 久保彦一 富来村 真城 清
大正3(1914)	石段	糸永 八坂社	石工 田辺 隆
大正3(1914)	手洗鉢	糸永 八坂社	石工 吉武常右エ門
大正6(1917)	石段	朝来 多賀神社・山神宮	石工 豊崎村岩屋 吉武常右エ門宗次
大正7(1918)	石橋	中園 歳之神	石工 当村 上坂寿市
大正8(1919)	社殿幣殿改築記念碑	朝来 弁分 八坂神社	石工 小野浅治 (みかげ)
			石工 田染 渡辺高士

造立年	種類	所在地	石工名その他
大正8(1919)	朝来青年団諸田支部創立記念	朝来 諸田	石工 荒木福蔵 江口荒吉 山田益雄
大正8(1919)	芳志名碑	朝来 弁分	田染石工 渡辺高士
大正8(1919)	京徳溜池新築記念碑	朝来	田染石工 渡辺高士
大正8(1919)	培其碑	明治 小俣	石工 川上兵太郎
大正10(1921)	道路記念碑	山浦 山浦	田染石工 河野儀十郎 河野億十郎
大正10(1921)	幣殿拝殿改築碑	山浦 小瀬原 貴船宮・八幡宮	石工棟梁 山田荒吉 石工棟梁 西久太郎 銘石棟梁 渡辺市松
大正10(1921)	天満社資本碑	下原 天満社	石工 キツキ 猪尾虎夫
(年不明)	玉垣	馬場 八幡社	□□町石工 猪尾虎夫 (玉垣中の 寄付者名)
大正11(1922)	道路寄付碑	山浦 築瀬	田染村石工 渡辺高士
大正11(1922)	碑	矢川 矢川 玉林寺	岩窟受負者 別府町 岩田武蔵 石工 田染村 渡辺一策 河野今朝男
大正11(1922)	本社上屋馬場修理奉獻者碑	西本 剣大明神	石工 井門豊作
大正11(1922)	青年団中野支部表彰記念碑	明治 中野	田染石工 渡辺高士
(年不明)	仁王	朝来 弁分 西白寺	石工 渡辺高士
大正12(1923)	頌表碑	朝来 弁分 生目神社	石工 タシブ 河野道生・河野藤一
大正13(1924)	幣殿拝殿改築記念碑	明治 山王権現社	幣殿石工棟梁 諸田 江口荒吉 拝殿石工棟梁 諸田 荒木福蔵
大正13(1924)	改築記念碑	富清 八坂社	石工棟梁 溝部玉吉
大正13(1924)	報賽碑	明治 小俣 日吉神社	棟梁石工 平野孫市・小野浅治 石工 田染村 渡辺 清
大正14(1925)	鳥居	山浦 馬渡 山神宮	石工 キツキ町 堀内儀市
大正14(1925)	鳥居	富清 宮畑神社	石工 溝部玉吉
大正14(1925)	常夜燈	富清 宮畑神社	石工 平野孫市
大正14(1925)	碑	朝来 地蔵様	石工棟梁 田辺富三郎 銘石石工 河野藤一・河野 静
大正14(1925)	石段	朝来 久末 多賀神社・山神宮	石工 諸田 荒木福蔵
大正14(1925)	道路改築碑	矢川 矢川	田染村銘石請負者 清原喜十 石工棟梁 渡辺興作 石工 水江 光 豊田今朝治
大正15(1926)	藤原万吉翁頌徳碑	矢川 上山浦 山神宮・貴船宮	彫刻工 藤原俊吾 石工 末広照市
大正15(1926)	鳥居	下山口 妙見宮	キツキ 堀内儀市
昭和3(1928)	社務所改築碑	矢川 上山浦 山神宮・貴船宮	田染 渡辺秀五郎
昭和3(1928)	功勞者碑	山浦 橋上 山神社	石工 田染村 渡辺隆義
昭和3(1928)	碑	朝来 久末 多賀神社・山神宮	石工棟梁 荒木福蔵 銘石石工 田染 渡辺盛三 渡辺秀五郎
昭和7(1932)	遍路像	山浦 築瀬	石工 都甲八郎・渡辺高士

表20 在銘品にみる石工の住地と製品所在地(安岐町) (近世~明治11年頃まで)

石工住地 製品所在地	安岐										武蔵			国東			日出									
	富清村	糸永村	諸田村	中野村	小俣村	明治村	久末村	(掛通)小野村	山浦村	吉松村	瀬戸田村	中園村	下山口村	山口村	大添村	中馬場村	手野村	内田村	小城村	岩屋村	小原村	富来村	杵築村	津嶋村	宇佐村	田染
両子村																				◎						
富恒清村																										
清富永村																										
糸杉山村																										
永糸永村	○	○				○															○					
明治諸田村																										
中野村						○																				
小俣村						○																				
朝来久末村																										
弁分村			◎																							
矢川村																										
掛樋油留城村							○	○																		
山浦村																										
吉松村																										
瀬戸田村																										
成久村																										
中園村																										
馬場村																										
下原古城村																										
塩屋村																										
西本村																										
下山口村																										
山口村																										
大添村																										

第3章 日出・豊岡の石工

1、日出・豊岡石工同業組合

はじめに 日出・豊岡石工同業組合は、大正11年4月の「日出・豊岡石工同業組合同規約」(以下「組合同規約」と略す)、と「収支計算簿」、昭和26年以降の内容から「会計簿」と仮称できる帳簿の、三冊を所蔵している。主として以上3冊の帳簿によって、同業組合の結成・総会・活動の概要を記す。同業組合の結成は、田染石工同業組合より数年ほど早い、協定価格設定のためでなく、原石を共同購入するためであったようである。役員は「組合同規約」によれば、任期2年の組合長、副組合長各1と監事3と定めているが、組合所蔵の帳簿には歴代役員の名前は殆ど記載されてなく、一宮瀧右衛門・一宮秋太・城内虎義・武野勘五郎等が、組合長として記憶されている程度である。総会は定例と臨時に開き、別に年3回の山ん神祭りを催して、懇親を深めていた。戦後は組合員数も減少して、同業組合としての機能が減退し、山ん神祭りは継続しているが、総会は昭和50年ごろから開かれず、自然消滅の状態になっている。

結成 「組合同規約」の末尾に記す、「大正11年4月」に石工同業組合が結成されたものと思う。結成当時の組合員は33名である。

規約は、名称(第一条)、役員(第二条)、石山税金(第三条)、石山税金納付義務者(第四条)、石山採掘(第五条)、石山採掘場所期限(第六条)、荒石(第七条)、道路修繕(第八条)、集会(第九条)の9ヵ条からなっている。第三条から第七条までの5ヵ条は、石山に関するものであるから、原石確保のために組合が結成されたものであろう。日出・豊岡石工が強い関心を持った、石山に関する5ヵ条の全文を次に掲げる。

第三条 石山税金八年額平等割ノコト。

一、石山税金滞納者ハ、絶対石山全部ノ採掘・彫刻ヲ差シ止ム。

第四条 石山税金納付義務者ハ、満々年休業者ハ半額分金シ、半々年休業者ハ全額分金スルコト。但シ、税金義務者ハ5歩以上全額、五歩以下半額トス。

第五条 石山採掘ハ、々々年以上他出先ヨリ帰宅後、採掘セントル者ハ、組合長並ニ株場委員ノ証認ヲ得。但シ、石山税金

ハ採掘前々年分納付セシム。

第六条 石山採掘場所期限ハ、石落シ中止後拾五日ヲ経過シタル時、他ヨリ採掘スルモ故障ナキコト。只シ、一ト目城ハ特別トシ、石材採掘権ヲ満五ヶ年間城内虎義ト契約ス。別紙契約証アリ。

第七条 石材ハ、彫刻及ビ仕上ゲハ、他工搬出スル事ヲ得ルモ、荒石ハ絶対搬出スル事ヲ得ズ。

一、若シ搬出シタル者ハ、石山全部ノ採掘及ビ彫刻ヲ差シ止ム。

二、日出・豊岡ノ石工ニテ、税金不納者ニ絶対石材ヲ販買スルヲ得ズ。

総会 総会は、前記のように、昭和50年ごろまで開いていた、定例総会は年1回で、正月12日ごろ組合長宅で開いていたという。しかし、「会計簿」の昭和26年から昭和45年までで、定例総会の月日の記載がある13回についてみれば、2月が9回で8日から18日まで、3月が4回で1日から21日まで散らばっている。また、会場は吉野正雄宅が昭和32・33・35・39年の5回、吉野一夫宅が昭和26・28・34・40年の4回、武野勘五郎宅が昭和29・37年の2回となっている。武野勘五郎は組合長、吉野正雄が会計で、吉野一夫宅は集合に便利であったからだという。議題は必ずしも明記していないが、石山税金、組合費、道路修理の外、組合への加入・脱退、自然石・屑石の売却、慶弔などのようである。

山ん神祭り 採石は危険な作業であった。掘り下がっていた一目城はそれほどでもなかったが、高い所から切り落としていた、桃木・西畑では死傷者が出ていたので、正月・盆・11月の16日には、山ん神祭り(石山祭りともいう)をしている。豊岡では、16日は山に行つてはいけない日で、山に行つて死んだ人がある。「山ん神の居らん間に洗濯(ご馳走)せよ」という。仁王では、「16日は山ん神の祭り日、山ん神が洗濯のため、裸を見られるのを嫌がる」といい、オコゼを板に打ちつけたり、木の枝に結んで山ん神に供えていた。藤原では、16日より後に山に行つて、「山ん神の飯さじ(しゃもじ)を拾えば、分限者になるとか、マン(運)が良い」という。

御座の家の床の間に山ん神の軸を掛け、米1升・酒1升・お御供・イリコ（煮干し）を供える。夕方、祠掌さんが御幣を切って床の間に立て、神事が終わってから直会をする。御座がお神酒を注ぎ、お御供を全員に配る。お神酒・お御供をいただいてから酒宴を始める。料理は、刺身・吸い物・酢の物・引き付け（蒲鉾・厚焼き・蓮根・椎茸・昆布・こんにゃくなど）である。へべれけになるほど飲むので、酒の飲めない人は帰りたくてぎりを舞う思いである。最後に打ち込みをするが、御座、次の御座、最後に全員の健康を祈って3度である。音頭は、組合長がたいてい長老を指名する。打ち込みは、「祝うて三献」「ヨーイヨーイヨーイ」、と3拍手を3回する。御座が御幣を山（石切り場）に立てて行くが、立てる場所はほぼ決まっている。祭りの費用は参加者から徴集し、不足分は御座が負担していた。総会の際、御座をまだしていない人達がくじを引いて御座を決め、調理は御座の奥さんが近所の人を加勢に雇った。

山ん神祭りに参加しない人は人間でないように悪口を言われた。しかし、喧嘩になるほど飲んでいたので、喧嘩の嫌いな人、出費を嫌がる人、付き合いの悪い人などは参加しなかった。祭り酒に酔って、帰り途中で引き付けをばらまき、あわてて拾い集めて帰った人があった。翌朝、奥さんから尻尾がありはしないかと言われ、厚焼きや饅頭だと思って拾った物が、草履や橙かっぱだったので驚いたという話がある。

活動 組合の財源は定期的なものは組合費である。組合費は、「収支計算簿」によれば、大正11年は年額8円40銭であるが、大正12年7円、大正15年6円20銭、昭和2年5円60銭と低下し、昭和4年に6円30銭と値上げされている。大正末～昭和初期の不況の影響と推測される。「合計簿」は昭和26年以降であるため、昭和5年から25年までは不明である。戦後の昭和26年は200円、27年150円、28年300円、40年は500円と値上げされている。組合費は、八津島神社に納入する石山税金を主とし、総会や道路修理後の酒食費に支出されている。結成の項で記したように、石工同業組合の結成は、原石確保が目的だったと思われるから、石山税金納入のために組合費を徴集するのが本来の趣旨であろう。臨時収入のなかった昭和26年、7両年の支出は石山税金1,500円を除けば、900円にも満たない額で、組合費に占める石山税金の比重は極めて

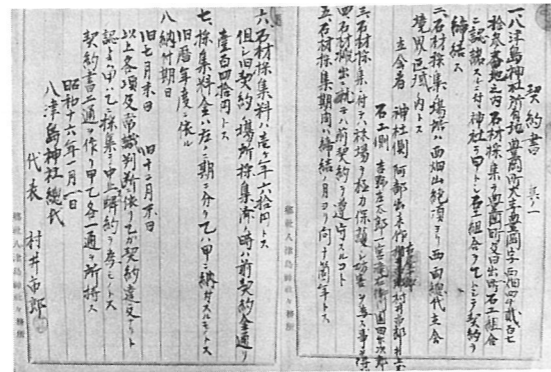


写真 70 契約書

大きい。石山税金は、組合費の増額とほぼ年を同じくして、昭和26年1,500円、28年2,000円、41年3,000円と値上げされている。支払い期日は、契約が10月10日になっていたらしく、10日前後に支払われている。慶弔費は昭和29年が初出で、組合員とその家族の葬式の際の弔旗、新築の時の5色旗代である。

臨時収入としては、組合加入金や自然石・屑石売却代などである。組合加入金は、昭和27年、山本勘吾・村井茂男がそれぞれ1,000円、昭和45年に渡辺万吉が5,000円を納入している。自然石売却では、昭和33年に藤田肇が1,500円、昭和34年に山田保が1,500円を納めている。屑石売却では、昭和28年に吉田義男4,500円、37年に三林建設6,000円などが入り、酒食費の増額となって現われている。

原石確保は、日出・豊岡石工には最も重要な問題であった。次に契約書によってこの問題のみをみよう。八津嶋神社所蔵の契約書のうち、昭和11年と昭和16年のもの2通を見せていただいた。昭和11年は株組代表、昭和16年は八津嶋神社総代との間に契約が締結されている。この間の事情について、八津嶋神社宮司城内貞彦氏は次のように語っている。大正12、3年ごろ、石切り場は一目城から桃の木になったが、桃の木は高くなって採石が困難になったから、昭和11年から西畑を切り始めた。一目城・西畑は津島の共有地であったが、大正6年ごろ八津嶋神社へ寄進され、昭和12年から15年の間に移転登記がなされたとのことである。契約書は、昭和16年のものは8項目であるが、昭和11年のものは9項目とやや詳細であるので、次に全文を掲げる。

契約書

一、津島組共有地之内、八津嶋神社ニ所有権ヲ移転スル、西畑山石材採取ヲ、豊岡町及日出石工



写真 71 山の神掛軸（渡辺万吉氏蔵）

組合ニ認諾スルニ付キ、仮リニ株場ヲ甲トシ、石工組合ヲ乙トシテ契約ヲ締結ス。
二、石材採取ノ場所ハ、西畑山ノ絶頂西斜ノ北端ニシテ、別紙添付図面及実施ノ境界線ノ通り。
三、境界線ヲ二重トシ、内側線内ニテ石材ヲ採取シ、外面線内ヲ掘捨ベキ土石ノ捨場トス。
四、石材採取ニ付テハ、前項境界線外ニ出テ、株採取ノ妨害ヲ為スコトヲ得ズ。
五、採取シタル石材ノ運搬ハ、現存スル路線ニ修善ヲ加へ搬出スルモノトス。但シ、株場ハ甲ニ、私有地ニ関スルモノハ乙ハ各々其ノ所有者ニ付キ、認諾ヲ求メテ修理スルモノトス。
六、石材採取ノ期限ハ、契約締結ノ月ヨリ向フ十ヶ年トス。
七、石材採取料ハ老々々年老百四拾円トス。
八、採取料金ハ左ノ二期ニ分チ、乙ハ甲ニ納付スルモノトス（旧暦年度）。
九、納付期日（旧七月末日限り、旧十二月末日限り）
以上各項及常識判断ニ依リ、乙ガ契約書違反ナルト認ムトキハ、甲ハ乙ニ対シ石材採取中止、又ハ解約ヲ為スモノトス。

昭和十一年九月 日

- 株組代表 阿南豊次郎印
- 阿南勘五郎印
- 宇都宮喜代治印
- 荒金三郎印
- 石山組代表 武野佐五郎印
- 一宮瀧太郎印
- 今村喜六印
- 一宮助八印

石塔の注文は、石工が個人的に請けるしきたりであるが、「会計簿」によれば、昭和34年、豊岡地区遺族会から同業組合が請けている。125本という大量であったためであろう。幅6寸・入り5寸・穂高3尺3寸で、運搬・建て込みは組合が負担し、1本3,000円である。12月3日に総会を開き、一宮助八・村井茂・城内丈夫・吉野一夫・武野勘吾郎・角田勝則・佐野政喜・藤田肇・一宮秋太・武野司平・吉野政雄の11名が、内金として10本分3,000円宛て、吉野政弘・中島久信が1,500円ずつ、残金1,500円を武野勘吾郎が受領している。そして翌35年4月末に建て込んで、勘定している。結局、仕事をした人と本数は、吉野一夫の40本を最高に、武野勘吾郎18本、村井茂・藤田肇各10本、城内丈夫9本、吉野政雄・佐野政喜・一宮秋太各8本、山田義則2本で、単価1,500円で支払い、残額は運搬・建て込み・資材費に充てたようである。

2、石工の系譜

江戸時代末期以降の、石工を知る有力な資料に師匠墓と石工墓がある。

まず、師匠墓について見れば、表21のように、建福寺など5ヶ所の墓地に8基を見出した。

（表21）のうち、一宮伊八郎墓には、「弟子中」とのみで弟子の氏名は刻んでいない。また、吉野才吉の弟子は、「吉野家之墓」の地形石に、「才吉門人」として刻んだものである。累代墓建造の際、才吉の師匠墓の一部を使ったものであろう。

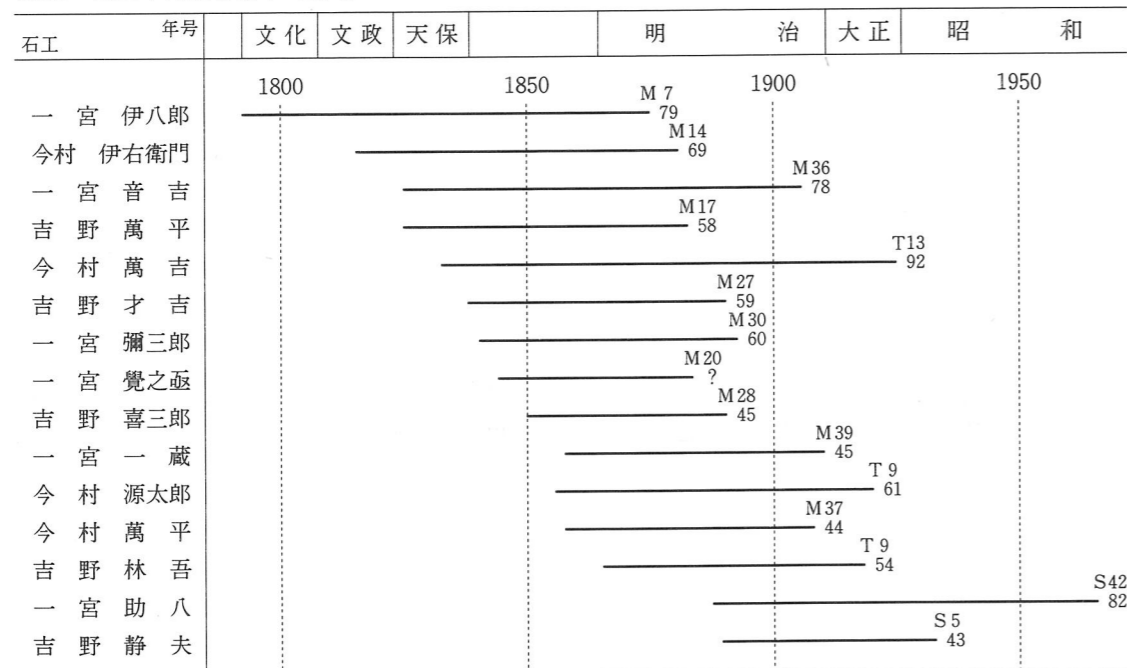
石工墓は、是永墓地に吉野才吉・吉野林吾・吉野静夫の3墓、新墓地に一宮音吉・吉野助八の2墓、尾久保墓地に今村萬吉・今村萬平・今村源太郎の3墓がある。

前記の師匠墓と石工墓で判明する石工数は、重複分を除くと54名に及ぶ。ただし、吉野林治は吉野林吾と同一人物だとした。墓石の没年・享年によれば、15名の石工の生存年代は下表の通りである。表中のM、T、Sはそれぞれ明治、大正、昭

表21 日出豊岡の師匠墓

墓地	師匠	弟子
1 建福寺墓地	一宮 伊八郎	弟子中
2 "	一宮 弥三郎	一宮時太郎 一宮欣吾 一宮政太郎 一宮順太 一宮熊太郎
3 "	吉野 萬平	吉野喜三郎 高橋萬蔵 武野勘治 吉野亀吉 吉野伊太郎
4 是永墓地	吉野 喜三郎	吉野吾作 吉野豊作 林芳太郎 本田久太郎 本田和市 森本弥助
5 "	吉野 才吉	一宮一蔵 吉野林治 野川安太郎 井上梅治 井上七郎 新川馬太 松本傳吾 西尾定太郎 安部福太郎 本田三吾 安部権太 佐田源太郎 江川政造
6 新墓地	一宮 一蔵	一宮達治 一宮助八 井上徳治郎 城内源三郎 本田儀市
7 和泉墓地	一宮 覺之丞	吉野栄太郎 藤井増太 後藤湯八 長野竹次郎 藤井順三郎
8 尾久保墓地	今村伊右衛門	村井茂市 吉村仲造 亀井利平 今村太郎吉 今村源太郎 今村萬平

表22 石工年代表(日出・豊岡)



和で生存期間の直線右端の数字は享年である。一宮伊八郎を例とすれば、明治7年、79歳で死亡したことを示している。

次に石工同業組合の張簿に記載された石工の総数は58名である。ただし、昭和5年から昭和25年まで21年間の空白があり、この間は不明である。帳簿ごとに記せば、「組合規約」の末尾に、規約を制定した大正11年当時の組合員33名が、署名捺印している。

三浦作太郎、一宮順太、今村喜六、新川孫市、武野佐五郎、長野重道、長野陽、吉野栄、吉野庄太郎、吉野貫次、一宮政太郎、一宮滝右衛門、吉野静夫、藤田三平、阿部徳次郎、中嶋里二、西村寒吾、安部兼太郎、中嶋吾市、二宮高治、西尾定

太郎、城内虎義、望月新吾、一宮助八、一宮義人、村井音造、山本勘吾、村井茂、今村勇、村井志蔵、渡辺小助、一宮秋太、目代楠男。

大正11年から昭和4年までの、組合費納入状況を記した「収支計算簿」で、「組合規約」33名に次の18名を加えることができる。

村井勘吾、二宮実、三浦権六、赤山秀夫、田中由夫、一宮憂夫、城内四郎、西尾定夫、本田由夫、村井仙太郎、工藤末男、村井善六、村井茂男、城内丈夫、角田勝則、吉野一夫、佐野政喜、藤田肇。

なお、組合費納入状況は就業状況を示すものと考えるので、次に表示する。表の組合費は前・後期に分納する定めである。表の○は前・後期とも完納し、△は前・後期のいずれか、あるいは半額

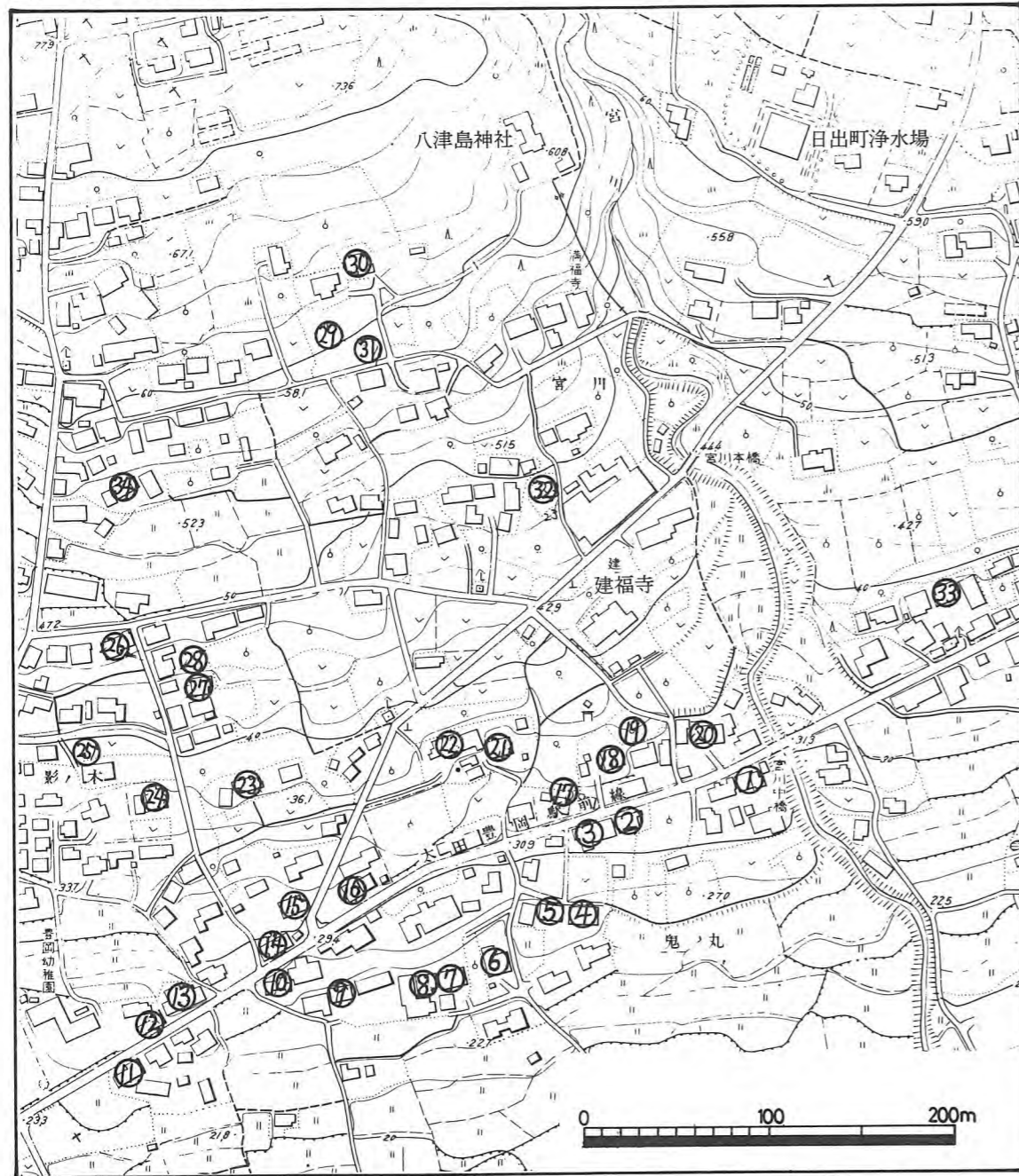
表23 組合費納入状況(一)

	大正11	12	13	13	15	昭和2	3	4		大正11	12	13	14	15	昭和2	3	4
三浦 作太郎	○	○	○	○	△				目代 楠男	△	△		△	△	△	△	△
阿部 徳次郎	○	○		○	△				村井 勘吾		○	○	○	○	○	○	○
一宮 順太	△	○	○	○	○	○	○	○	二宮 実六			△	△	△	△	○	○
今村 喜六	△	○	○	○	○	○	○	○	三浦 権六			△					
新川 孫市	△	○		○	○	○	○	○	一宮 義人								
武野 佐五郎	△	○	○	○	○	○	○	○	赤山 秀夫					△	△	△	△
長野 重道	△	○	○	○	○	○	○	○	田中 由夫					△	△	△	△
長野 陽	△	○	○	○	○	○	○	○	一宮 憂夫					△	△	△	△
吉野 栄	△	○		○	○	○	○	○	城内 四郎				△	△	△	△	△
吉野 庄太郎	○	○		○	○	○	○	○	西尾 定夫				△	△	△		
吉野 貫次	○	○		○	○	○	○	○	本田 由夫				△	△	△	△	△
一宮 政太郎	○	○	○	○	○	○	○	○	村井 仙太郎					△	△	△	△
一宮 滝右衛門	○	○		○	○	○	○	○	工藤 末男					△	△	△	△
吉野 静夫	○	○		○	○	○	○	○	村井 善六					△			
藤田 三平	○	○		○	○	○	○	○	山本 勘吾	○	○	○	○	○	○	○	△
西村 寛吾	○	○	○	○	○	○	○	○	中嶋 里次	○	○		○	○	○	○	○
安部 兼太郎	○	○		○	○	○	○	○	村井 茂男	○	○		○	○	○	○	○
中嶋 吾市	○	○		○	○	○	○	○	一宮 助八	△	○		○	○	○	○	○
二宮 高治	○	○		○	○	○	○	○	城内 丈夫	○	○	○	○	○	○	○	○
西尾 定太郎	○	○		○	○	○	○	○	角田 勝則	○	○	○	○	○	○	○	○
城内 虎義	○	○		○	○	○	○	○	一宮 秋太	○	○		○	○	○	○	○
望月 新吾	○	○		○	○	○	○	○	吉野 一夫	○	○		○	○	○	○	○
村井 音造	○	○	○	○	○	○	○	○	佐野 政喜	○	○		○	○	○	○	○
今村 勇	○	○	○	○	○	○	○	○	藤田 肇	○	○		○	○	○	○	○
村井 志蔵	○	○	○	○	○	○	○	○	武野 勘五郎	○	○		○	○	○	○	○
村井 小助	△	○	○	○	○	○	○	○	吉野 正雄	○	○		○	○	○	○	○

表24 組合費納入状況(二)

	昭和26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
山本 勘吾		△																		
村井 茂男		△				○														
中嶋 里次	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
一宮 助八	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
村井 茂男	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
城内 丈夫	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
角田 勝則	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
一宮 秋太	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
吉野 一夫	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
佐野 政喜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
藤田 肇	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
武野 勘五郎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
吉野 正雄	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
武野 司平			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
吉野 正弘								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
中嶋 久信								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
山田 義則								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
渡邊 万吉																				○

図7 石工の分布 (豊岡)



た。一宮義人は助八の弟で、土田家（山香町）の養子となった。

井上梅治は松川へ養子に行った。城内丈夫は城内虎義の兄で、城内源三郎は八津嶋神社宮司城内貞彦のおじで、古屋家（山香町）へ養子入りした。一宮達治は宇都宮家（杵築市大片平）へ養子、井上徳治郎は阿部家（大神）に養子入りしたが、出戻った後も養家の姓を名乗っていた。安部兼太郎の子邦男は交通事故で死亡した。望月新吾は本田

三吾の弟子であるが、吉野林吾の加勢をしていた。豊岡の石工には、匠でない石工の加勢をすることが、他にもあったようである。本田儀市は杵築市に養子へ行った。工藤末男は工藤壮作のおいで、津久見市へ転任した。新川孫市は角田勝則のおじで、新川馬太の養子となった。二宮実は高治の弟である。本田儀市は杵築市に養子へ行った。

第2の流れは一宮系である。一宮伊八郎の活動期は江戸末期である。彼の墓は角塔二重で、「曲木



写真 72 吉野才吉・林吾師匠墓 写真 73 一宮覚之丞師匠墓 写真 74 今村伊右衛門師匠墓

辰右衛門末男也。文政八年当所新宅建」とある。江戸末期、曲木には石工が居たようで、松屋寺秋葉堂の釈迦像には、「文政八年 曲木 元助」の銘がある。一宮伊八郎は松屋寺の十六羅漢を刻んだ。伊八郎の長男が弥三郎、次男が常三郎である。弥三郎墓は膳台猫四重の角塔である。常三郎は和泉の吉野家に養子に入ったが、墓石には「一宮覚之丞正行」と記している。

日出・豊岡石工のうち、一宮覚之丞が最もよく知られているのは、宇佐市柳ヶ浦の東光寺にある五百羅漢を刻んだからである。『柳ヶ浦町史』は、五百羅漢の作者を「日出の人で、覚兵衛といふ独身者」で、「道覚の法号を授け」られ、「明治五年七十二歳を以て入定した」と記す。しかし、一宮覚之丞の墓石裏面に「豊前宇佐郡中須加二而、五百羅漢五百二十四鉢揃、居丈二尺八寸也。安政六年巳午年ヨリ、明治十五年壬巳八月十五日ニ、二十四年之間也。羅漢寺道理和尚之弟子ト成道應ト号ス、一宮覚之丞正行事也」とある。彼が独身者でなかったことは墓が夫婦墓で、妻よかの法名を「石鏤守節信女」と記すことによって明らかである。しかし、墓銘は必ずしも正確ではないようである。「豊前中須賀郷真珠院五百羅漢記」は、五百羅漢造立の時期を、文久三年から明治四年と記している。また、東光寺住職は、道理ではなく道琳であろう。細部については、今後の研究にまたねばならないが、五百羅漢の作者が一宮覚之丞であることは疑えない。そして『柳ヶ浦町史』は、一宮覚之丞が五百羅漢に専念したと記すが、そうでもなかったようである。今回の調査で、胎蔵寺

仁王像（文久三年）、桜本宮仁王像（万延元年）を刻んでいることが判明している。覚之丞は数多くの作品を残しているが、墓石に「石方 御国中惣統領」と刻み、仏弟子となったことなどを考えると、家庭生活に恵まれなかった点があったのではなかろうか。

一宮弥三郎墓は膳台猫四重塔の角塔である。弥三郎の長男が欣吾、三男が熊太郎である。熊太郎は一宮覚之丞長女と結婚した。なお、五男房次郎は衆議院議員となった。一宮順太家は、父の代に一宮政太郎家より分家した。順太は酒好きで飲んでは仕事をし、飲むと上気嫌になって他人にも飲ませた。死後の借銭整理が大変だったというが、八十八ヵ所の仏像の世話人にもかなり飲ませたらしい。子憂雄は戦死した。一宮滝右衛門は滝太と通称していた。一宮昭七郎・安部茂人は数年間だけ石工をし、昭七郎は町役場に勤め、茂人は理髪屋になった。山本勘吾は別府市亀川で魚屋となった。渡辺万吉は養子である。

第3の流れは今村系である。尾久保には、家号を「東の家」「中の家」「西の家」「新宅」という、4戸の今村家が並んでいる。今村家は堀に居住していたが、太郎右衛門の次男太郎助が、尾久保に移住して「東の家」を開き、その子伊右衛門が「中の家」の初代となった。伊右衛門に子がなく、「東の家」の藤蔵が継いだという。伊右衛門と萬吉の年齢から考え、伊右衛門は初代でなく、藤蔵が襲名して2代伊右衛門となったと推測する。伊右衛門墓は角三重で、弟子のうち今村源太郎は「東の家」、萬平は伊右衛門の孫である。今村喜

六は今村萬吉の弟子である。喜六の父藤太郎は一宮一蔵の弟で、大神の堀家に養子入りした。一蔵の妹が萬平の嫁で、喜六は萬平の婿養子となったから、いとこ同志の結婚である。喜六は真面目で仕事は寧であった。否の弟子のうち、赤山秀夫・村井千太・村井一平は戦死した。

村井茂は桃の木・西畑で石切りをしていたが、年老いてからは吉野正雄を手伝った。山本勘吾・村井音造も石切りを主にした。小学校卒業で弟子入りしないと、石工の技術を習得しがたいが、長野は石切り場に近かったため、石切りを主にしたことも考えられる。石切りは石工の仕事の8割くらいにあたり、原石の注文がかなりあったようである。石切り専門の人を山師というが、玖珠出身の園田竹次郎や伊予出身の岡田伊助が居た。園田竹次郎は、西権現の裏から石を切り、佐賀関の護岸工事に出して居着いた。

修業 親や兄が石工の場合は家で修業した。小学高学年になると、セツウ（榎）でのみを叩いて荒こぶを取ったり、にあし・小よきで叩いて均したりの手伝いから始めた。他人の師匠に弟子入りするのは、高等小学を卒業してからであった。通いが普通で、師匠の家に住み込む場合は、食い扶持をを払わねばならなかった。弟子の期間は、道具持ちや小屋掃除から、井戸水汲みまでした。兄弟弟子からせがまれることもあり、石切り場へ矢穴掘りに行く時は、道具をかうて狭い道を登るので、落ちやしないかとひやひやした。石切り場で落ちた人もあれば、落石事故で死んだ人もあった。のみの使い方は教えてくれたが、師匠は「見て覚えよ」と言い、盗み覚えが技術習得の方法であった。猫足や蓮華は、しくじることが多いからさせてもらえなかったが、師匠の子はしくじってもさせていた。3年間はただ働きであったが、盆・正月に弁当代くらいの日当をまとめて出していた師匠もあった。3年間修業してから、1年間のお礼奉公をした。3～5年間では難しいことは教えてくれないし、石塔の字彫りは7、8年後に教えてくれたから、兵隊検査までは一人前とはいえなかった。一本立ちになれば組合に加入したが、師匠が忙しい時には加勢に行った。



写真 75 豊岡共同墓地

3、製品の種類と受注

種類 日出・豊岡石工の製品は、大別すると仏像と石塔の二種である。系譜の項で記したように、一宮伊八郎・覚之丞・一蔵・順太・助八などは仏像を刻んでいる。特に一宮覚之丞は、宇佐市東光寺の五百羅漢像の作者として有名であるが、一宮順太も川崎村駐在所から上がった青津山団地付近や、豊岡の家蓄市場から登った山などに、八十八ヶ所の本尊・大師像を残している。しかし、明治時代以降は、田染石工と同じように、主として石塔を製作したようである。ただし、閏年は、八重ごとだから死人が再び出るといって、石塔の注文が全くない年もあるほど激減していた。現在でも、平年の半分くらいしか注文がない。閏年は旧暦であったが、中津方面では早くから新暦であった。閏年には挽き臼を作ると、鶴崎方面から仲買いが買いに来た。

次に石塔について記すと、一目城の石は見かけより柔くて粘りがあり、細工に適していた。特に年数が経過するほど、字のはっきりしてくる特色がある。日出・豊岡では、石塔の寸法は穂幅で表現し、穂高でいう田染石工とは異なっている。穂の伏幅と高さの関係は、6寸で1尺5寸、7寸は1尺7、8寸、8寸は2尺、9寸が2尺2寸、1尺で2尺5寸、1尺1寸は2尺8寸である。穂頂の形式は禅宗頭（㌒）、真宗頭（㌒）、ほうろく頭（㌒）などがあり、ほうろく頭は宗派を問わない。額縁（縁）は依頼者の希望によって刻む。最も標準的な8寸角三重に例をとると、穂・上盤・中・下盤からなる。製作日数は10日である。尺で戦時中に500円、戦後は倍額の1,000円となった。金持ちは尺角三重にかつらを注文した。累代墓は月昭和35年ころから始まり、40年代以降に普及した。初期には尺角三重にかつらが多く用いられた。

表26 個人墓の形態

郡	形式	松屋寺墓地				新墓地				共同墓地				小計				合計	
		夫婦	男	女	童子	夫婦	男	女	童子	夫婦	男	女	童子	夫婦	男	女	童子		
I	禅宗一重		3	3	7						2	4	1		5	7	8	20	
	禅宗二重			5	8	1					1	3	4		1	3	9	13	
	禅宗三重	1			1	2		1	2	2	1	4	6	2	2	7	10	6	25
	真宗一重			1								1				2			2
	真宗二重	2	1	1				3	2		2				4	4	3	11	
	真宗三重			1												1			1
II	笠塔連華くり猫四重																		
	笠塔膳台くり猫四重							3	2						3	2		5	
	膳台くり猫四重							1	2						1	2		3	
	真宗くり猫三重							2	1									3	
	ほうろく二重	3																3	
	禅宗くり猫三重	1	1												3	1		2	
	ほうろく膳台三重								1								1	1	
	笠塔三重						1								1			1	
笠二重																	1		
笠一重																	1		

次に石塔の形式に簡単な説明を記す。

小石塔 子供墓で、6寸一重が普通であった。

くれ足三重 くれ足は猫のくり足である。猫が死人に近寄ると霊が猫を嫌って逃げるとか、生前に猫足膳で食べられなかったので、死んでから猫足をつけるなどと言われ、猫足を嫌うようになった。造った猫足をのけたり、造らないように注文主が希望している。製作日数は15日である

膳台猫四重 敷きなすは数えないで、三重と猫足である。膳台や猫足を加えるようになったのは、昭和時代になってからである。戦前は最高の石塔で、膳台・猫足のセットが多いが、どちらか一方だけのものもある。小型であれば膳台と猫足は一石、大型は別々に刻む。製作日数は17日である。

蓮華三重 昔は膳台・猫足よりも蓮華が多かった。二重花で逆蓮華もある。値段が高かったので、金持ちか坊主墓であった。製作日数は20日である。

笠塔四重 笠塔は穂が汚れないが、高価であるから注文は稀れであった。製作日数は30日である。

尺角三重地形玉垣付き 累代墓の標準型である。

灯籠・線香立て・花立てをつける。製作日数は30日である。

軍人墓 穂の上方の帯がない。戦時中から昭和30年ころまで注文が多かった。

次に日出・豊岡の墓地での石塔調査の結果を記す。時代と宗派に片寄らないため、松屋寺墓地・新墓地・共同墓地の3墓地で、1区画ずつを選んだ。松屋寺は曹洞宗で、門徒は日出藩士や城下町商人のようである。墓地には江戸時代から墓石を移した寄せ墓もある。共同墓地には江戸時代からの石塔もある。両墓地とも禅宗だけでなく、真宗門徒も混っているように見受けた。3墓地では、(1)どのような形式の石塔が造られたか。(2)時代によって形式の変化があるか。(3)禅宗頭・真宗頭が宗派によって守られているか、の3点を調べた。調査結果は、個人墓と累代墓に分けて表示する。累代墓を建立したために寄せ集められた個人墓は、松屋寺墓地6、新墓地33、共同墓地4、計46墓あ

った。二重や三重であったものも一重になっているため、表からは除外した。

個人墓の表はⅠ・Ⅱ両群に分けた。Ⅰ群は江戸時代のもものがなく、明治時代以降のものだけである。Ⅱ群では、各形式の上段が江戸時代、下段が明治時代以降の数である。明治時代以降に限れば、禅宗二重25、禅宗一重13、禅宗三重11、真宗二重7の順に多い。禅宗一重は、江戸時代には男・女と童子に使われることが多くなる。そして明治時代以降には、禅宗一重は禅宗二重へ、禅宗二重は禅宗三重へ、と次第に石塔に金をかけるようになったことが窺える。Ⅱ群では、笠塔蓮華くれ猫四重が最も多く、笠塔膳台くれ猫四重・膳台くれ猫四重・真宗くれ猫三重・ほうろく二重は各3である。豊岡石工が殆んどくり猫を彫るのは、凝灰岩よりも硬い安山岩を使用するためであろう。Ⅰ群に比べると、技巧を要するだけ高価なものが多い。禅宗頭が一重よりも二重へ、二重よりも三重へ、と変化しただけでなく、さらに高価なものを求める時代の趨勢がよく現われている。石工が、仏像よりも収入の良い石塔製作へ傾斜した、という話に一致する。そして新墓地の笠塔蓮華くれ猫四重や、笠塔膳台くれ猫四重と笠塔三重は、石工とその家族の墓である。石工の収入の向上を示していよう。

累代墓17墓のうち、11墓は昭和40年以降で、累代墓建立が増加したことを物語る。角三重は基壇であったが、昭和40年以降は地形になり、累代墓の主要形式の座を占める。笠塔、あるいは角でも蓮華・猫足など、技巧を要する複雑なものが、昭和40年以降少なくなるのは、石材の硬度が増して機械化することを示していよう。蓮華本猫五重地形1墓は田染石である。日出・豊岡石工の本拠地に進出した、田染石工の積極性が看取される。

3墓地とも、家ごとの墓域ははっきりしていて、禅宗門徒は禅宗頭、真宗門徒は真宗頭の石塔のよ

表27 異代墓の形態

形 式	年 代	明 治	昭 和						計
			~10	~20	~30	~40	~50	~57	
角 二 重 地 形							2		2
角 三 重 地 壇		1	1						2
角 三 重 地 形						6	1		7
蓮 華 猫 足 五 重 地 形		1			1				2
膳 台 くり 猫 五 重 地 形					1	1			2
笠 塔 膳 台 くり 猫 五 重 地 形				1	1				2



写真 76 龍泉寺墓地

うである。しかし、禅宗門徒と思われる家の墓域に、真宗頭が混っていることもある。この点について、松屋寺に近い龍泉寺境内の墓地での調査を参考に掲げよう。龍泉寺は浄土宗で、日出藩士の門徒が多いように見えた。一区画だけであるが、禅宗頭33、真宗頭9、位牌型としたものは、穂頂が山形で、幅に比べて厚さが薄く、側面と背面は粗削りのままである。17世紀後半からの18世紀初めまでの年号で、花崗岩のものが多かった。18世紀初めに位牌型から禅宗頭の形式が整ったようである。浄土宗でも禅宗頭が多いから、禅宗頭は禅宗だけのものではなく、石塔としては古い形式といえそうである。真宗頭Bは帆足家の墓に見られたが、穂の中央部に小さな突起があり、穂頂が四角錐の石塔になるのではないかと推測する。

受注 石塔は注文取りに回る場合と、依頼者が注文に来る場合とがある。後者は代々石工をしている場合であり、新規の石工は注文取りに回った。商圏は主として豊岡であったが、比は国東半島の武蔵や立石、南は臼杵市佐志志生や大分郡庄内町までの範囲であった。石工ごとに得意の地域があったが、安岐谷は上得意であった。七島表を製作して現金収入が多かったからだという。戦後は日出町・別府市での注文が増加し、遠方は運賃が高つくからである。懇意な人を世話人に頼んでお

くが、最も有効なのは、集落内で「おかた」とよばれる本家の注文を取ることである。成功すれば、その家が次々に注文してくれるだけでなく、一統の先祖祭りなどの機会に話が出て、範囲が広がった。

安岐・武蔵など遠方の場合、製品は辻間の馬車挽きを雇って運んだ。一個ずつ古藁や俵で包み、間に束のほてを詰めた。夕方、馬車に荷を積み、馬車挽きは守江で夜が明けるよう、夜半に出発した。石工は翌朝汽車に乗って先に到着して待つ。馬車着き（馬車の行ける所）まで馬車で運び、それから注文者が人夫を雇った。馬に負せるか、2名がロープをかけて担ぎ棒で担ぐ。建立した晩はご馳走になって帰ったが、注文者を紹介されるために泊へてほらうこともあった。代々の石工の場合は、定宿にする民家が定まっている場合もあった。

第4章 豊岡の石切場と石工道具

はじめに 前回の報告書「国東半島の石工1」で豊後高田市田染の凝灰岩系石工技術と用具を紹介したが、今回は国東半島のもうひとつの重要な石工技術である安山岩系石工技術を紹介しよう。安山岩は花崗岩より軟らかいが、凝灰岩より硬いという性質を持つ、山取りの技術は花崗岩と良く似ており、矢だけで石を割る。凝灰岩のように鶴ばしで溝を掘るようなことはしない。細工・仕上げの技術では、小斧やにあしのような独自の用具を持っている。

辻間の石工として知られている速見郡日出町の石工達は、豊岡に集団をなして住んでいた。辻間という地名では覆い尽せないで、この報告書では豊岡の石工として一括させてもらう。戦後しばらくまでは、豊岡北部の山中から石材を切り出していたが、今は他所から花崗岩を移入しており、石屋の数も減ってしまった。しかし、近世から近現代に至るまで、豊岡の石工達は別府湾沿岸において、重要な石工集団として存在していたのである。

1 石山と石材

豊岡の石工達が石材（安山岩ニ地石）を切り出した石山は、山香町との境である北側の鹿鳴越山地に点在する。別府湾に向う南斜面は断層岸で切立っており、石材を搬出するのは容易な作業ではなかった。近世初頭から掘り出されていたが、昭和30年頃には、他地方の安山岩や花崗岩を使うようになり、地元の石材は使われなくなった。石材の科学分析は別項を参照してもらうことにして、ここでは石工達から聞いた情報を元に、石山と石材について述べてみよう。

一目城 西鹿鳴越の旧豊前街道添いにあった石山である。豊岡で最も良質の石材が取られた。伝承によれば、ここに駕籠立場があり、そこからだけ日出城が一望の元に見わたせたので、一目城の名がついたという。時期は不明だが、日出藩主木下氏が、参勤交代の折に使う大坂港に、一目城の石で作った灯籠を建てたという。他の地方からも沢山の石灯籠が持ってこられたが、強い潮風に吹かれても、一目城の石灯籠だけが風化せずに崩れなかったもので、評判になったとのことである。

風化に強く、石粒の目は微密で、豊岡の石の中

では最も硬く、やや青味を帯びた石材である。粘りがあるので欠けにくく、見かけより軟らかいので細工しやすく、彫刻に適した石材である。目（石層・節理）は目立たないが、筋（薄い層）が走っている部分がある。黄な筋は軟らかく、青筋は硬い。水平方向に走る層状をなした石山で、幅の広い所でも3間ぐらいしかないで、取れる石材の量は少ない。ひびや割れ目が多く、小さな石塊の間に大きな原石が混っており、石材を切り出しにくかった。大きな種（原石）が少ないので、墓石の穂とか猫足等の目立つ部材にしか使えなかった。

松屋寺にある日出藩主の木下家歴代の墓石に、一目城の石を用いている。高さ3m近い大型五輪塔に使えるだけの巨大な原石は、なかなか取れないので、見つければ、他に使わずに藩に届け出たという。一目城は17世紀頃から使われ始め、昭和15、6年頃に終焉を迎えた。一目城のクチ（取り口）は街道より少し登った中腹にあり、横一列に並んでいた。昭和初年のクチと石工は次の通りである。

1. 阿倍
2. 吉野一夫・城内丈夫・一宮助八共同
3. 村井静夫
4. 吉野貫次
5. 一宮憂雄
6. 藤田肇
7. 安倍兼太郎
8. 山田義憲

桃の木 東鹿鳴越の西側の山の中腹7合目にあった石山。岩盤状の石山で、一目城から比べると質は落ちるが、原石は豊富であった。目（石層）は目立たず、はっきりしない石粒なのでポケと言われた。軟かいたので細工しやすかったが、赤味を帯びていたので嫌われたので、墓の地形等に使った。大正初期から昭和10年頃まで掘り出されていた。急斜面の上にあったので、危険だったし、石材をほぼ掘り尽したので、自然に掘らなくなった。

ナカダネ 桃の木の下にあった石山。目荒れとかスアケといって、石の間にス（小孔）が入っているので、挽き臼に適していた。

孫次郎 東鹿鳴越の西側の山中にあった石山。層状の岩盤で、クチが沢山あった。ナカダネの石に

似て、スが入っているので挽き臼に適していたが、墓石の穂や土台に使った。明治末期から大正初期まで掘っていた。

西畑 山田集落の北にあった石山。岩盤ではなくて、岩塊状の原石が取れた。白黒の石粒は大きく、白味がかっており、軟らかい。桃の木を掘り尽した後、昭和10年頃から昭和25年頃まで掘った。

猿渡 法華寺集落の北にある岩盤状の石山。青味がかっており、一目城の石より硬い。白黒の粒が混っている。昭和初期に4～5年間程、吉野一夫、一宮助八、望月新吾、藤田肇が掘った。

猪狩が谷 西畑の西隣の石山。西畑の石と似ていたが、硬めの石で、白黒の粒が混っていた。大正末期から昭和初期にかけて、佐野政喜と彼の師匠の吉野静夫が掘った。

西権現 大山祇神社の裏にあった石山。西畑の石より白く、軟らかく石質も良くなかった。石垣に使う間知石や地形石に用いる長石にしかならなかった。永西集落の園田竹次郎が大正期から昭和初期にかけて掘っていた。掘り出しにくい場所で、だんだん取りにくくなったので、園田は西権現の石山で掘るのをやめて組合に入って西畑の石を取るようになった。

雲田 豊岡から4km東北の石山。弥七郎集落の北側にある大岩塊状の石山であった。一目城の石に似て、硬くて青味を帯びていたので、一目城の代用に墓石の穂に用いたこともあった。大正期から昭和初期にかけて、安岐町山口の森朝生が原石を切り出して売っていた。墓石にすることもあったが、間知石にすることが多かった。

地域外の石材 昭和40年頃、豊川地区遺族会に頼まれて大分市にある護国神社の拝殿前に、吉野政雄が石灯籠を建てにいった。そこで、豊岡の石に良く似た安山岩で作った石灯籠を見た。石材不足に悩んでいた吉野は、早速その石灯籠を作った宇佐市江須賀にある吉本本家石材センターに問い合わせ、佐賀県唐津市唐の川の石であることを突き止めた。そこで、吉野は佐賀に出向き、一目城に似た安山岩を買いつけてきた。現在1才（尺立方）5,000円だという。昭和40年代後半に機械化した、同時に山口県黒髪島等から花崗岩を取り寄せるようになった。

2 技術と道具

(1)シュクリ 石材を切り出す前に、泥や土、コッパ（石屑）を取り除いたり、道をよくする作業の

こと。石山の藪を鉋とわち切り鎌で切り払う。土砂は鶴ハシ、金鋏や株切鋏で取り除き、テミや掻き板で運び出す。クチの穴の中から出る屑石のことをゴウソーといい、穴から屑石を出すことをゴウソーダチという。一目城では、少し大きな石は藤葛で作った丸もっこに入れて、負子（担ぎ棒）に吊って2人で担ぎ出した。丸もっこに入らない大きな石は、わら縄で編んだ四角いもっこに入れて担ぎ出した。しかし、このもっこは破れやすかった。もっこの代用として、緒をつけたかまげ（かますもっこと言う）を使うこともあった。かますもっこは2重になっているので、沢山の石が一度に運べた。ゴウソーが積もり積もって、クチの前には小さな広場ができた。一目城では街道に石屑があふれ出ないように、ギシ垣（石垣）を築いた。

(2)山取り 石山から石材を切り出作業のこと。軟かい凝灰岩（田染石等）では、岩盤から石材を切り離す時には、鶴ばしで溝を掘って、最後の1面を矢（鉄製のクサビ）で割る。地石（或山岩）の場合は、少し硬いので、矢だけで割ってゆく。矢穴を山ノミで掘ってゆき、底打ちで仕上げる。キキ矢をかまして、玄能で打つ。鉄突きを割れ目にねじ込んで、梃の要領で隙間を広げてゆく。

山ノミ 穴掘りのみともいう。矢穴を掘るノミ。先端は四角錐で直径8分～1寸、長さ7寸。摩耗して、長さが5寸程になると、先端を鋭く作り直して彫刻ソミに転用する。明治期までは刃先だけが銅であった。銅棒が普及した大正末期には、銅棒を切って作ったノミになった。

全長186mm、径31mm、890mm（図-11）

全長203mm、径28mm、810mm（図-11）

底打ち 底取りともいう。矢穴を仕上げるのみで、先端は平偏な四角錐状である。

全長195mm、胴22×21mm、475g（図-11）

豆矢 最も小型の矢、本来は硬い花崗岩に用いる矢であった。豊岡では寸法に余裕のない所や小部分を割る時に使うようになった。

全長35mm、幅21mm、厚さ16mm、重量55g（図-11）

きき矢 石を割る銅の楔。先端は尖っておらず、やや厚い。割りたい部分に、間を約1寸ずつ開けて、多数のきき矢を打ち込み、玄能で打ってゆく。大割りには大形の、小りには小形のきき矢を使う。1人の石屋が20枚以上のきき矢を持っていた。

図8 鉄突き

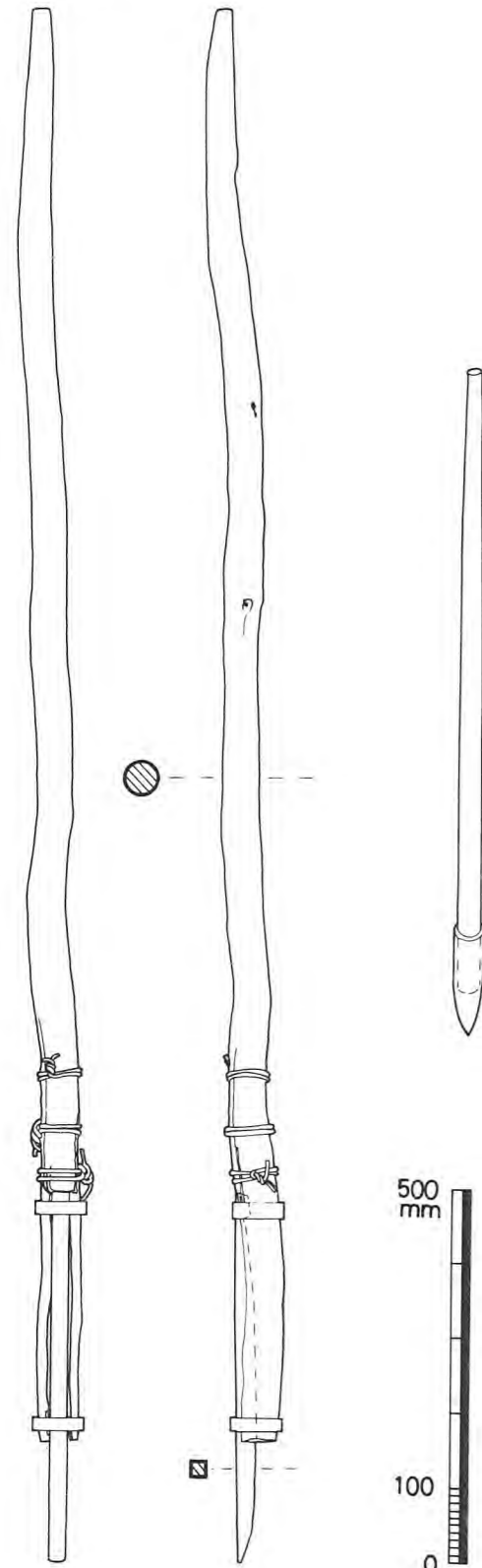


図9 山取り工程図

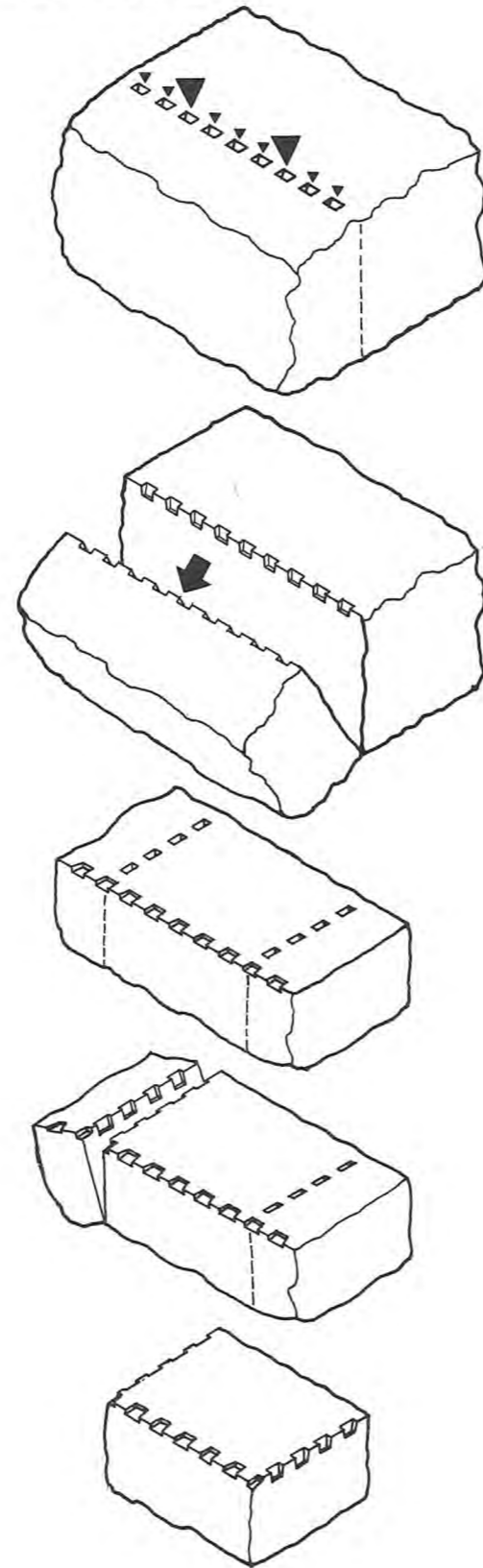
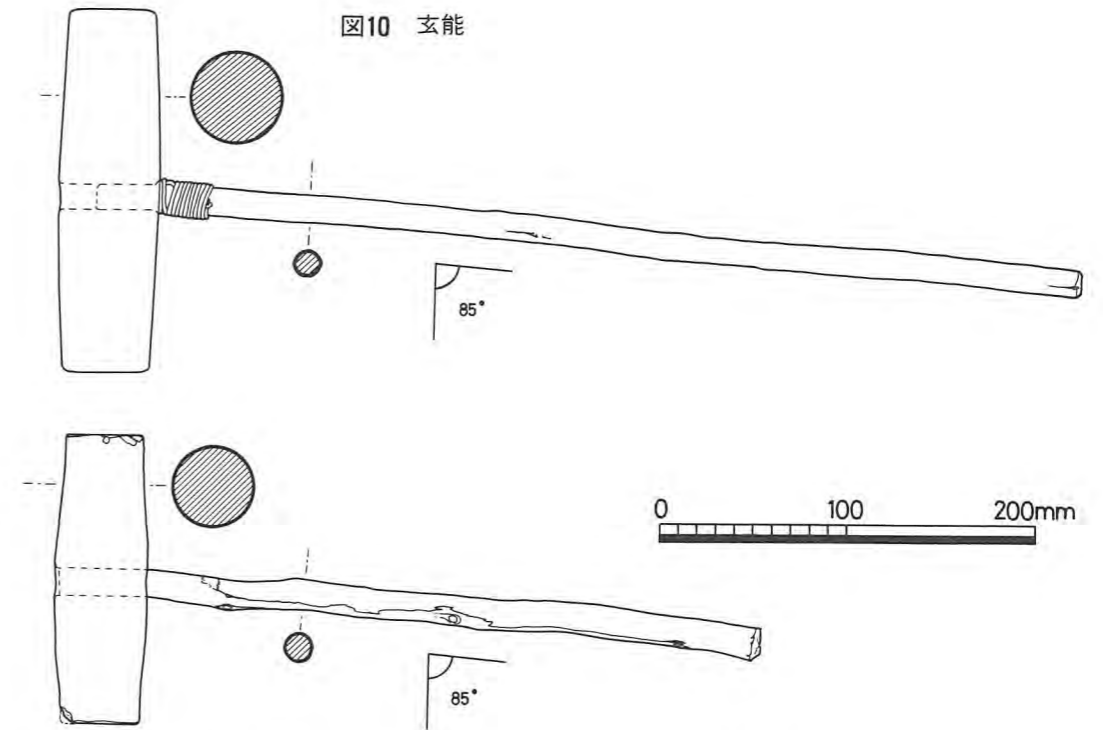


図10 玄能



全長71mm 胴幅33mm、胴厚30mm、重量318g
(図-11)

飛矢 きき矢より小形の鋼の楔。先端は尖っており薄い。矢穴に飛矢をつめる時、わらすぼを両側面につめる。玄能で打つと、反動で飛び出す。1枚だけで使う矢で、きき矢で割る場合よりも小さい岩や石材を割る時に使う。少し大きい石の場合には、きき矢を1枚立てて、縮めておいてから飛矢を打つこともあった。硬い石は割れやすいので、小さな飛矢を使った。大割りする時には、大きな飛矢を用いた。矢の頭はくるむ(めくれる)ぐらい軟らかくする。鍛冶の時、赤熱しても、そのまましばらく放置して、かなり冷えてから水に漬ける。飛矢はきき矢より軟かくしておく。

全長60mm、胴幅31mm、胴厚26mm、重量235g (図-11)

玄能 矢を打つ大形の金槌。昭和初頭までは付け銅の玄能があった。槌部の中央は地鉄で両方の打撃面だけ鋼だったが、鋼が欠け落ちることがあった。その後、総鋼の玄能になった。柄には軟らかくて使い良いぐみの木が使われた。重い玄能で3貫(11.25kg) 軽くて2貫(7.5kg)の重量があった。図-10の大型の玄能は石山用で、図-10の小型の玄能は石小屋で使う。

槌部の長さ290mm、直径81mm、全長816mm、重量

10.8kg (図-10上)

槌部の長さ230mm、直径72mm、全長580mm重量6.4kg (図-10下)

せつとう のみ類を打つ金槌。石山用のせつとうは重さ400匁(1.5kg)柄はぐみの木を使う。山に自生する五月ぐみ(苗代ぐみ・常緑低木で、春の田植の頃に長さ1.5cmの広楕円形の紅熟した果実ができる)を秋から冬に切って使う。春から夏に切ったぐみの木は弱いので用いなかった。ほとんどの道具の柄に五月ぐみを使った。

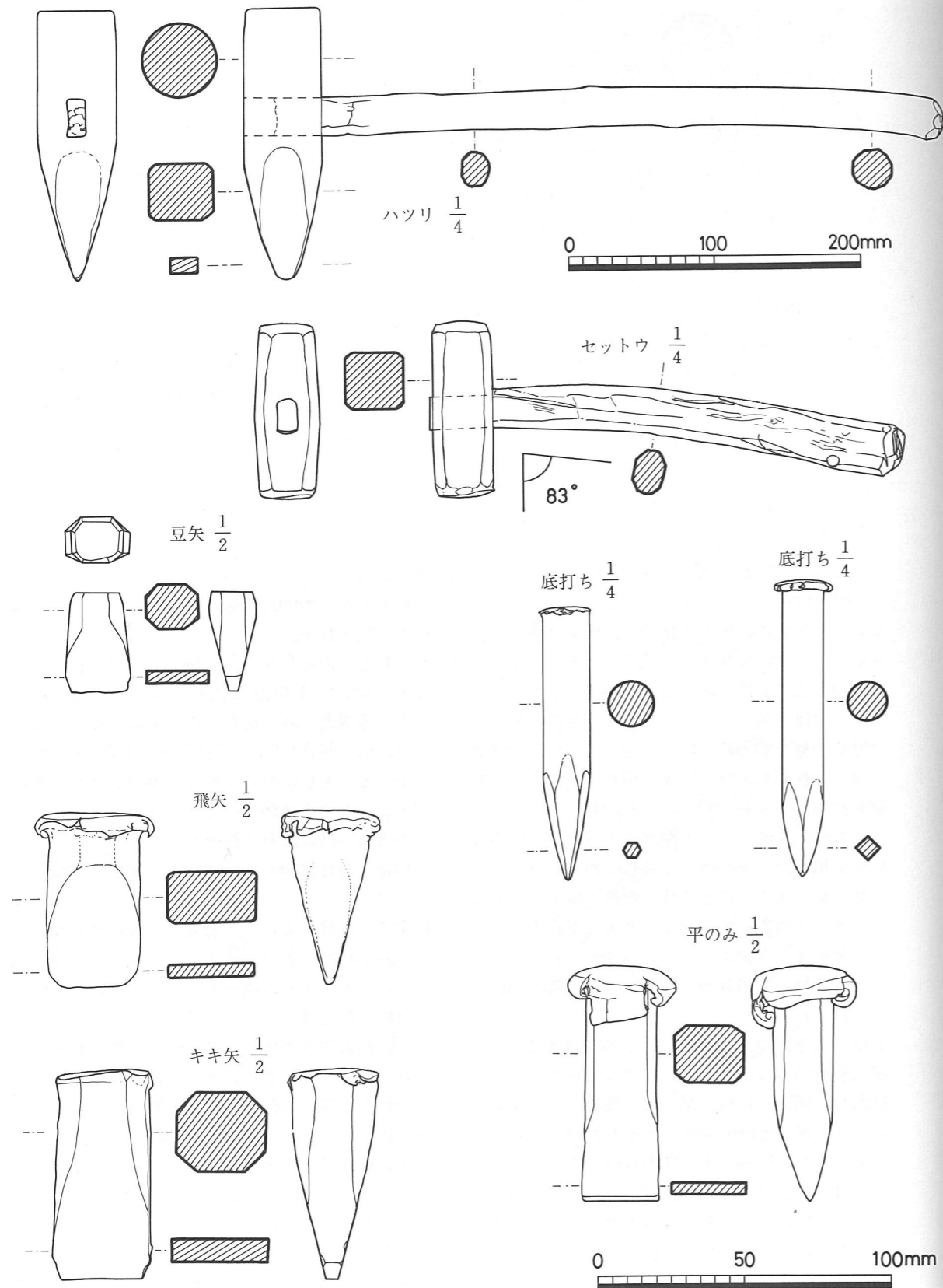
槌部の長さ119mm、全長325mm、重量1.38kg (図-11)

鉄突き 鉄槌ともいい、岩盤から離れた石材をこねて動かす槌。古いタイプの鉄突きは、ふぐし堀串といい山芋堀りの堀串のように、1間程(1.8m)の長さの檜の棒の先に、長さ8寸から1尺程で直径3寸程の鉄製の刃を、袋ソケット状にかぶせていた。(図-8)新しいタイプの鉄突きは、長さ5尺から1間程の檜の棒の先を割って、爪状の鉄製の刃を挟んで、2本の鉄輪で締めていた。(図-8)現在は鉄棒の一端を蛤状に打ち叩いた鉄槌を使っている。

全長2070mm、重量4.99kg (図-8)

道具袋 昔、石屋独特の道具袋があった。シュロ縄で編んだ買物籠のような袋である。のみ、せつ

図11 山取り等道具図



とう等を入れて、肩に担いでいった。

(3)荒取り クチから切り出した原石は、クチの前の小広場やロリジで、完成近くまで荒く整形した。ハツリで凸部を欠き落とし、平ノミで整形してゆく。これは運搬のために少しでも軽くさせるとともに、必要な大きさの石材を確保するためである。荒取りの時には完成の場合より5分程大きく作っておく。

はつり 槌部分の一方が尖がり、一方が平になった刃槌の一種。小さなこぶを欠き落とす時は尖った方を用いる。矢で割るほどもない小部分を欠く時には、平な方を使って打つ。刃槌部の長さ185mm、全長480mm、重量2.55kg (図-11)

平のみ はつりで打ち削った石材を仕上げ寸前の大きさまで整形するのみ。5寸程の長さであるが、図の平のみは磨り減ってしまっている。

全長81mm 刃幅21mm 重量270g (図-11)

(4)仕上げ 住居の近くや棟下に建てた石小屋で仕上げ作業を行なう。墓石の穂のような角柱を作ることとして、仕上げ工程を見てゆくことにする。

荒取りで完成品近くまで削った原石の1面を平にする。原石を地面に置いて、2本の木製の定規を両側に立てて、面にねじ(ねじり)が無いかを見て確める。手前の定規に添って、墨指しで線を引き、次に向うの定規に添って線を引き。具後に上の面に線を引き。下面には線を引きかない。(図-12-1)

こやすけで線より外を叩き落とす。こやすけの刃は外側に向け、せつとうで打つ。面の上部3分の1を彫刻のみで削る(図-12-2)

隈切りといって、平のみで墨の線をまっすぐに削ってゆく。平のみで削った後に番匠がねを当てて、ロク(水平・直線のこと)をみる。(図-)

石材をひっくり返して、墨を引いていない底面を上にして、両側面の墨を目当てにして墨を引く。

墨にあわせて、こやすけで隈を削ってゆき、二辺の隅をすべて平にする。彫刻ノミで全面を削って平面にする。(図-12-3~6)

平にした面を上向にして、両側に2本の番匠がねをあてて、ねじがあるかないかを確認する。(図-12-7)

ねじがあれば、高くなった方を彫刻のみで削って、ねじを直すといって、完全の平にする。

ねじを直すと寸法が小さくなる
次に残っている2辺をこやすけで隈切りする。

(図-12-8)

彫刻のみでとったあとは、小さな凸凹が残っているので、にあしの刃で全面を1度叩いて平にする。なまかたろくにしたら(大体平にしたら)小斧叩きといって、小斧で叩いて平滑にする。にあしの刃の跡と直角になるように小斧で1度叩いてから、その刃の跡と直角になるように、もう1度叩き、最後に縁と直角、あるいは平行になるよう小斧で叩いて仕上げる。(図-13)

完全に平にした1面を上にして、石材を水平にすえる。上面に仕上り寸法の長方形に墨を打つ。(図-13-9)

「かねの手をおろす」といって、とも(側面)に番匠がねで垂直に墨をおろす。番匠がねの長い方を上面に少しひっかかるように斜にあて、短い側面にまっすぐあたるようにする。(図-13-10)

4面とも次々に同じ様に平にしてゆく。(図-13-11)

最後に上面を基準にして、ともに墨を打ち、下面を平にして完成させる。(図-13-12)

球形の作り方 五輪塔の水輪のような球形に近い物を作る時には、一辺をまっ平にして、ぶんまわして円形に墨をひく。

円形に隈切りしてから、胴をのみ取りして円柱形にする。

円柱にしてから、のみで角をとり、目分量で球形にしてゆく。

こやすけ 石材の隅を整形する刃槌・刃先と柄はT字型になっている。せつとうで頭を打つので、めくれあがっている。刃先は幅8mmの帯状に平になっている。図のこやすけの刃先はタンガロイ合金が埋めこまれている。

刃槌部の高さ115mm、刃長40mm、全長204mm、重量1.09kg (図-14)

彫刻用のみ 石材の平面や曲面をだいたいの形になるまでに削るのみ。石山で使うのみより小形で、四角錐の刃先は底打ちに似て少し手偏になっている。

全長210mm、重量625g (図-14)

びしゃん 彫刻用のみで削ったあとを叩いて平にする刃槌。刃を縦横に切って、小さな四角錐の刃を沢山つける。比較的新しい道具だが、豊岡では昭和初頭には既に導入されていた。

刃槌部の長さ107mm、全長350mm、重量1.16kg (図-14)

図12 仕上げ工程図

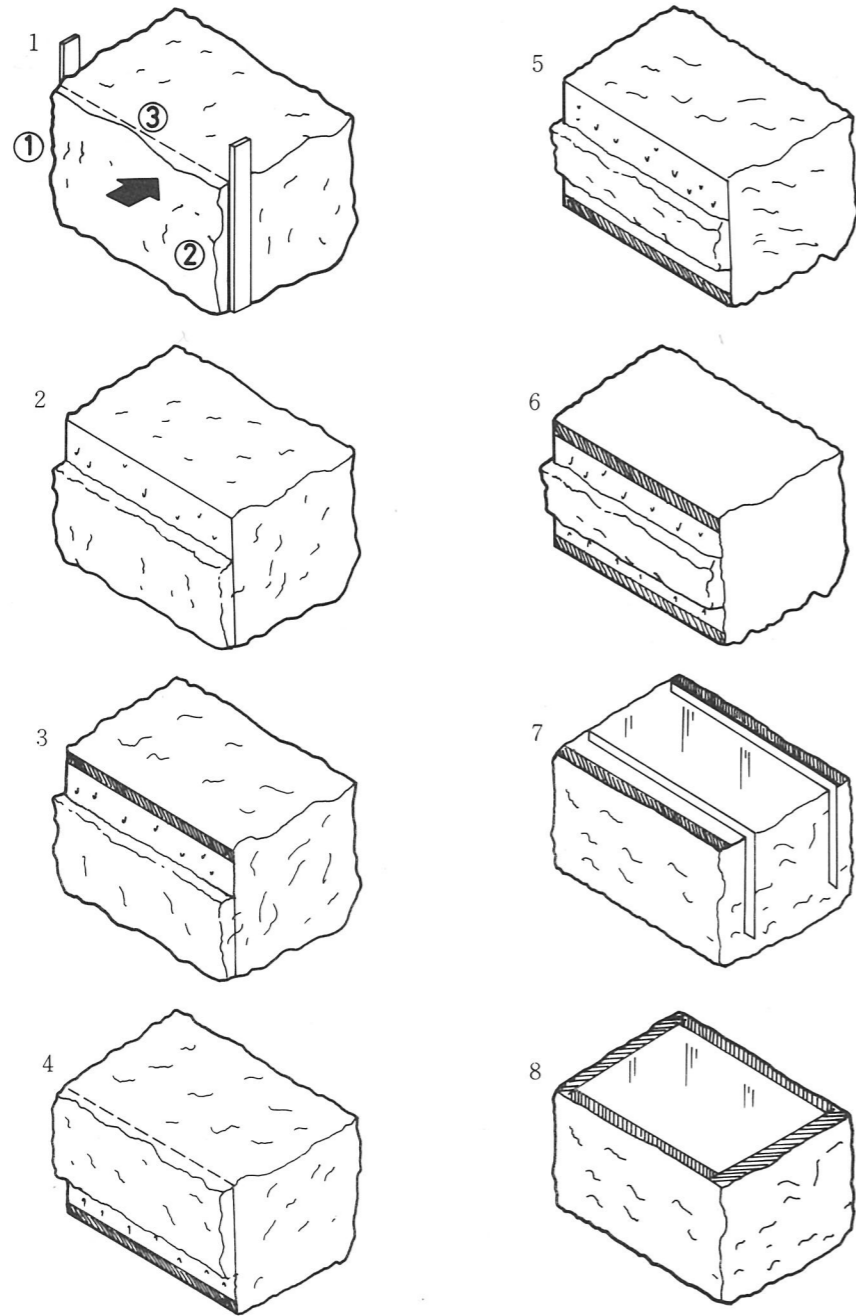


図13 仕上げ工程図

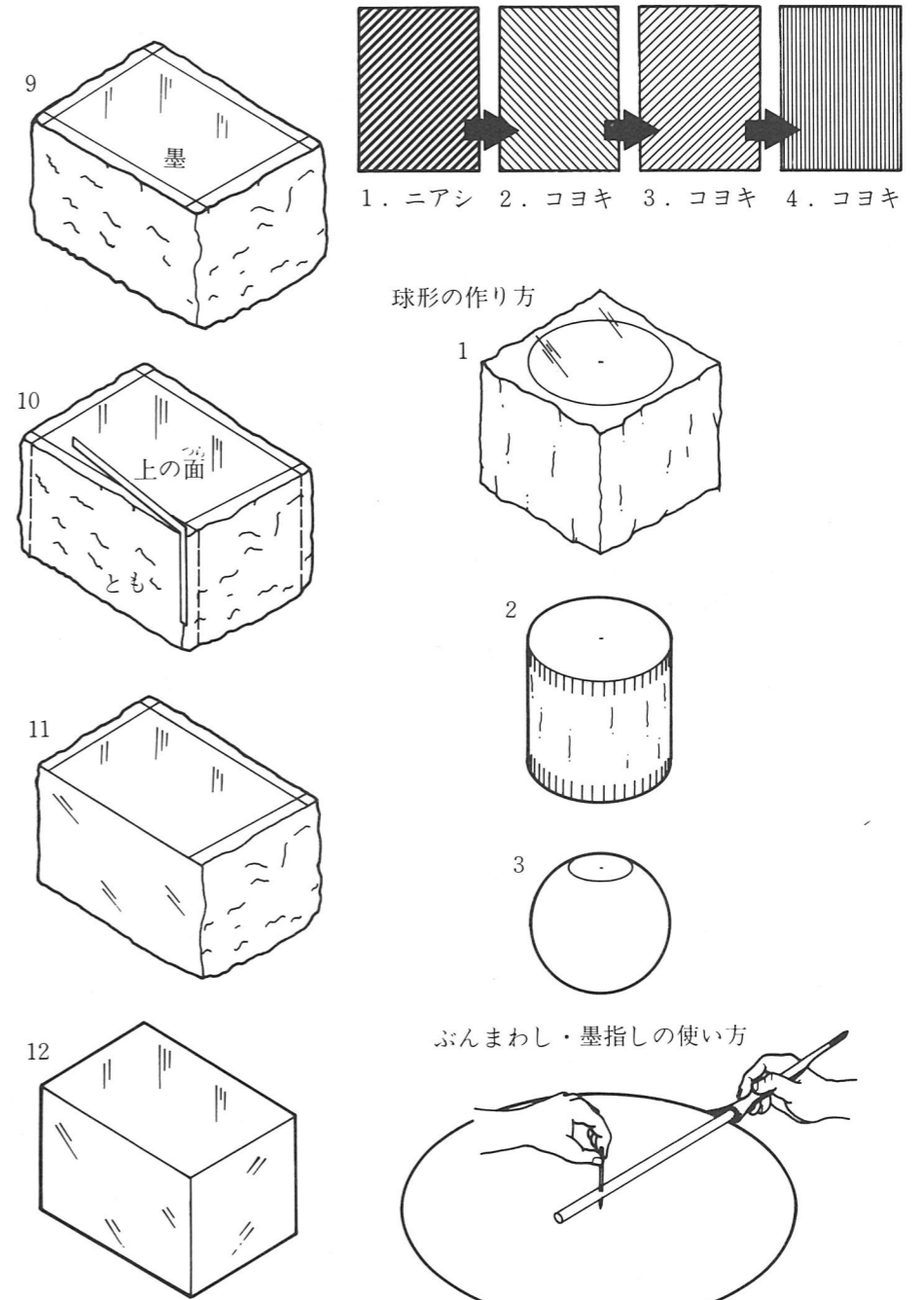
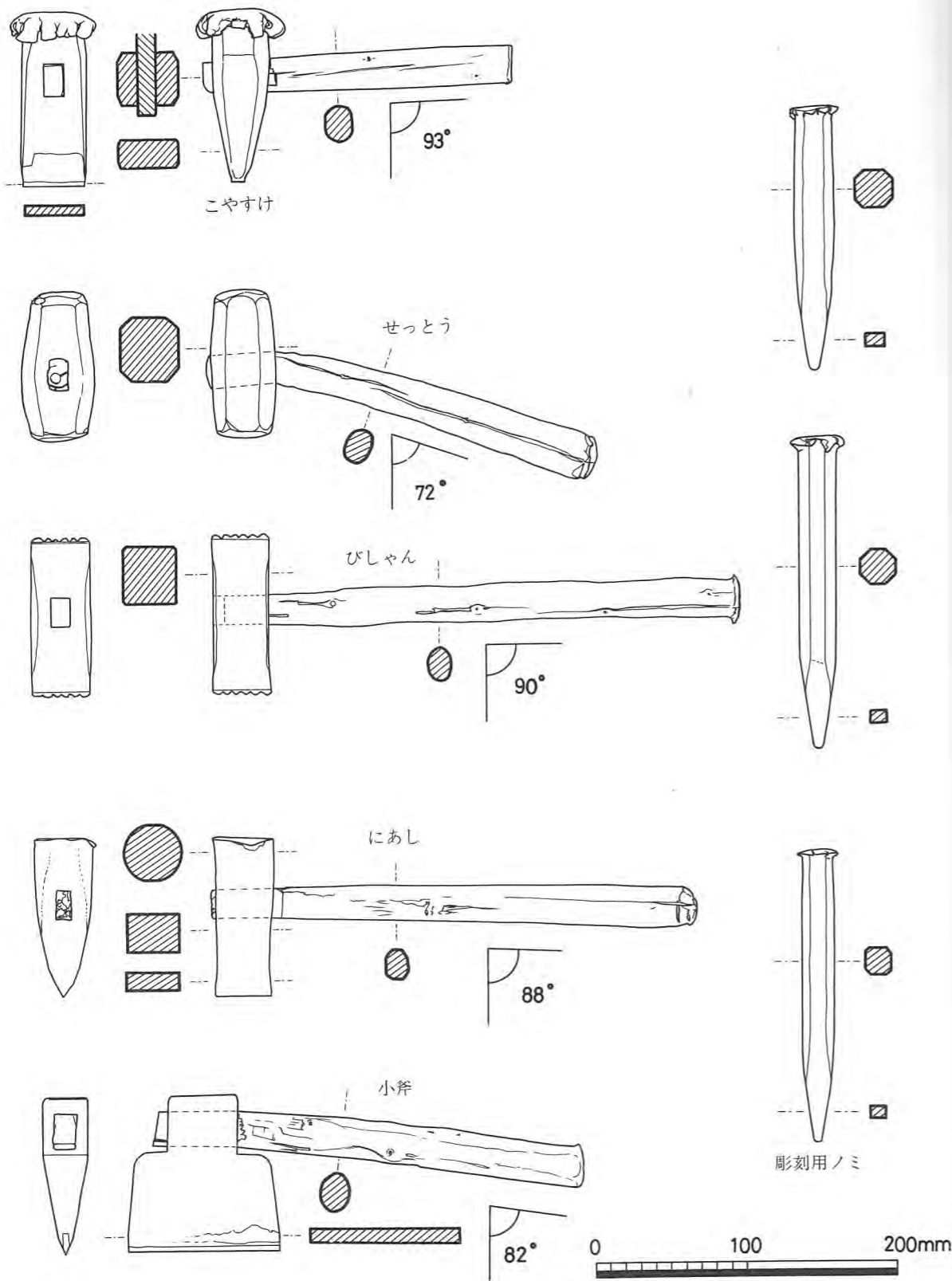


図14 仕上げ道具図



せつとう うち（石小屋）で使う金槌。石山用のせつとうより小型であるが、柄と刃槌部の接合角度は鋭角になっている。細かい作業をするのに使うのと、振りおろす角度が小さいためである。

槌部の長さ98mm、全長260mm、重量1.11kg（図-14）

にあし 石材の表面を小刻みにたたいて平にする刃槌。柄と刃の方向は同じ。

刃槌部の高さ105mm、刃長36mm、全長322mm、重量840g（図-14）

小斧 石材の表面を小刻みにたたいて、最終的に平にする刃槌。柄と刃の方向は同じ。にあしで切ったあとを仕上げる。斧型をしており、にあしよりも刃が長く、単位面積あたりの打撃力は小さい。にあしと共に安山岩系石工道具の特徴を最も良く示す道具である。

刃槌部の高さ104mm、刃長100mm、全長300mm、重量1.18kg（図-14）

(5)字彫り 墓石や石碑に文字を彫る方法には、大きくわけて二種類ある。葉研彫りは断面がV字形をしている。小さな字を彫るのに適している。最も簡単に早く彫れるので、墓石の側面の文字等を刻むのに用いる。大きな文字は丸彫りで刻む。蜜柑彫りともいい、溝幅の8割程の深さに彫る八分彫ることが最も多い。溝幅と深が同じ場合を、深彫りとか一杯彫りという。内側が広がった蜜柑

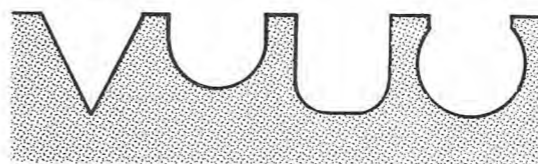
彫りをする石工がいたが、高度な技術が必要であったという。（図-15上）

昭和初期頃には、日出町八日市の判屋の榊永に文字を書いてもらった。印鑑を彫る人だったので、石屋が彫りやすい字を書いてくれた。墓石の穂の寸法によって、例えば1尺5寸に書いてくれと頼むと、障子紙にぴったりの長さで書いてくれた。紙に中心線を描く。中心線を合わせて糊で紙を石に貼る。小麦粉を煮た糊やふのりを用いた。文字を彫るたがねには、荒彫りに使う先端が四角錐で尖ったのみと、仕上げに使う先端が平になった平のみがある。平ノミには刃先がまっすぐなものと、丸くなったものがある。溝の輪郭の直線部分を仕上げるには、先端がまっすぐな平のみを用い、末端の曲線部分は先端が丸い平のみを使う。文字の溝の末端を始末することを「ともを取る」という。（図15-下）

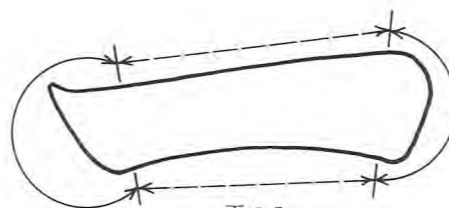
最初、字の輪郭を平のみで切ってから、輪郭の内側の紙をはぐ。全ての文字の輪郭を平のみで切ってから、先の尖ったのみで文字の内側を削ってゆく。これを荒彫りという。穂のすべての文字の荒彫りを終えてから、穂を起こす。紙をはがして、水をかけて糊を洗い流して、ごみを取る。乾いたら横に倒して、平のみで文字の縁を仕上げる。

定紋 戦後、累代墓を建てることが多くなり、墓石に定紋を彫むことが多くなった。紋帳を持つ石屋は、簡単な定紋なら紋帳を手本にして自分で描いた。複雑で難しい定紋は、豊岡に住む紋屋の阿倍徳七に描いてもらった。

図15 字彫り



葉研彫り 丸彫り 深彫り 蜜柑彫り

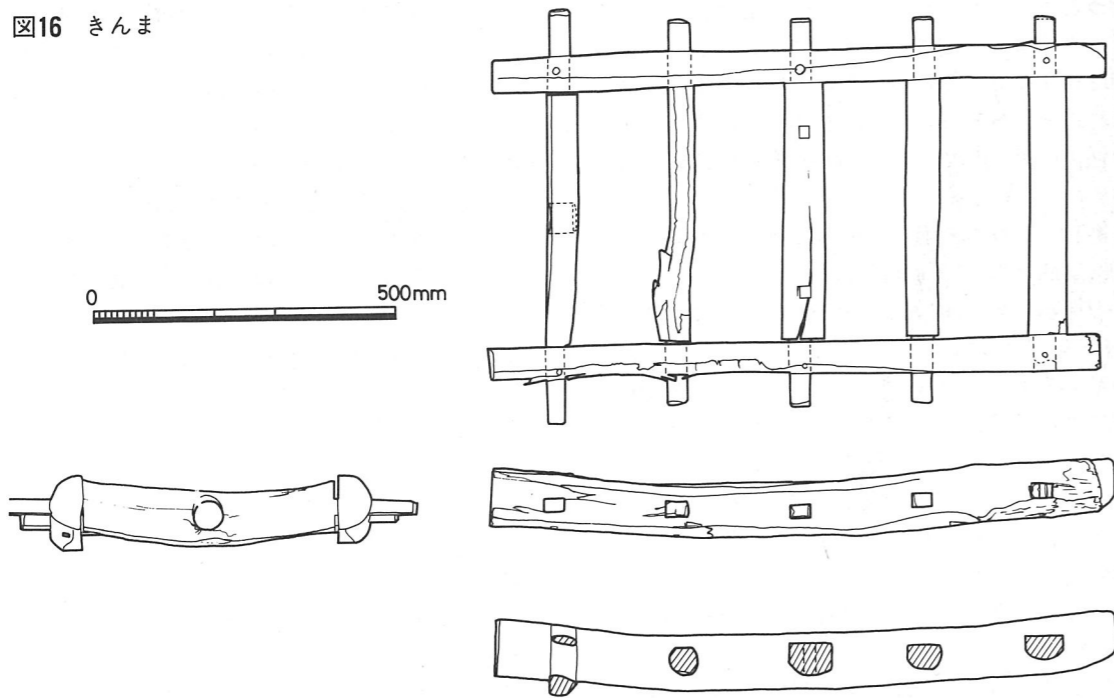


丸い平のみ (ともを取る)

(3)運搬 昔は担ぎ棒で石を吊って運んだ。石が重くなるに従って、2人持ち、4人持ちと人数を増やした。

地車 日豊線の工事の時（立石～大分間開通は明治44年）に、四国からやってきた山岡謙助が豊岡に住みつき、始めて地車を使いだした。それまで、石屋自身が石山から石を運びおろしていたが、山岡が専門に運搬するようになった。石を専門に運搬する人を仲士と呼んだ。重い石を運ぶため、地車は普通の荷車より短かくて頑丈に作ってあった。長さ4尺～4尺5寸、幅2尺5寸程の木枠に1本梶棒がついていた。車輪は直径1尺6寸程で厚さ4寸程の輪切りにした松丸太であった。石山直下の石材集積場をロクジという。ここで地車に石材を乗せて、後から馬に引っぱらせながら斜面を降りていった。住居近くにあった石小屋まで石材を

図16 きんま



運んだら、杵と車輪とに分解して、馬の背に乗せて登っていった。梶棒は車軸に連結しており、急坂を降りる時には梶棒を持ち上げ、杵の後下面についた尾ばちを地面にこすりつけて、ブレーキにしていた。地車の運び賃は、石の大きさを2人持ちとか4人持ちとかいって、値段を決めていた。地車を使ったのは一目城と桃の木だけで、1日に2往復しかできなかった。後に山田集落の山田利夫が、車輪に馬車の前輪を用いた地車で仲士を始めた。地車は辻間の工藤寅次という桶作りや靱摺り臼作りをしていた人が作った。当時、軽い石は地車には載せずに、馬の背に負わせた。

きんま 幅1尺6寸、長さ6尺の梯子状のそりで、先端に梶棒がついていた。そり部分の高さは5寸程で、幅1寸程だったが、地面に接する底面の幅は少し広がった。梶棒を持ち上げると滑りやすくなったり、押し下げるとそりの前が地面につこんで滑りにくくなった。1人できんまを曳き、一緒に走りおるので、気転がきいて敏捷な者でないと危険であった。きんまの道の中で滑りにくい部分には萩や茅を敷いた。当時は草刈りに農家の人達が牛を曳いて通り、蹴散らされる心配があったので丸太を敷くわけにはいかなかった。石材を運びおろした後、ロクジまできんまを担ぎあげた。杵の中に頭をつこんで、両肩に担いで急坂を登るので重労働であった。当時、山から木材を運び

おろす時にもきんまを使ったが、馬でも曳いていた。きんまは桃の木で使い始め、西畑で盛んに使われた。山田利夫が使い始め、後に中島熊夫が一時使用した。きんまを使う仲士がいなくなったので、最後には石工達自身が曳くようになった。きんまは堅木（樫、梶、桜が主）で作った。きんまは普通の家大工に頼んで作ってもらうことが多かったが、辻間の工藤寅次に頼むことがあった。

(図-16)

馬車 西畑ではきんまでロクジまで石材を運び降ろして、そこから荷馬車で運び出した。荷馬車を曳き始めたのは村井友市であった。村井が盲目になった後、角田太、二宮清、上田信が曳くようになった。

石材の寸法 昔は1本といい、墓石1本分を大きさによって何人役と計算して、仲士に日当を払っていた。雲田の間地石を馬車で運ぶようになって、才（1尺立方）を単位として使うようになった。桃の木でも、きんまで運ぶようになって、才を使うようになった。西畑の頃は才であった。

(7)石小屋と道具 石山には小屋を建てなかった。雨が降れば、一目散に逃げ帰るだけであった。桃の木の近くに松林があったので、暑い頃には松の樹陰で昼よこい（休憩）をした。鍛冶するために持ち帰る山取りの道具以外は、石の下や岩陰に置いておいた。

納屋の横、物置の片隅、母屋の軒下に「げ」（小屋根）を出して作業場にした。石小屋とって、ふいごをすえて鍛冶をしたり仕上げの作業をした。一人で作業するなら、1坪半から2坪の面積があれば充分であった。床や小砂利や石屑が積み重なって硬くなっていた。石小屋では石粉が飛ぶ。水に漬けた箒で床や石の面を湿らせて、石粉がたないようにした。乾いた石は、「ほらき」といってぼろぼろするが、湿らせると少し粘りができるので仕事もしやすくなる。石屋は石粉を吸うのでよろけ（硅肺）になりやすかった。

砥石 昔、墓石は穂の前面しか磨けなかった。昭和になってからは、金鋼砥石しか使わなかった。荒（荒砥ともいう）、中目、細目、人造練物の艶下と次第に細粒となり、最終仕上げに使う微粒の艶出しと5種類あった。昔は熊本の鹿毛という砥石問屋に金剛砥石を注文して取り寄せた。現在は大分の親和鋼が持ってくるようになった。

大正期までは、中目に相当する長崎産の黄な味を帯びた砂岩製の砥石があった。仕上げ用の天草砥石と荒砥は町内の荒物屋で入手することができた。昔の砥石は硬くて、がらんがらんして滑るので使いにくかった。金剛砥石は軟らかくて摩り減りやすかったが、おろし（磨き）やすかった。

道具類の刃先は荒砥で磨いて尖らせた。

染色 桃の木の石は赤味がかかった色をしていた。地形にするのさえ注文主から嫌われた。地形にする場合はそのまま使ったが、台が桂にする時には青く染めた。日出の薬局でベレンスという青い染料（コバルト化合物）を買ってきた。ベレンスの小さな粒を水の中に少し加えると、泡が立って溶ける。良くかき混ぜて、手拭いを浸す。硬く絞った手拭で、石の面をむらにならないように拭く。濃くするとおかしいので、薄く色付けした。何年かたてば、流れてしまうのだが、一目城のような青味がかかった石が好まれたので仕方なく染めていた。

墨 昔はベンガラ（酸化第2鉄）で石材に印をつけた。ベンガラは赤いので、青みがかかった灰色をした石材につけると目立った。ベンガラは薬局で簡単に手に入った。綿に包んだベンガラを開缶や竹を切った「ぼんぼこ」に入れた。水を注ぐと浸みってくる。最近墨壺に墨汁を入れて使う石屋もいる。ただし、糸は全く使わず、竹を削って作った墨指しを使って印をつけた。

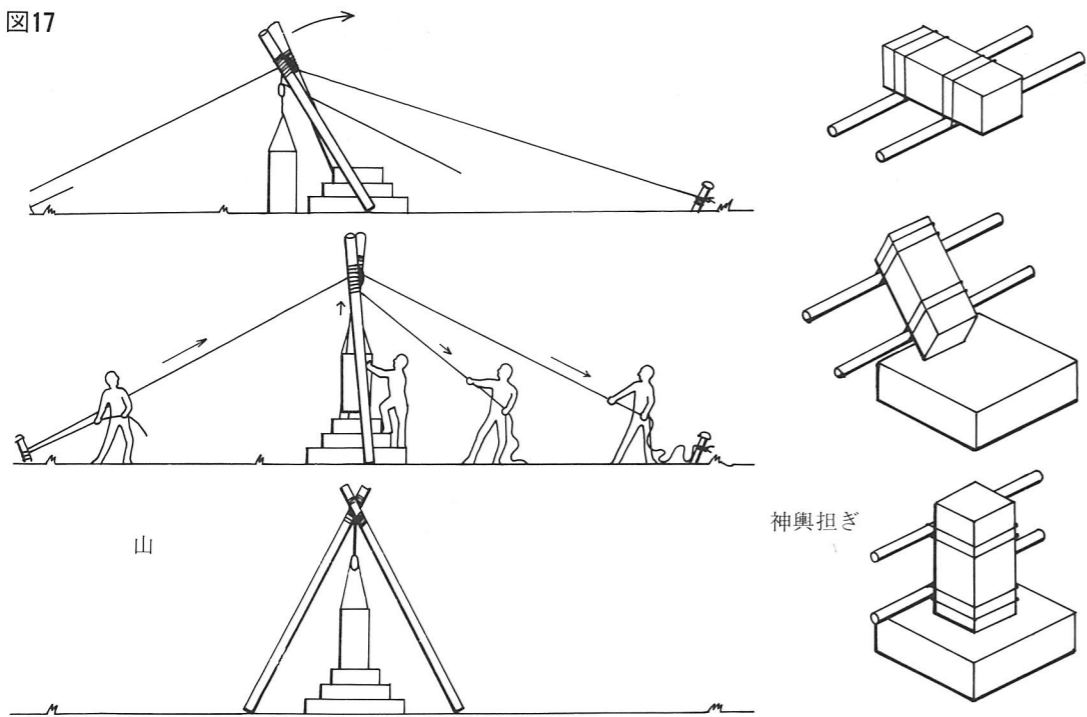
ぶんまわし コンパスのこと。箒に使ったキビ（箒キビ）の残りの茎を使う。1方の端に竹芯を刺して中心にし、片一方の端に墨指しをあてて円弧を描く。キビ殻は軟らかいので、竹芯を刺しやすく、直径の調整がしやすかった。現在の篠竹に錐で孔をあけ、竹芯を刺してぶんまわしにしている。

番匠鉄 曲尺のこと。石の面を見るため、石屋は番匠鉄を2挺持っていた。鉄製もあったが、銅（真鍮製）の番匠鉄が良く使われた。石山では腰にさして歩いたので、滑って尻餅をつくとき折れたり曲ったりした。さびにくいので目盛りは見やすかったが、軟らかいので狂いやすかった。鉄の番匠鉄は狂いにくい、さびやすい。さびたら、土灰（かまどの灰）をつけて、わら縄でこすってさびを落とし、菜種油をつける。番匠鉄は石山に放置せず、必ず家に持ち帰った。年に1度か2度、豊岡村役場に持って行って、計量器検査を受けた。石屋の番匠鉄は荒く扱われるので狂いやすく、ひどく狂っている番匠鉄はその場で折られた。

石積み石工 辻間には石垣積みはいなかった。辻間より1.5km東の太田に和田石松（明治15年頃生れ）と宮部某（明治30年頃生れ）という石垣積みがいた。また辻間より1.5km西の津留に一宮勇（明治35年頃生れ）と川野勝美（昭和初年生れ）がいた。豊岡の石屋が切った間知石を、石垣積み達が石垣に積んだ。灰石（凝灰岩）の間知石を使うこともあった。石垣積み石屋は、豊岡の石工組合には加入していなかった。道具として、鉄挺とはつりがあれば良かった。

(8)墓立て 出来上った墓石を墓地に持って行って建てることを墓立てとか建て込みといった。村井友市、阿倍定夫、角田太、上田重信という墓石運搬専門の馬車曳きが辻間にいた。昼間は山から石材を運びおろしたり、他の物を運んだりしていた。墓石を運ぶのは主に夜間で、提灯をともし夜道を行った。石屋は鉄道を使ったり徒歩で現地に行った。墓石全面を古俵やこもで包んで縄をかけて荷ごしらえした。隣近所の人に手伝ってもらって積み込んだ。重い石は四人で担いで積み込んだ。積み込んだら、お茶とお菓子を出して一休みした。墓石運搬の馬車は特別に頑丈で大きかった。大きくておとなしい馬に曳かせた。現地では馬車で運べる所まで持ってゆき、おろしておく。注文主がつれてくる手伝いの人達に墓地まで担いで運んでもらい、墓を建てる時にも手伝ってもらう。

図17



地形や石台を組むのは難しくないが、穂や笠は高い所に据えるので大変である。台石の上に穂を立てる時は、2本の棒の上に穂を横置きにのせて縄で縛る。4人で担ぐので、神輿担ぎという。台石の上に穂の一端を乗せてから起こすので、危険性がほとんどない。(図-17) 墓石に笠をのせたり、背の高い記念碑等を立てる時には山を建てる。2本の丸太の一端を綱で縛り、V字形に開脚する。頂上部に2本の綱を結んでから、山を垂直に建て、それぞれの綱の端を杭や立木に結びつけて動かないようにする。山に下げた滑車で碑石等を吊り上げる。八重なんばといって、滑車には八重に綱を巻く。綱の一方を緩めるながら、片一方の綱を曳いて、吊り上げた碑石等を移動する。山を建てることはあまりなかった。(図-17)

(9)鍛冶 擦り減った道具の刃先を尖らせて焼きを入れることを、素焼きとか鍛冶するといった。石屋は素焼きできなければ一人前とはいえなかった。

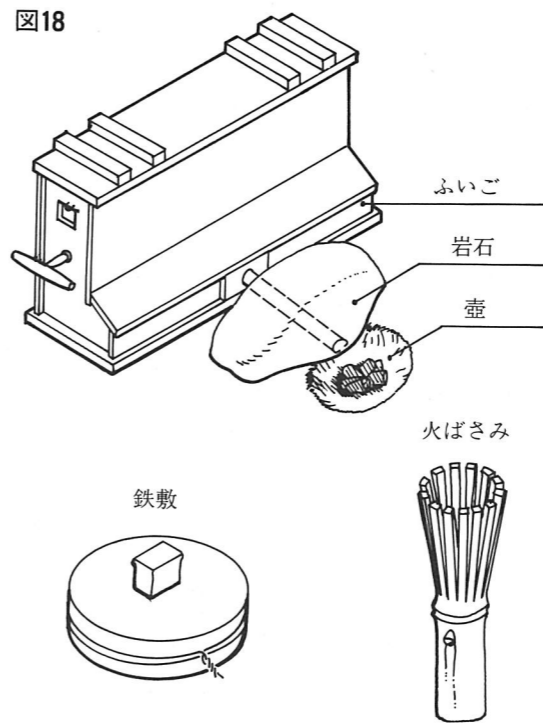
例えば、10本ののみを素焼きする時は、それぞれの刃先を真赤に焼いて、せつとうで叩いて尖らせる。もう一度、刃先の先端2~3分(6~10mm)程を灼熱させて、次々に水桶の中に漬けて鉄上げする。刃先を瞬間水に漬ける。先端がまず白くあがってくる。温度が下るに従って、濃い黄色となり、次に紫色になる。鋼の色の変化を見ながら、

再度先端を水中に突き込む。これを漬け殺しという。良質の鋼の場合は紫色の時に、少い軟い鋼は濃い黄色の時に、もっと軟い低品質の鋼は白色の時に漬け殺しをする。漬け殺しをしてから、冷えるまで水の中に漬けておく。石の硬さで焼きを変える必要はなかった。

鍛冶屋 少しぐらい刃先が欠けても、2、3回焼いて叩けば刃先を尖らせることができる。大きく折れた時には、仕方がないので鍛冶屋に持って行って直してもらった。さきがけといって、刃先に新しい鋼をつけたのである。大正期から昭和初年にかけて、三川集落に梅さんという夫婦でしている鍛冶屋がいた。その後、日出町堀の宇都宮が戦後しばらくまで鍛冶屋をしていたが、現在は鉄工所になっている。別府市亀川にはマサミツという鍛冶屋もいた。豊岡小学校の裏にある樋多鉄工所は戦後やって来た。新しく道具を作る時には、別府市流川の松下金物屋で地鉄や鋼を買ってきて、鍛冶屋に製作を頼んだ。断面が八角形の鋼棒である千種鋼を切って、のみにすることがあったが、あまり良く切れなかった。折れた自動車のシャフトを使うこともあった。

炭 鍛冶には松炭が適している。早く火がおこり、火力の調整がしやすかった。鉄がほねくらいといって、折れにくく仕上がる。「炭のそつが立たん」

図18



といって、途中で消えないので使いやすかった。吹きあげる(強く風を送る)と灰が被るので、消えにくかったのである。山香町小重見や日出南端に松炭を買いに行った。小重見や南端から、駄賃取りの馬に6俵負わせて売りに来た。松炭はどンドン焼きと本窯焼きとがあった。昔は消し炭のようなどンドン焼きを使っていた。火力は弱く、早く燃え尽きてしまう。地面に浅い堅穴を掘って、その中で焼きあげた松炭だという。本窯焼きは黒炭窯で焼いた松炭で、硬くて、使いおうけ(長持ち)した。どンドン焼きは昭和初期まで焼かれていたが、良質の本窯焼きに駆逐されてしまった。本窯焼きは昭和初期に1俵が20銭であった。戦後には松炭を焼く人がいなくなり、仕方がないので雑木の炭を使うようになった。

ふいご 鍛冶では箱形のふいごを用いて送風する。送風口に竹筒をさし、穴をあけた岩石を壺(火床)との間に据えて、火からさえぎった。豊岡の海岸に突き出た島山から、軟い岩石を取ってきた。大正期以降、ふいごを新しく作ることはなかった。中古のふいごを探してきて使った。古いふいごは隙間ができやすかった。ピストン部には木綿の綿を巻いて、空気が抜けないようにした。兎の毛皮で巻けば最良であった。箱の底にガラスを敷いて、ずりがいいようにした(滑りやすくした)ふいご

もあった。良いふいごを借りることもあった。女や子供にふいごを吹かせた。(図-18)

火ばさみ のみ等の道具をはさんで鍛冶をした。道具ばさみともいう。緒の切れた古草履でのみ等をはさむこともあった。また、先端を8~10割った竹筒に、のみの頭を産し込んで固定することもあった。(図-18)

鉄敷 長さ1尺程に切った鉄道のレールを使うことが多かった。蹄鉄屋も良く使っていた。地車は古くなった車輪に、四角い鉄の塊を埋め込んで鉄敷にする石屋もいた。車輪が割れないように、鉢巻といって、8番線ぐらいの太い針鉄でぐるぐる巻いた。(図-18)

(10)機械の導入 戦後、豊岡では石山から安山岩が掘り出しにくくなり、尽きたりした。昭和30年頃からは、瀬戸内海沿岸部の花崗岩石切場では急激な機械化によって、生産量が爆発的に増加した。また墓石を頼む顧客の嗜好が、光沢を持つ石膚を好むようになった。富岡でも昭和40年頃からは、花崗岩を移入するようになり、それに伴って石材加工機械の導入が行なわれた。

吉野政雄 昭和47年に切断機と研磨機を導入。最初は兵庫県のヤマヨシキから、後に熊本県久留米市の鹿毛の野村砥石から購入。

武野四平 昭和45年頃、広島県の大和石材から切断機を、鹿毛から研磨機を購入。

渡辺萬平 昭和40年末に切断機と研磨機を購入。

第5章 半島の石切場と石材分析

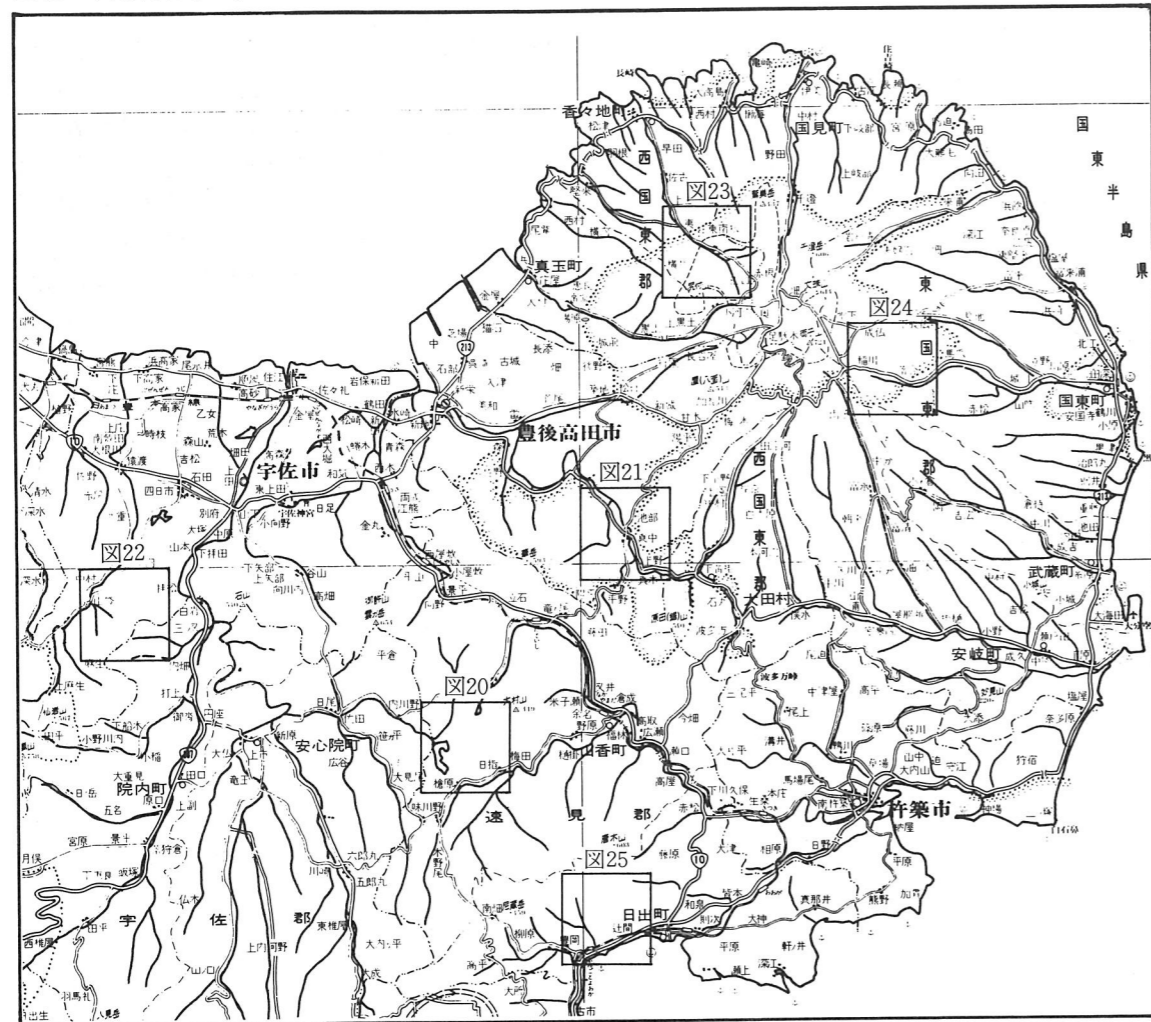
はじめに

58年度国東半島石工民俗調査において石切場所を確認調査と石材分析を行うことになった。

所在確認調査は国東半島全域が調査対象ということもあり、今までの聞き取り調査等の結果をふまえ、現在でも石材を切り出している所あるいは最近まで石材を切り出していた所を重点的に回ってみた。その結果、13ヶ所の所在を確認した。うち6ヶ所については現在も石材を切り出している。

石材の分析では、所在を確認した13ヶ所で計16個の岩石サンプリングを行い、それよりテストピースを作って偏光顕微鏡による観察、万能試験機による圧縮強度試験、X線回折装置による分析等の科学的手法を駆使し岩石へのアプローチを試み

図19 半島石切場所在地



た。なお凝灰岩を切り出している石切場のうち1ヶ所では、岩盤の上、中、下部より岩石サンプリングを行い、また現在石材を切り出している所の岩石とはほぼ同質の岩石でできた墓石のサンプリングも行った。以下順に述べていくことにする。

1、石切場の所在確認

(1)、山香町石河野の石切場は、L字型東向きに、幅120m、高さ15m位の規模で岩盤状の石材を現在も切り出している。石材は白い凝灰岩である。(1番)

(2)、山香町勢場(イ)の石切場は、南向きに、幅30m、高さ10m位の規模で岩盤状の石材を現在も切り出している。石材は白い凝灰岩である。この石切場より上、中、下層の岩石をサンプリング



図20 石河野・勢場(5万分の1)



写真 77 勢場(イ)石切場

した。(2番)

(3)、山香町勢場(ロ)の石切場は、L字型南向きに、幅20m、高さ3m位の規模で岩盤状の石材を現在も切り出している。石材は白い凝灰岩である。(3番)

(4)、豊後高田市間戸の石切場は、幅50m、奥行200m位の所に、岩盤状の石材を過去あるいは現在切り出している所が散在し、また切り出した石材を加工する小屋なども点在している。詳細は報告書第1集で述べた。石材は灰色で濡れると暗灰色になる凝灰岩である。この石切場で明治25年銘入りの墓石をサンプリングした。(4番)

(5)、豊後高田市上野の石切場は、桂川石岸三宮社北側に南向きに幅50m、高さ10m位の規模で岩盤状の石材を切り出していた。石材は灰白色で淡紫色の安山岩質の礫を含む凝灰岩である。(5番)

(6)、宇佐市山袋の石切場は、東向きに、幅50m、高さ5m位の規模で岩盤状の石材を切り出してい

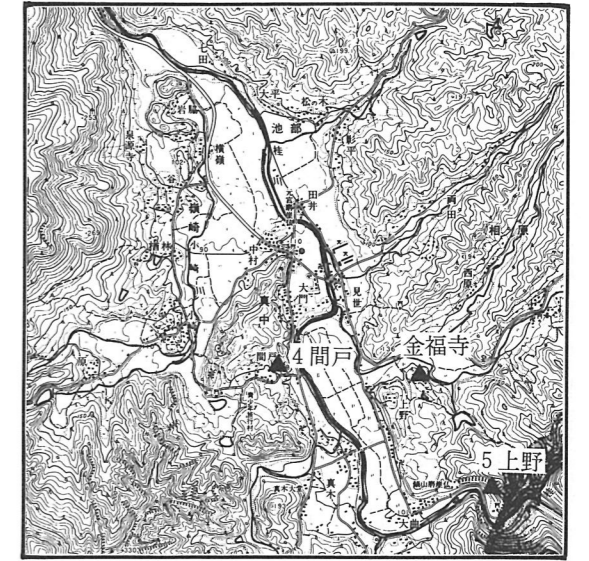


図21 間戸・上野(5万分の1)



写真 78 間戸石切場

た。石材は淡青色の安山岩である。(6番)

(7)、香々地町西狩場の石切場は、西向きに幅15m、高さ70m位の規模で山の傾斜に沿い露出岩様の石材を切り出していた。また現在も小規模ながら切り出している。石材は淡緑色の安山岩である。(7番)

(8)、国東町稲川(イ)の石切場は、横手川の北側に南向きに、幅100m、高さ5m位の規模で岩盤状の石材を切り出していた。石材は淡緑色の安山岩である。(8番)

(9)、稲川(ロ)の石切場は、(イ)の石切場に相対するように横手川の南側に北向きに、幅30m、高さ80m位の規模で、露出岩を切り出していた。石材は淡青色の安山岩である。(9番)

(10)、国東町行入の石切場は、横手川の北側に南向きに、幅10m、高さ50m位の規模で谷筋に沿うように露出岩を切り出していた。現在でも、小規模ではあるが切り出している。石材は淡青緑色の安

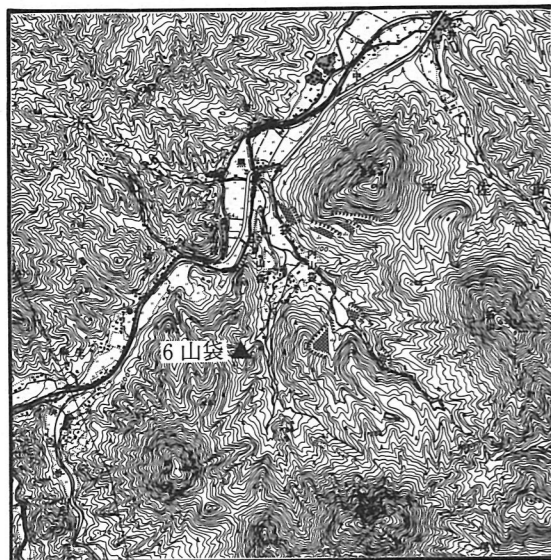


図22 山袋 (5万分の1)



写真 79 山袋石切場
山岩である (10番)

(11)、日出町一目城の石切場は、南東向きの谷筋に沿って谷の両側を高さ100m位までの規模で岩盤状の石材を切り出していた。石材は青黒色の安山岩である。(11番)

(12)、日出町桃の木の石切場は、南西向きに、幅200m、高さ100m位の規模で岩盤状の石材を切り出していた。石材は淡桃色の安山岩である。(12番)

(13)、日出町ナカダネの石切場は、桃の木の石切場の直下に南西向きに、幅200m、高15m位の規模で岩盤状の石材を切り出していた。石材は淡青色の安山岩である。(13番)

2、石材分析

石材の分析は、石切場の所在を確認したときに石材のできるだけ内部(フレッシュな部分)をサンプリングしたものについて行った。勢場(イ)の石切場では、色・成分・強度などの比較をするために、岩盤の上・中・下部よりサンプリングを

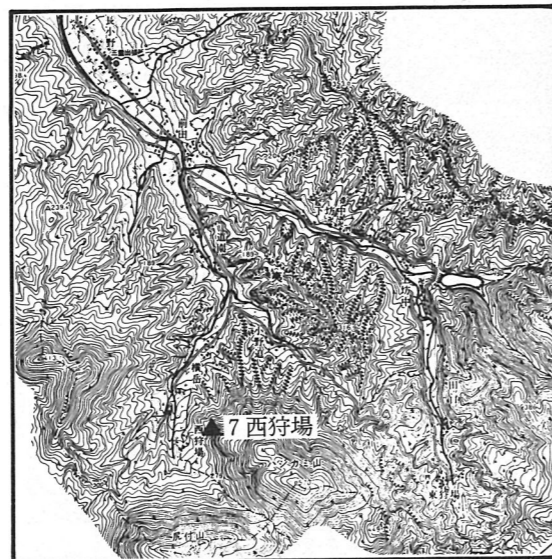


図23 西狩場 (5万分の1)



写真 80 西狩場石切場

行った。また、間戸の石切場では、経年変化の様子を知るために明治25年銘入りの墓石(現在切り出している石材とほぼ同質と考えられるもの)も同時にサンプリングした。圧縮強度試験では、テストピースとして直径5cm、高さ約10cmの円柱状のものを用意した。

表28から、岩石の種類は、凝灰岩と安山岩に大別される。また、凝灰岩は石基のガラスの流動組織が発達しており、斑晶は比較的混入量が少い。上野の岩石については、流動組織はあまりみられず、斑晶や安山岩礫などの混入が多い。安山岩は、石切場によって多少異なっているが石基の充填状態により6~10番と11~13番に分けることができる。勢場(イ)の岩石については、上と下では色の違いはあまり認められないが中については少し黒くなっている。また、間戸の岩石と墓石については色の違いはほとんど認められない。

表29から、比重については、凝灰岩と安山岩と

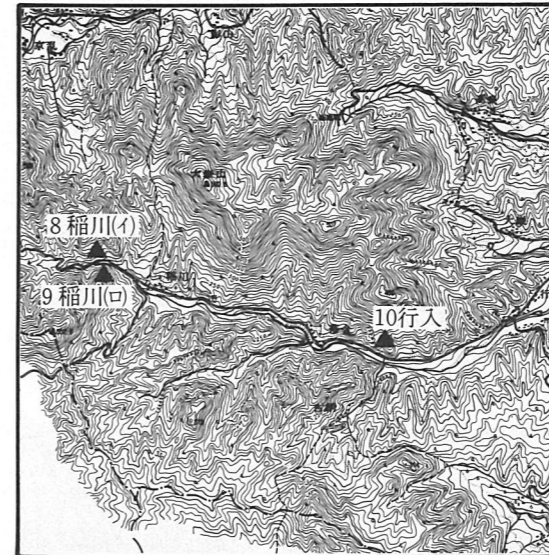


図24 稲川・行入 (5万分の1)



写真 81 稲川(ロ)石切場



写真 82 行入石切場

では2.00を境に分れる。また、空隙率については、20%を境に分れる。ただし、上野の岩石は凝灰岩であるが安山岩に、西狩場の岩石は安山岩であるが凝灰岩に近い値を示している。圧縮強度についても同様に400kg/cm²を境に分れる。ここでも上野と西狩場の岩石は互いに別の分類に入る。なお圧縮強度試験では、凝灰岩は堆積方向に対して垂

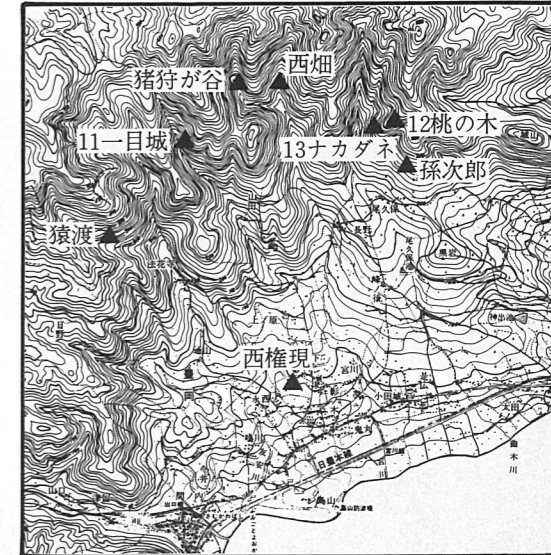


図25 日出 (5万分の1)



写真 83 一目城石切場

直に測定した。()内は堆積方向からの測定値である。安山岩についてはランダム方向からの測定値である。

これまでの結果をまとめると、凝灰岩は比重は低く、空隙率は高く、圧縮強度は低い。反対に安山岩は比重は高く、空隙率は低く、圧縮強度は高いといえる。勢場(イ)の石切場での聞き取り調査で、岩盤の上部は軟らかく、中部では硬くなり、下部になると再び軟らかくなるために岩盤の終わりを知ることができるのであった。それで岩盤の上・中・下部より岩石をサンプリングしたわけであるが、その結果は上部と下部はほぼ等しく、中部は高くなっている。これは聞き取り調査を支持する結果となる。また、墓石については比重は最低、空隙率は最高、圧縮強度は最低の値となった。ほぼ同質の岩石と考えられる間戸の岩石と比較すると、圧縮強度については $\frac{1}{3}$ 以下の低い値となっている。約100年の間にこれだけの劣化が



写真 84 石河野岩石写真

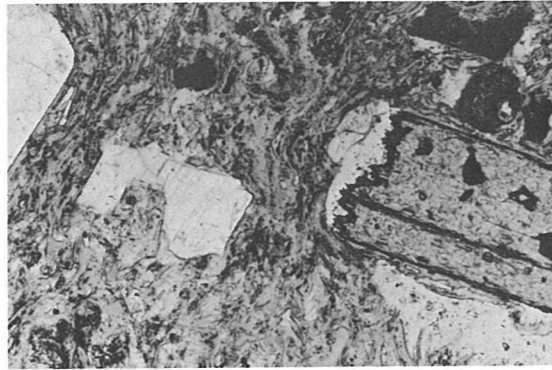


写真 85 同左単ニコル顕微鏡写真

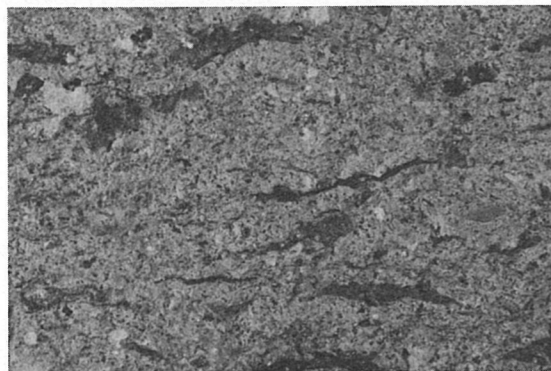


写真 86 勢場(イ)岩石写真



写真 87 同左単ニコル顕微鏡写真



写真 88 勢場(ロ)岩石写真

進んだと考えられる。一般に岩石の劣化は、それがどのような環境条件下にあったかにより大きく左右される。この墓石のサンプリングは、墓地内ではなくすでに間戸の石切場に運び込まれていたものについて行ったもので、最近まで墓地にあったことしかわかっていない。それで簡単に現在切り出されている岩石と比較することは危険を伴い、いくらか割引いて考えておく必要がある。凝灰岩は堆積岩の一種であるため、堆積方向と垂直方向との比較も当然必要となってくる。表29の圧縮強度値ではやや垂直方向が高くなっているが、岩石の圧縮強度試験における測定誤差が2割以上ある

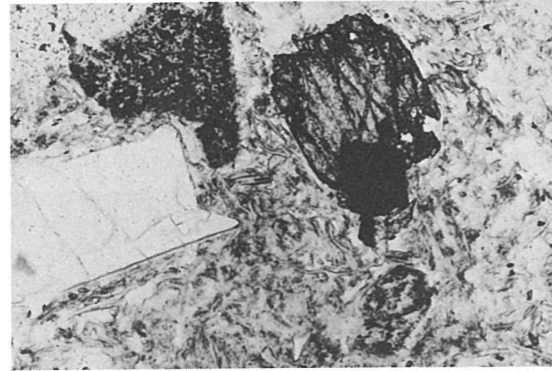


写真 89 同左単ニコル顕微鏡写真

といわれており、このことから垂直方向が高いとはいえない。テストピースの数を増し統計的に処理をしないと結論を下すのは難しいであろう。なお墓石の劣化により、その内側と外側に圧縮強度についてどれくらいの差が生じるかを知るため、墓石(立方体)の堆積方向、垂直方向についてそれぞれ中央部と端部(直径5cmの円柱なので端部といえるかどうか)よりサンプリングした。表29の値は中央部の値である。端部については、堆積方向が97.7kg/cm²、垂直方向が93.7kg/cm²となった。端部の方が低い値となり、さらに垂直方向が低い。この結果も十分誤差範囲内に入り参考値にと

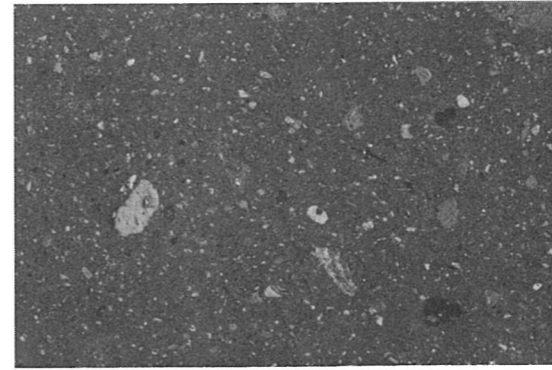


写真 90 間戸岩石写真

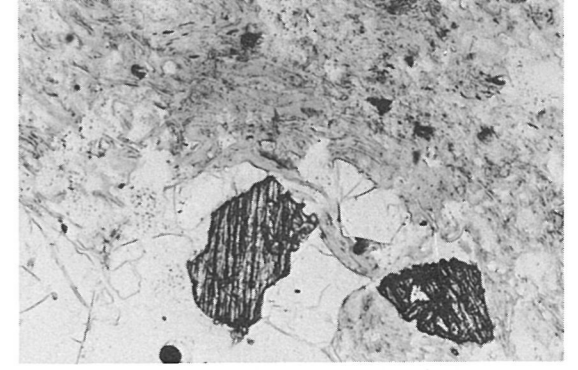


写真 91 同左単ニコル顕微鏡写真

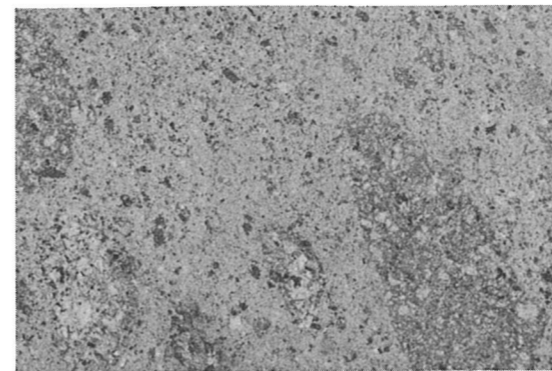


写真 92 上野岩石写真

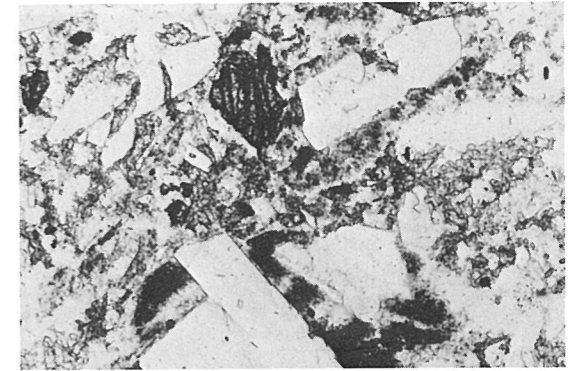


写真 93 同左単ニコル顕微鏡写真

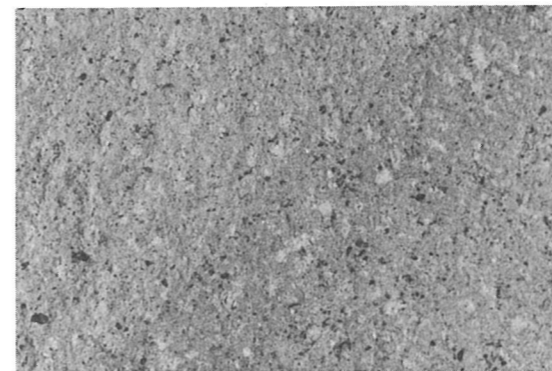


写真 94 山袋岩石写真

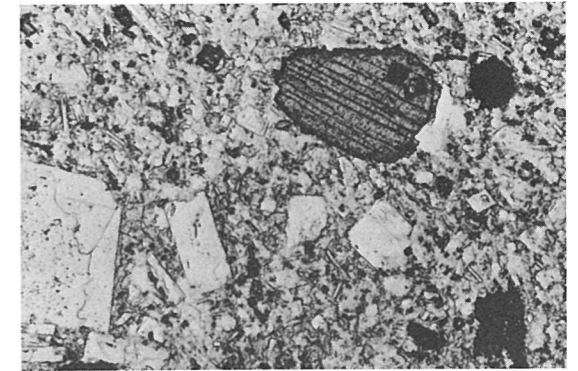


写真 95 同左単ニコル顕微鏡写真

どめておく。

X線回折分析では、偏光顕微鏡観察とほぼ同様の成分が読みとれる。斜長石のうち曹灰長石(1-abradorite)と亜灰長石(bytownite)の2つは、ピークが重なり読み取りにくい、すべての岩石について同定できる。輝石類のうち紫蘇輝石(hypersthene)は、4番と墓石以外で同定できる。普通輝石(augite)が同定できそうなものもあるがピークが重なり判然としない。紫蘇輝石はピーク値よりいづれも少量しか含まれない。磁鉄鉱(magnetite)は、4番と墓石以外は微量である

が同定できる。黒雲母(biotite)は、2番上、墓石、5番、6番で微量同定できる。SiO₂ 鉱物では、石英(alpha-quartz)が2番下、6番、9番で微量同定できる。また鱗珪石(tridymite)らしきもののピークが7番、8番、10番、12番、13番にでていいる。角閃石類では、透角閃石(tremolite)が13番で微量同定できる。

石材の分析では、サンプリングした岩石間だけでの比較を試みたもので、岩石の一般的な特徴を述べたものではない。墓石の分析では、製品になった石造品の劣化について言及したが、さらに古

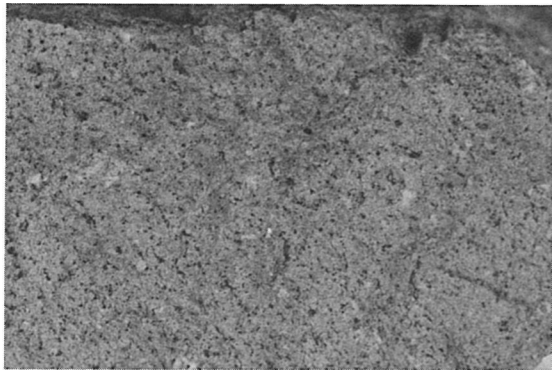


写真 96 西狩場岩石写真

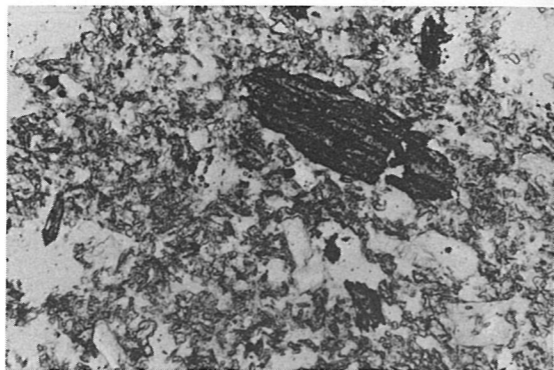


写真 97 同左単ニコル顕微鏡写真

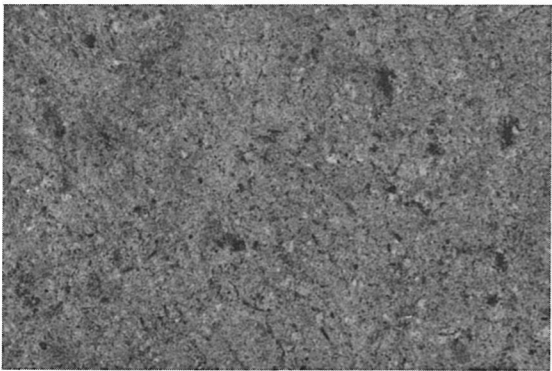


写真 98 稲川(イ)岩石写真



写真 99 同左単ニコル顕微鏡写真

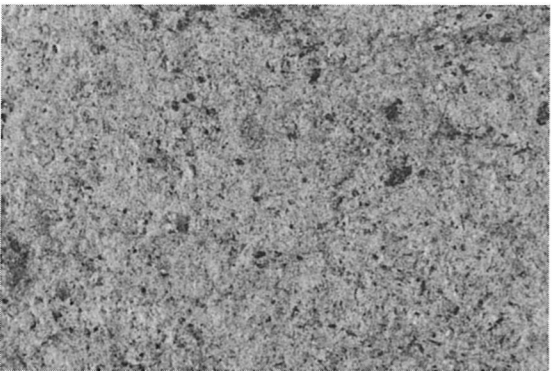


写真 100 稲川(口)岩石写真

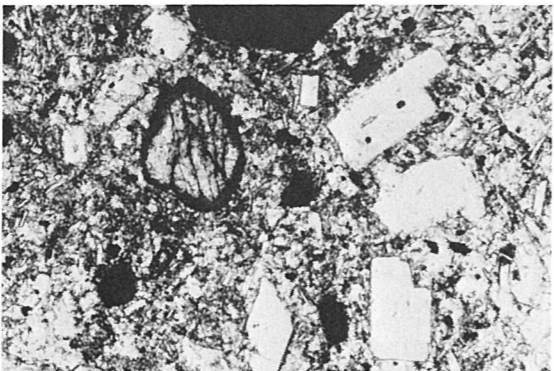


写真 101 同左単ニコル顕微鏡写真

い石造品ではどうなるのか、また別種類の石材による石造品ではどうなのかについては今後の課題として残った。さらに石工たちのノミ先に伝わってくる微妙な石材のねばりなどの測定も難しくできなかった。

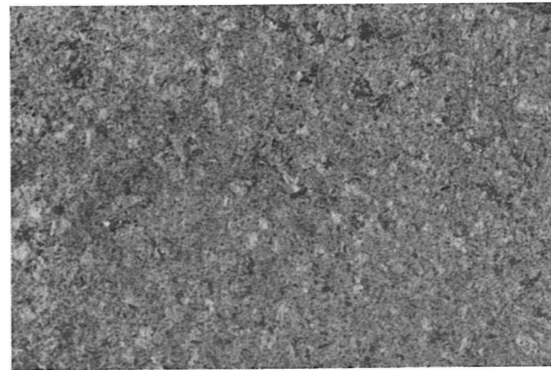


写真 102 行入岩石写真



写真 103 同左単ニコル顕微鏡写真

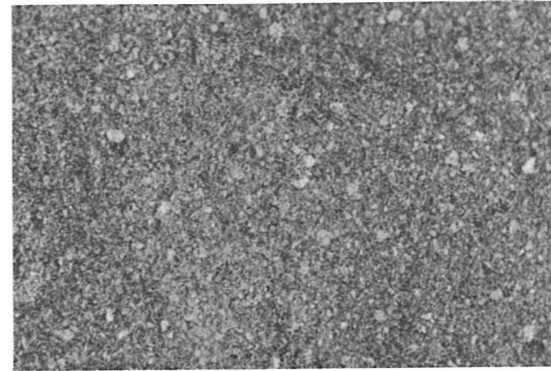


写真 104 一目城岩石写真

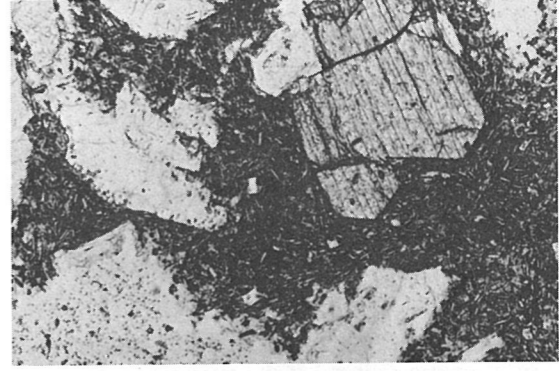


写真 105 同左単ニコル顕微鏡写真

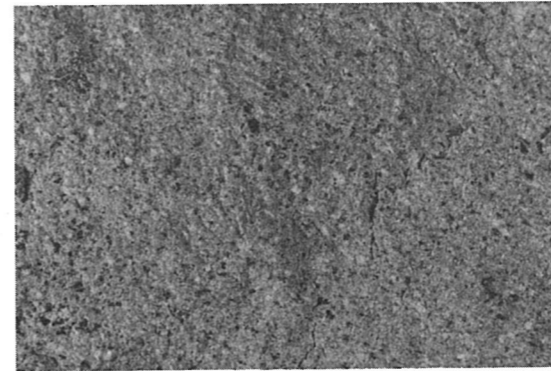


写真 106 桃の木岩石写真



写真 107 同左単ニコル顕微鏡写真

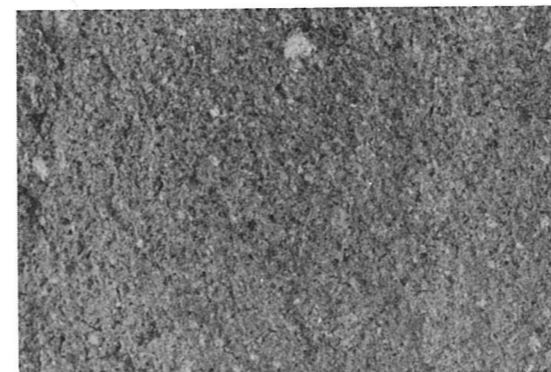


写真 108 ナカダネ岩石写真

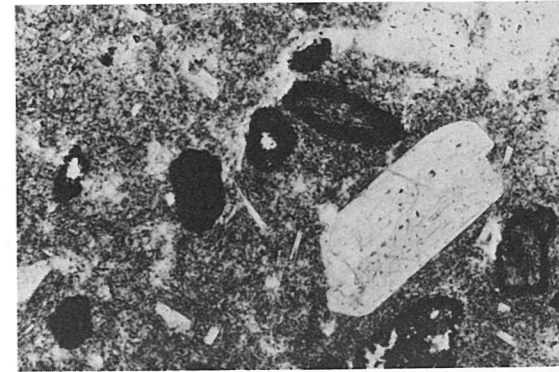


写真 109 同左単ニコル顕微鏡写真

表28 石材分析表(一)

No.	石切場	色	光石名	偏光顕微鏡観察	特 徴
1	石河野	灰白色	輝石安山岩質熔結凝灰岩	石基はガラス、非顕晶質で流動組織あり、斑晶としては斜長石が多	軽石・安山岩礫やや多し
2	勢場(イ)上	〃	〃	〃	〃
	〃 中	淡灰色	〃	〃	〃
	〃 下	灰白色	〃	くまた輝石を含む。	安山岩礫多し
3	勢場(ロ)	〃	〃	わずかに角閃石や黒雲母を含む、磁鉄鉱はや	斑晶・安山岩礫少し
4	間戸	灰色	〃	〃	〃
	間戸墓石	〃	〃	や多い、軽石や安山岩礫等を含む。	〃
5	上野	灰白色	〃	〃	斑晶、有色鉱物多し、軽石少し、大きい安山岩礫を含む
6	山袋	淡青色	輝石安山岩	石基は半晶質で微細な斜長名とガラスが充填している。斑晶は斜	輝石・角閃石をやや多く含む
7	西狩場	淡緑色	〃	長石で有色鉱物として	有色鉱物は少ない
8	稲川(イ)	〃	〃	普通輝石・しそ輝石・	〃
9	稲川(ロ)	淡青色	〃	磁鉄鉱・角閃石・黒雲母を含む。	輝石・角閃石をやや多く含む
10	行入	淡青緑色	〃	〃	〃
11	一目城	淡青黒色	〃	〃	わずかにカンラン石も含む
12	桃の木	淡桃色	〃	〃	有色鉱物が多く、わずかにカンラン石も含む
13	ナカダネ	淡青色	〃	〃	普通輝石・しそ輝石がやや多く、わずかにカンラン石も含む

表29 石材分析表(二)

No.	石切場	比重	空隙率(%)	圧縮強度(kg/cm ²)	X線回折分析
1	石河野	1.60	21.3	344.1	斜長名(labradorite, bytownite), 少量の輝石(hypersthene), magnetite
2	勢場(イ)上	1.75	26.0	334.9	〃, 〃, 〃, 〃, biotite
	〃 中	1.87	20.7	387.8	〃, 〃, 〃, 〃, 〃
	〃 下	1.66	27.7	320.0	〃, 〃, 〃, 〃, 〃, sio ₂ (α-quartz)
3	勢場(ロ)	1.64	21.7	377.2	〃, 〃, 〃, 〃, 〃
4	間戸	1.56	25.9	370.3(345.2)	〃, 〃, 〃, 〃, 〃
	間戸墓石	1.26	37.0	112.9(107.6)	〃, biotite
5	上野	2.25	5.3	559.7	〃, 少量の輝石(hypersthene), magnetite, biotite
6	山袋	2.28	4.7	719.1	〃, 〃, 〃, 〃, 〃, sio ₂ (α-quartz)
7	西狩場	2.06	20.6	197.9	〃, 〃, 〃, 〃, 〃, sio ₂ (tridymite?)
8	稲川(イ)	2.28	5.3	611.0	〃, 〃, 〃, 〃, 〃, 〃
9	稲川(ロ)	2.40	6.7	506.9	〃, 〃, 〃, 〃, 〃, sio ₂ (α-quartz)
10	行入	2.47	6.2	736.7	〃, 〃, 〃, 〃, 〃, sio ₂ (tridymite?)
11	一目城	2.36	11.5	850.9	〃, 〃, 〃, 〃, 〃, 〃
12	桃の木	2.29	17.4	432.9	〃, 〃, 〃, 〃, 〃, sio ₂ (tridymite?)
13	ナカダネ	2.55	11.3	767.8	〃, 〃, 〃, 〃, 〃, 〃, 角閃石(tremolite)

第6章 石工関係資料拾遺

はじめに

報告書『国東半島の石工1』で掲載しきれなかった「宇佐山袋の石工」と、刊行後に調査のできた「石工板井家法橋補任状」をこの章で紹介する。なお、今回の報告書編集に発見された「日出藩石工関係文書」も掲載する。

石工板井家の子孫である板井政男・ツヤ御夫妻は名古屋に住んでおられ、たまにしか香々地町に帰ってこられない。資料として、文化5年(1808)の板井甚蔵国俊から、大正10年(1921)の板井国正までの、5通の補任状を写真で紹介する。また、明治21年(1888)に大分県西国東郡役所の発行した、板井春哉の石工職鑑札があったので、参考までに掲載する。

日出・豊岡の近世石工関係文書は、日出町史編集室長佐藤暁氏が、自ら所蔵している関準平(日出藩家老)文書を調査中に発見されたもので、本報告書用に提供を受けた。日出藩において、石工達は御郡方や御山方によって、厳しい管理を受けていたことが判明する貴重な資料である。

1 宇佐市山袋の石工

宇佐市山袋の松本正氏所蔵の「質物山証文之事」は、江戸時代末期、山袋に石工が居たことの傍証となる。同証文は、天保8年(1837)、山袋政四郎が同村佐助へ、「御年貢御味進差支申候ニ付、書面之松山西冬5来ル寅之冬迄、真年三拾ヶ年切に売渡」したものである。質物とした松山には「石切場」と記してあるから、石屋の存在が考えられる。以下は松本正氏よりの聞き取りである。

大正時代、麻生谷には石屋が30名くらい居たが、戦前には現在の採石場の奥の高山と穴井に、6、7名くらいづつになっていた。現在は山袋に4名、黒に3名居るだけである。石屋の減少は原石の枯渇が最大の理由で、採石場にしている稲積山の石は記念碑に使えるが、艶がなく運び出しに便が悪くて石搭には使えない。写真「売渡証書」のように、平行に縦割りして山を売買していたが、隣りの人の山から出ても、自分の山からは良材の出ないノサッタ(不運)な人もある。男ブ(運)・女ブと同じように、石ブも人によって良否がある。



写真 110 質物山証文之事(松本正氏蔵)



写真 111 売渡証書（松本正氏蔵）

石ブの良い人は、家を葺き上げて財をなし、弟子も取っていた。片親や両親のない人が弟子入りをした。弟子の期間は5年であったが、1～2年は無報酬で、その後は低いけれども日当がでた。親方が嫁の世話をしたり、家計の面倒をみたりした。親方は60歳前後に隠退していた。55歳ごろに生き墓を建てて祝いをした。中仕上げをした粗石を墓地に運び、1日で仕上げた。中盤に「門人中」と刻み、主な弟子が法名の一番上の字に口紅を入れていたが、全部に朱を入れるようになった。モトイエ（親方）が料理を準備して、同業者や弟子達を招待した。死亡年月日や年齢は死亡後に刻む。山袋地区に建立されている師匠墓や、石屋と思われるものに次のような例がある。

- 1、歸元石翁良工信士 山村井三郎是好 嘉永六丑七月十五日行年五十二歳
- 2、山村喜十郎墓 明治三十一年旧三月十三日
- 3、山村円之助事 門弟中 大正九年一月廿一日卒 当年五十二歳
- 4、山村寛市 門弟中 大正十一年五月十三日建之
- 5、俗名松本佐六 大正十三年二月還暦ニ當建之 昭和十一年五月三日亡 行年七十九歳
- 6、釋良隆居士 山村保太郎武英 昭和八年六

月十七日往生

- 7、松本寿太郎碑 門弟中 昭和九年三月建之 昭和十八年四月八日卒 行年七十歳
- 8、山村藤四郎墓 門人中
- 9、鐵心石翁居士 門弟中
- 10、栗原公隆墓

四日市（現宇佐市）の農学校を卒業した。昭和22年に復員してから、父の跡を継いで石屋になった。石積みをする石工を垣石屋とか積み前といい、石塔作りの石工は石屋と通称される。耕地面積が5～6反であったが、2人の息子に大学教育を受けさせることができたのは、石屋をしたためだと思ふ。

戦後、中村の人から山を買った時は良材が出たが、3～4年しか採れなかった。石塔用の原石をヒャク工石と呼び、赤土の間に層を成している。上の方は硬くて、昔の道具では駄目であった。石を切り出すには、しくりといって、土や役に立たない石を取り除く。黒色火薬で大割りにする。火薬を詰める孔は突きのみで突く。急所を狙って、孔の深さや火薬の量を加減する。山の頂上では、身体をロープで縛り、水や突きのみを引き上げ、危険を冒して孔を突いた。一丈堀るのに1日がかりであった。小屋で、斧で原形を整えて墨を打ち、均しや両口でこぶを取ったりしてならした。

原石が入手難になってから、長洲の南氏から特許を譲り受け、人造石の石塔作りを約8年間ほどした。人造石の石塔は、材料費が少なくて良かったが、壊れると変色すると嫌われたので、9年前から機械を導入して、御影石を使うようになった。尾道の大和機械から、切削機（大、中、小）、研磨機、コンプレッサー、チェーンブロック、字彫り一式など購入し、御影石は行橋から仕入れている。原石代は才で御影石3,700～12,000円、徳山石7,000～8,000円、庵治台30,000円である。注文は御影石の累代墓が主で、地石（安山岩）の注文は1割にも満たない。山に点在している、野石（転び石ともいう）を使うが、石塔の部分を描るのが難しい。田染の石工が、機械を導入したことは工具屋から聞いている。

人造石の累代墓は、基礎をコンクリートで固め、石垣を築いて、玉垣・勾欄で囲った台座の上に、穂石と碁盤、盤、割盤下回りの四重を立てた。現在受注している石塔は、次の5種に大別される。

イ 6寸穂 穂石（高さ1尺2寸・幅6寸・トモ（奥行）5寸）と盤である。水子から5歳くらいまでの童男・童女墓。

ロ 7寸二重 穂石（高さ1尺5寸・幅7寸）と盤、土盤の二重。10歳前後の少年・少女墓。

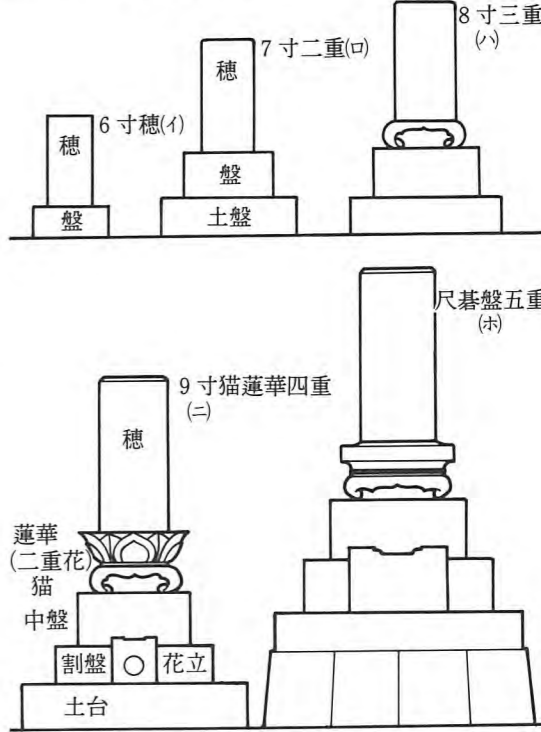
ハ 8寸三重 穂石（高さ1尺8寸・幅8寸）と猫、盤、土盤、の三重。20歳までと婆さんにも使う。

ニ 9寸猫蓮華四重 穂石（高さ2尺・幅9寸）と、蓮華二重花、猫、中盤、割盤土盤に花立てがつく。主人や爺さん。婆さんの夫婦墓。

ホ 尺碁盤五重 穂石（高さ2尺5寸・幅1尺）と、碁盤、中盤、割盤、下回り、垣石に花立てがつく。垣石の下の基礎はコンクリートの練りつきをする。累代墓。累代墓は希望によって、穂に沈を入れて笠を載せたり、碁盤の代わりに巻き台に猫、あるいは蓮華二重花に、敷きなす（座布団ともいう）にすることもある。土盤には3枚と4枚とがあるが、共に前面は1枚で、中は空にする。

田染石工との最も大きな相違点は、田染は穂石の高さと呼ぶのに、山袋では幅を呼称にしていることである。また田染の下地盤、二盤を、それぞれ土盤、盤と呼んでいる。田染石工とは、西国東郡や宇佐市で競合しているため、田染石工の長所・短所をよく把握している。田染石は軟いので彫刻が多く、細部の細工や仏像が上手であるが、石を

図26 山袋の墓石の形態



辛抱（節約）しているという。

戦争直後は、人々が生活に追われていたので、墓の注文は少なかった。一度に3本頼まれた時は嬉しさのあまり、手付金をマンマ（祖霊）様に供えたほどであった。餅搗き臼は石目が小さかったので、あいどりの時に手が荒れないと喜ばれた。挽き臼は粗目の硬い石で小型のものを作った。やがて戦死者の軍人墓の注文が増え、墓7、その他3の割りになった。その他は白類の外に、灯籠・仏像・唐獅子などであり、墓の注文の少なかった間年（昭和31年）には土台石なども作った。転び石で1間以上のものはなかなかとれなかった。

親類や知人を伝手に徒歩で注文取りに回った。昭和30年代に入ると原付きで2年、35年からはカブ、38年からは自動車を使った。注文に回るのは宇佐・下毛地方が主で、福岡県や西国東郡が二次圏である。製品は山からそりで下ろし、馬で運搬していたが、車力から馬車を使うようになった。馬車賃は石工の負担であったから、山袋に馬方が増え、盆・正月前には製品を運ぶ荷馬車が市をなしていた。4軒の酒小売店は角打ちをする人々で賑わった。馬車は車輪がタイヤになり、ブレーキがつくなど改良された。

硅肺病は、寒気がして咳が出たり、ひどければ

じゃらじゃら声になり、四肢のシシ（肉）が落ち、肺結核に似た症状であることは知っている。地石を使った若い時代は、湿気が多い山であったが、石を乾燥させないようにし、人造石を使う時もマスクを掛けて仕事をした。硅肺病にはかからなかったが、10年ほど前、数年間寝たり起きたりした。

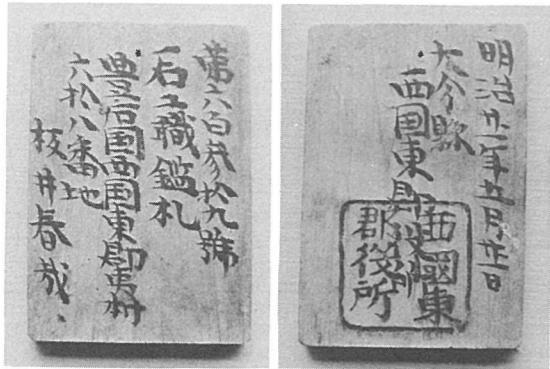


写真 112 石工職鑑札

3 日出藩石工関係文書

〔ハシ裏書〕御山方日記書抜

文化十四年丁丑三月廿六日

申渡覚 日出村 兵左衛門

右者御場所柄をも不相弁 私ニ石取揚候而致細工候趣不届至極ニ候 依之急度御答も可被仰付処

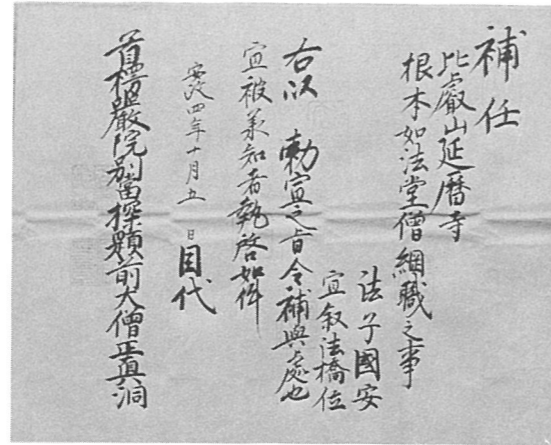


写真 115 板井国安法橋補任状

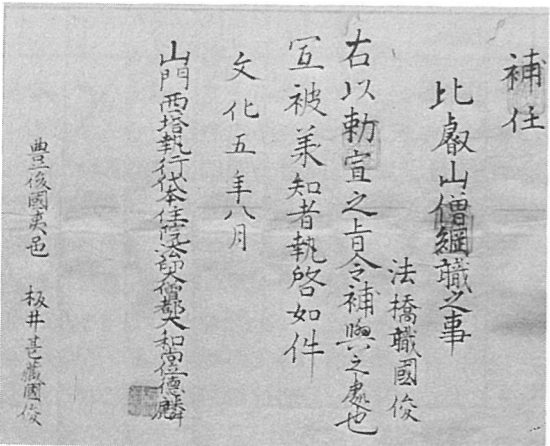


写真 113 板井国俊法橋補任状

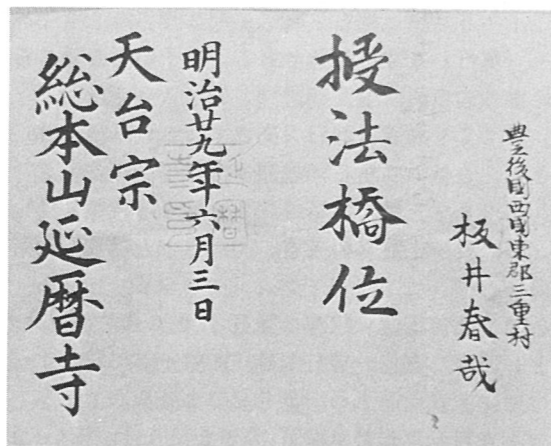


写真 116 板井春哉法橋補任状

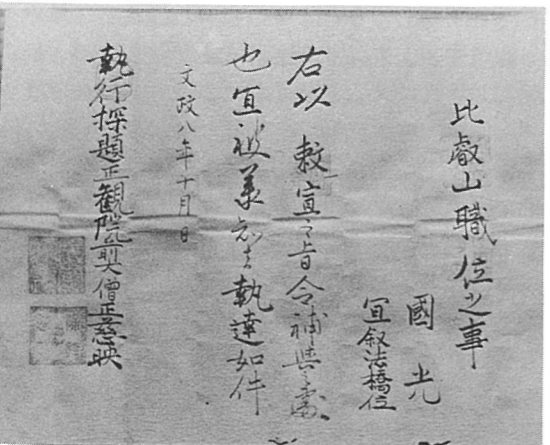


写真 114 板井国光法橋補任状

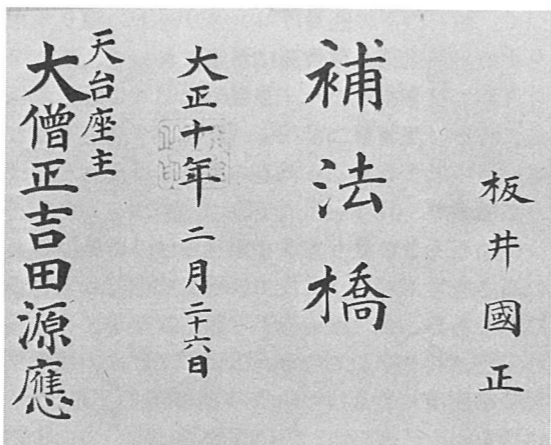


写真 117 板井国正法橋補任状

格別之御憐愍ヲ以料錢五百文可差出候 以来心ヲ用可申候

津嶋村 新六

右之者 津嶋石割場ニ而石取候外 御役人引請改候筈之処無其義 猥ニ取候趣 我俣之致方ニ付急度可被仰付之処 格別之御憐愍ヲ以 料料錢三百文可差出候 以来心ヲ用可申候

右之通 可被申渡候 以上

帆足蔵人

三月十六日 宮崎直記

杉原帯力

御郡方三人当

文政二五卯十二月廿四日

津嶋村 新六伴

虎吉

右之者 去ル五月日比浦ニ而願石致候節取添致不届之至ヒ候 依之急度可被仰付所 格別以御憐愍過料錢三百文差出候様被仰付候

〔ハシ裏書〕御山方日記書抜達

文化十癸酉十五日

一、石之義ニ付是迄之通被仰付被下候様村方下方之者共歎出候由 志手清右エ門 宇都宮嘉十郎 大神弥七郎 工藤久太郎罷出 一緑共歎申上候由申出ル

同 十七日

一、仁王五郎ハ呼出し候而申聞候者 石之義申出候処是義ハ御評議之上被仰付候義差支ト乍申一通御歎申上候茂如何歎義ニ有之候間 何ニ差支ト申儀書カヘ歎書急ニ差出候様可被致旨申聞ル

十二月朔日

一、今日 里目御庄屋共呼出し 先達而被仰付候里目中石之義銘々御百姓共自由取扱義御差止之処 右ニ而者百姓共誠外迷惑之義多ニ付是迄之通御免被下置候様歎書御庄屋共連名ニ而差出候ニ付 御用番江差上置候処 割石并野石共稼ニ取扱候義も御免被下置候様歎出候迄相調候様被仰付候ニ付 比段相調候処 右稼ニ仕候義ハ決而御歎申上候義ニ而八無之段 同 二日

一、今日 兩人御役所ニ罷出 昨日御庄屋共手前相調候石之義申上候処 百姓共稼ニ取候石之義ハ先達而被仰付通 其外之義者是迄之通勝手次第ニ取扱候様被仰付候

文政十丁亥年 日記写

六月廿三日

一、御役所江兩人罷出 石之儀以来者石細工致候者并右取扱候者ニ札渡置 無札之者差留申候様不被仰付候而ハト成極リ付申段 申上候処。随分可宜候間其通ニ可致旨御用番川村四郎右エ門ノ御沙汰御座候

九月二日

一、先達而伺通相濟候石細工并野右等御城下江持出候者 是迄 御運上差出候扣あらく 紛敷調方行届不申候ニ付 以来御免札御渡ニ可被仰付段 仁王藤四郎 津嶋城内久兵衛 今日呼出し沙汰致候事 尤石細工仕候者ハ御免札切手五匁 野石持出し相拂候者ハ御免札切手三匁宛可差出候 当春ノ石細工野石持出候分ハ御免札請候得者御運上是迄改分御免可被仰付段沙汰致候事

文政十一年戊子年

一、当子年ノ石細工方 野石海石持出御運上之義左之通相極ル

一、石細工士候者老人前御免札巻枚七錢五匁ヅツ
一、夜石持出候者 掛目拾貫目ニ付錢式文ヅツ
海石右同断御用石船巻艘分錢式百四拾文ヅツ
是迄之通御運上相納筈左石燈籠 白品々細工者拾貫匁ニ付三文ヅツ

一、野石持出し候者 是迄右之通拾貫目ニ付式文ヅツ御運上 其度々御山方江相達改を請御運上差上来候得共 紛敷候ニ付 比度ノ相改日出村 津嶋村之者共江御免札願出ニ付相渡ス巻枚ニ付七錢三匁ヅツ

右之通 御郡方 御山方日番ニ被仰付ル

大分県立宇佐風土記の丘
歴史民俗資料館報告書第2集

国東半島の石工

発行日 昭和59年3月31日

発行 大分県立宇佐風土記の丘

歴史民俗資料館

宇佐市大字高森字京塚 〒872-01

Tel 09783(7)2100

印刷 日の丸印刷株式会社

別府市中央町9-15

